
ぐしっ！

寿寿寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぐしっ！

【Nコード】

N5054S

【作者名】

寿寿寿

【あらすじ】

魔導文字を道具に込める事で様々な事象を引き起こす『具師』の少女と、その仲間たちが巻き込まれる破天荒な日常。

のちに英雄と呼ばれることになる彼らの、歴史では語られなかった笑える真実が明らかになる。

歴史は信じちゃいけない。

そんな喜劇英雄譚。

プロローグ（前書き）

初めての投稿で、ドキドキです。

プロローグ

グラナダ王国首都から東に馬車で約10日、マリアンジュという石都が見えてくる。

石都と呼ばれるままに、その都市の基本建材は黒色の石である。周りの自然豊かな風景に決して溶け込まないマリアンジュは、重厚な雰囲気醸し出していた。

四方をぐるりと囲む黒壁に深い堀と遠見台。

遠くの地より来た旅人たちは、マリアンジュを『要塞』と評するのも頷ける。

だが、マリアンジュに住む人々は底抜けに明るく陽気な者たちばかりだ。

旅人たちは都市の外見に感嘆し、そして通行門をくぐって歓声を上げるのだ。

「美しい花の都、マリアンジュへようこそ」

＊

東西南北に伸びる大通りから無数に伸びる花小路のひとつ、梅路うめのみちを埃っぽいフードつきのマントを纏った男が足早に通っていく。

石壁の上から迫り出すように伸びる梅や柳の木、歩道に乗り上げんばかりに繁茂するプランターのスミレや水仙を慣れたように避けて掠りもしない。ただ、男のマントに煽られた風が、今が盛りの花を僅かに揺らすのみだ。

梅路から更に細い路地へ男は入っていく。

階段を上り、マリアンジュを見渡せる高台へ出る。

石の黒と植物の緑のコントラストが朝日に照らされて美しい景色に、男は興味を示さない。

甘辛く焼き上げた豚が容易に想像できる、いい匂いを漂わせる食堂の脇の急な階段を下る。朝食をとりに来た職人たちの喧騒が聞こえている。

その階段の途中、人が一人やっと通れるほどの路地がまるでどこからか取って付けたかのように続いていた。

壁の窪みにはランタンと包丁を持った熊のぬいぐるみが鎮座している。この路地の奥を守る守護者であるが、どう見てもメルヘンに化けた殺人鬼だ。

男は入り口の光景からして入るのを躊躇うその路地を進む。

路地の突き当たり、そこに四方を壁に囲まれているのにもかかわらず、日当たりのいい庭のある黒石の壁の一軒家がある。その家の前で、男はようやくその足を止めた。

呼吸を乱していないにもかかわらず、男は扉の前で大きく深呼吸をする。一回、二回、そして三回目の深呼吸の後、悟りを開いたような顔でドアノブに手をかけた。

「平常心平常心平常心」

唱える言葉はすでに念仏のようになっていく。

意を決したように、ノブを引く。

「こんの、馬鹿たれえええええ！」

「うるっさいなあ！ アンタは私のとーちゃんかつ！」
ぱたん。

途中まで開けたドアを、男は無言で閉めた。

広がる大空を見上げると、花の蜜を吸いに来たホロロ蝶が銀色の燐粉を振りまきながら飛んでいる。その光景に30秒ほど意識を飛ばすと、もう一度ノブに手をかけた。

ノブを引く。

「お前はもう少し落ち着きというものをだな…っ」

「朝から怒ってお腹空かない？ おっちゃんどこに食へ行こう」

「人の話を聞けえええ！」

家の奥から聞こえてくる怒号。そして、少女らしい鈴のような笑

い声。

男は深く溜息を吐くと後ろ手に扉を閉める。声の聞こえる部屋へ足を向けた。

廊下の脇にずらりと並ぶ蜜色の籠の中には、見たこともないような植物がいくつもの束になって入っている。天井から下がる平らな籠にはまだ乾燥しきっていない植物の根や何かの丸薬。倉庫代わりの部屋の前を通ると、奇妙な異臭までする。

男は相変わらずの家だな、と口元に笑みを浮かべた。

「ともかく、一度謝罪状を書くべきだ」

「書かないってば。そんな、紙がもったいない。それよりさ、そろそろシトラスが帰ってくる頃じゃない？」

フードを後ろへ払い、男は部屋へ突撃した。

「呼ばれて飛び出てジャッジャジャーン！ シトラス・バートンただ今帰りましたあっ！」

「コレはどうでもいい！ とりあえずはお前の身の振り方だろう」
枯れ草色の髪に明るい緑の目をした陽気そうな青年シトラス・バートンは、『コレ』呼ばわりされただけでなく更に『どうでもいい』とまで言われて入ってきた勢いのまま床に突っ込んだ。

家具の少ない部屋にいたのは、10歳ぐらいの黒髪の少女と同じく黒髪の20代半ばの青年である。

「旦那、言うことが酷いよ。いくら俺でも傷ついちゃうよ？ っ
てーか、今回は何をどうした訳？」

今回、である。

旦那と呼ばれた男が少女に対して怒鳴り散らすのは何もこれが初めてというわけではない。

可愛らしく儂げな容姿に似合わず件の少女はことあるごとに：いや、何もなくとも問題と呼び寄せ引っぱり込み作り出す問題児なのだ。

そんな少女の自称保護者を名乗る男の胃に穴が開かないかシトラスは常に心配しているのだが、この男も人生を悲観して生きている

ような繊細な人間ではないため、シトラスの心配は無用なのである。

「ランが具師として王城に呼ばれたのを知っているだろ？」

「あー、センタキ作りに」

「あれのお披露目の時にな、あろうことかこの馬鹿、大爆笑しやがった」

「：何で？」

センタキ。具師であるこの少女の今の時点での最高傑作などと巷で言われている、魔導文字を書き込んだ自動で洗濯をする導具である。

ちらりとシトラスがラン、と呼ばれた少女を見やる。

少女は思い出し笑いをするように、にやりと頬を緩ませた。

「いやあ、だってさ『これが稀代の具師による最高傑作、センタキです！』って説明とともに赤いビロードの布を取ると、そこにはただの樽に『全自動洗濯機』って日本語で書かれたガラクタが鎮座してる。これが笑わずにいられるかっての！で、それをジーンは10日ぐらい延々と説教してる」

「俺は嬢ちゃんの説明の半分も理解できないんだけど？」

とりあえず10日間の説教には少女に対して合掌を送っておく。

「それで、場の空気が一気に悪くなった」

「私が作ったものに私がケチつけてるんだから、過剰反応する必要ないと思うのね」

「センタキを作らせた国王陛下にケチつけてるようなもんだ」

「じーちゃん、笑って許してくれたよ？」

「陛下をじーちゃん呼ばわりするなっ！」

「ジーンはもう少し楽に生きるべきだと思う」

「ほっとけ！」

ぽんぽんと言葉の応酬を始める二人を、シトラスは生温かい目で見つめる。

この少女はどこへ行っても、相手が誰でも、こうなんだと思うのだ。ジーンと呼ばれるこの強面の男の少女に対して10日間も説

教し続けるぐらい過保護なもの、いつも通りだ。

シトラスはにんまりと笑みを浮かべる。

「それよかさー、朝飯食いに行こうよ。俺お腹ペコペコ！」

「はいはいはい！　さんせー！」

「ラン！　シトラス！　お前たちは揃いも揃って……」

騒がしい音を立て、少女は部屋を飛び出した。シトラスもそれに続き、最後に大きな溜息を吐いたジーンが苦笑しながら追いかける。

3人は朝日輝くマリアンジュの都市^{まち}へと出掛けていった。

これは、後の世で英雄と称される人々の、笑いに満ちた喜劇英雄^{コメディサ}譚^{イガ}である。

プロローグ（後書き）

具師についての説明は、次回で。

ランの家を守る守護者、ランタンと包丁を持ったテディベア。
魔導文字に『ジェイソン』と記す。

チェーンソーが存在しないのが残念ね、とラン談。

なぜなに講義（具師とは何ぞや）（前書き）

お気に入りの小説は、毎日更新されてるかどうかチェックして一喜一憂してました。ごめんなさい！ 一話書くのがこんなに大変だと思わなかった！

なぜなに講義（具師とは何ぞや）

創世神モルメアがこの世界を創った後、一番最初に生まれたのは文字であったという。

神の周りをふわふわと漂うだけの細い糸状の文字たちは、互いに絡み合い単語を生み出した。

始まりは『光』と『闇』、次に『大地』そして『海』。文字が生み出したそれらに、神は自らの子供たちを産み出すと彼らの名前としてそれぞれの治めるべきものを定めさせた。

文字が『植物』や『動物』『人』を生み出せば、神は彼らを祝福した。

神が『希望』や『愛』や『憎しみ』の感情を産み出せば、文字はそれらに名前をつけた。

そうして世界が今の姿となったとき、神は人に文字を教えたのだ。自分と同じ姿をした人を、神は一番慈しんだのだという。

だが、人は愚かだった。

様々な現象を引き起こす文字を、人は自らの欲望のために使い争いを起こす。世界は瞬く間に破壊され、同じ人間だけでなく多くの生き物がその命を失うことになった。

神はその所業を嘆き悲しんだ。

そして、人から文字を取り上げた。

文字を取り上げられた人は、今までの行いを悔いて神に縋りつく。

「遠き地の恋人にどうやって愛を囁けというのでしょうか？」

「沢山の先人の知識をどのように後世に伝えたらよいのでしょうか？」

「神の偉大さを一字一句間違えず、どのようにして人々に伝えたらよいのでしょうか？」

神は人を嫌いになったのではない。その行いに、悲しんだだけだ。そして神は、許しを請う人々に『文字』を与えたのだ。

どんな現象も起こらない、ただ記録して伝えるためだけの『文字』を。

それが世界共通言語『モルメア語』である。

＊

「今ではほぼ失われた『力ある文字』だが、それを唯一再現できるのが具師だ」

ジーン・ロレッツォはそう言いながら黒板に具師、と書き込んだ。一斉にノートにペンを走らせる音がする。振り返ると沢山の少女が一生懸命にノートを取っていた。

「さて、そもそも具師とはどのようなものなのか説明しよう。おそらく君たちは、具師と錬具師、魔具師の違いも薄ぼんやりとしか分かっていないだろうからね」

マリアンジュの中央に建つ領主の館は、その無駄な広さを生かして子供たちの学校も兼ねている。領主の館なら大きくしちやえ、という安易な発想のもと建築が進んだはいいが、いざ建ってみたら維持費にやたらと金が掛かり結局館の一角は埃まみれで放置されていた。そこを現在のマリアンジュ第一学校の校長が格安で借り受けたのである。

グラナダ王国では8歳から10歳までの2年間を義務教育期間として、簡単な文字の読み書きや算数、一般常識を教えていた。

現在、ジーンはその学校で一般教養を教える派遣教師をしている。元々はギルド所属の傭兵であるが、ランが導具の製作に入ったために依頼を受けることができなくなったのだ。

つまり、ランは仕事に熱中すると寝食を忘れるのである。

保護者を自称している手前、ランを衰弱死させるわけにはいかない。朝昼晩の3食をきっちりと食わせ日付が変わる前には眠らせてやらなければ、ジーン自身が心配で眠れない。

だからこそ日雇いで昼に一度家まで帰れるぐらいに融通が利く派

遣教師などをしているのだ。

「まずは、一番簡単に魔具師からいこか。魔具師はモンスターから取れる素材を使って主に武器や防具、モンスター素材の道具を作るのが仕事だ。白銀狼の牙を粉末にした狂化薬や鳴き鼠の頬袋を使った鳴弾なるたまなんかが有名だろう」

モンスターの素材を使う道具は、全て魔具師の作る魔道具だと認識すればいい。

「それじゃあ具師と錬具師だな。この2つは時として混同されることがある。具師は道具や宝石などに魔導文字を刻むが、錬具師は魔方阵を刻む。魔方阵は精密になればなるほど複雑化し、魔導文字のように見えるときもあるから、具師は錬具師と同じものだーなんて言った奴もいた」

それを言った奴は具師連中に張り倒されたそうだ。

「魔方阵は魔術の簡略や強化のための小道具みたいな扱いだからな、魔導文字とは別物だ」

間違えるなよ、テストに出るぞというと皆揃ってノートに顔を埋めた。

「そもそも魔導文字とは何ぞや、と考えたことはないかな？」

生徒たちを見回すと、一人の男子生徒が手を上げた。

「ええと：『力ある言葉』ですよね？ 魔導文字そのものが魔術の基礎的な外殻を形作るため、魔力を流し込むだけで発動する」

「君はホントに10歳か？ ま、概ねそれで正解だ。ただ、魔導文字で発動するのは魔術とは言えない。魔導文字の本質は『魔力を変質させる力』なんだ。魔術が様々な法則と呪物を使って世界に働きかけることで新しい現象を作り出す：たとえば何も無いところに火を熾すとか、だが魔術文字は魔力そのものが火という存在に作り変えられる」

その辺の法則は解明されていないが、とジーンは呟いて黒板の『具師』を大きな丸で囲んだ。

生徒たちは今までの説明を必死になってノートに書き写している。

もう少しゆっくり喋るべきだろうか？

「それでは本題に移ろう。具師とは、その魔導文字を書くことができる稀有な人々を言う。だが、魔導文字を見る機会に恵まれれば俺だって書き写すことは可能だが、結局発動しないだろう。何故なら、俺がその文字の意味や成り立ち、構成なんかを理解できていないからだ」

生徒の一人と目が合った。話が早い、と目が語っている。

ジーンは一息つくように言葉を切ると、生徒たちをゆっくり眺めた。

「つまり具師は文字を知り、魔力がどのように変質するかを理解できる。しかも魔導文字は秘匿とされてるから、ごくわずかな連中にのみ知識と技術が継承されるんだ。だからこそ具師の数は極端に少ない。それから、その魔導文字を刻んだものを全て『導具』と呼ぶ」

次いで、黒板に錬具師と書き込む。

「錬具師の作り出すものは多岐に渡る。大きく分類するなら、モンスター素材でないものと魔導文字を刻んでいないものは全て錬具師の作る錬具と考えればいい。解毒薬みたいな薬草を煎じたもの、宝石を使った護石、魔方陣を書き込んだ護符とかな。はい、次重要。回復薬の瓶に魔導文字を書き込んだり護石に加工した宝石の表面に魔導文字を刻めば、総じて導具に分類される。これがどういうことか分かるな？」

具師と錬具師が混同される理由がここにある。

「導具と錬具を比べると、売値は導具のほうが圧倒的に高いのは君たちも知っているだろう？ 少しでも高く売るために、錬具師が具師と一緒に仕事をする事が多い。具師にも導具を一から作るよりも加工されたものに魔導文字を刻むほうが簡単だから、彼らにもメリットはある」

巷に巡回る導具そういうものがほとんどだ。

ランは例外。

一から自分で作るほうが楽しいとか言って、錬具師の真似事もすれば魔具師の真似事もする。それで寝食を忘れるのは止めてもらいたいものだ。

「例えば甲冑に『硬化』の魔導文字を刻む。戦闘中に自分で魔力を流すなんて初心者はもとより中堅の傭兵にも実は難しいから、自動で魔力を流してくれる錬具を装着する。だったら、魔力を込めた錬具に魔導文字を刻んだほうが早いんじゃないか、という話になるだろう？ その辺も混同される原因のひとつでもあるな」

ただし、とジーンは付け加える。

「魔導文字が魔力を込めれば、例え作られてから千年経っていても文字さえ消えていなければ発動するのに対し、魔力を込める類の錬具には込められた魔力が枯渇すればその錬具は割れてしまう。そういう使い捨てだっていうことは頭に入れておいて損はないぞ」

と、キリの良い所で教会の鐘がお昼を告げた。

「じゃあ、今日はコレで終わりな」

そう言うと、生徒たちは一斉の教室を飛び出していった。

なぜなに講義（具師とは何ぞや）（後書き）

魔導文字を隠すようにして作品を作る当時の具師たちの中で、ランの作る導具は全て魔導文字を前面に出して書くという特徴を持つ。当時秘匿とされた魔導文字を前面に押し出すその豪胆さは、当時の彼らの中でも前衛的な作品だったのではないだろうか。だが、確かに流れるような美しい魔導文字の書体は、前面に出してこそその美術品としての価値を高めているという事に驚嘆せざるを得ない。

（『グラナダ美術史 中世編』ルッテンヴェーク出版社 より抜粋）

鬼ごっこは突然に（前書き）

仕事していると、毎日更新は難しそうです…。頑張るけど。

鬼ごっこは突然に

ラン・ホージョーの家は広い。

広い庭付き、二階建て。部屋数は15、専用の井戸まである。

悪徳不動産屋をちよつと怖がらせて格安で手に入れた最優良物件だが、入り組んだ路地の奥にあり中央広場の商店街バザールがいささか遠いことが難点だ。

その家には現在家主のランを含めて4人住んでいる。

ジーンは当然ながら、今まで住んでいた場所からわざわざ引っ越してきたシトラス、それから今はギルドからの長期依頼のためにしばらく帰ってこれない奴が一人。

男が今二人いる家に少女が一人住んでいるのは危なくないか、との声もあるがジーンもシトラスもそこまで女に不自由していない。そもそもロリコンではない。

第一そんなことをしたら唯では済まないというか、生きていられない。

ランに手を出そうとした不埒な男が、翌日中央広場の時計塔に真っ裸で逆さ吊りにされていたのは記憶に新しい。

それから、ランに月に銀貨5枚を家賃として払う。そんなことせんでいいとランには言われるのだが、男の意地である。食費に関しては曖昧で、皆が好きなものを買ってきてはレイゾーコなるランお手製の導具に突っ込んでおくと、ジーンかランが勝手に料理して食卓に並ぶ。

とりあえずこの家は居心地がいい。

ジーンは派遣教師の仕事を終えると、足早に帰宅した。

薄暗い廊下を抜け、この家で一番広い部屋の扉を開ける。キッチンへ繋がるこの部屋が、リビングであり食堂でもある。大抵皆この部屋に集まってだらだらするのが常だ。

そこにはランとシトラスがいた。

テーブルにノミや彫刻刀、木の屑が散らばっている。ランはここで作業していたようだ。シトラスは少女の可愛らしい手の動きを頬杖を付いたまま追っていた。

「おっかえりー、旦那」

ランと向かい合わせで座っていたシトラスは、入ってきた男に目を向けるとヒラヒラと手を振った。ランからの声はないが、その手元は導具を作ることに夢中になっているのでおそらく保護者の帰宅に気づいていないのだろう。

「早かったな」

「あー、うん、まあね。盗賊退治の助っ人だし？ 一通り殲滅させたから先に帰ってきた」

シトラスの剣の腕はジーンの上に行く。所詮馬鹿だが。

「で、お昼だから嬢ちゃんにご飯あげようと思って作業部屋から引っ張り出したんだけどね。…後もうちょっとだからって、食べてくれないの」

がくり、と肩を落とすシトラス。ジーンは呆れたように鼻を鳴らした。

「口に突っ込め」

「マジで？」

テーブルにはホカホカと湯氣を立てるポカッチャのスープと、スライスしてカリカリに焼いた肉と野菜を挟んだサンドイッチ。

お盆には『温』の魔導文字がでかでかと書いてある。この上に乗せておけば料理が冷めないのだという、やっぱりランお手製の便利導具だ。

「何のためにサンドイッチにしたかと思ってる。スープだって粘度の高いポカッチャを使っただ、そのまま口に突っ込めばいい」

「…うちの雛鳥は随分豪華なもんを食ってんなー」

ランの口にサンドイッチをつけると、確かに食べる。口いっぱい頬張る少女にシトラスはそんな感想を述べた。

スープとサンドイッチを交互に差し出していると、ジーンがキッ

チンへ消えた。

「何か食べるか？」

「ランと同じもんある？」

了解、と声が掛かった。

「それよかさ、旦那。嬢ちゃん何作ってるか知ってる？」

「ああ、何でもシスターが教会の子供たちに鬼ごっこをせがまれるんだと。だけどシスターたちは忙しいし体力的にも子供たちと一緒にになって走り回るのも無理だから、鬼ごっこできるような人形を作ってくれないか、と」

「…あそこのシスター、具師のことなんだと思ってんの？」

「便利屋か何かかと」

それだけランが気兼ねないということだろうが。

おそらく材料費のみで具師としての仕事代は取らないつもりだろう。孤児を育てている教会に、大金を出すなんて事は無理だ。

一文字書くだけで銀板1枚が相場である。下っ端役人の月収と同じぐらいだ。

と、

「もがたああああ！」

ランが彫刻刀を振り回して叫んだ。

ひい、という情けない悲鳴を上げてシトラスが椅子から転げ落ちる。

キッチンからジーンが顔を出し、振り回した本人であるランもきよんとした顔でシトラスを見つめる。

「「なにしてんの？」」

「…別に」

理不尽である。

「シトラスは放っておこう。ラン、もがたーとか叫んでたが？」

「あ、ジーンお帰り。藻型？ 何それ？ …終わった、とか？」

ともかく、出来た。完成した。お披露目するから、ちょっと待って」

ぱたぱたと軽い足音を立てて作業場へ引っ込むラン。
シトラスは何故この時逃げ出さなかったのか、とのちに後悔することになる。

＊

完成した二体の鬼ごっこ用人形。額に魔導文字らしきものが見えるが、人形が俯いているのと前髪に隠れているのでよく見えない。
一体は黒髪のおかっぱの少女人形。服の前を重ねて閉じ、幅の広い紐で後ろにチョウチョ結びをした異国の服らしい。赤い紐飾りのお面を首の後ろにぶら下げている。

もう一体は白髪で、同じくおかっぱの少女を模していた。黒髪の人形と同じような服だが、色は黒。やっぱりこの人形も首の後ろにお面をぶら下げている。

その二体の人形を前に、ジーンとシトラスは脂汗を流した。
得意げに胸を張るランにぎちぎちとしたぎこちない動きで顔を向ける。

「ラン、これホントに鬼ごっこ人形なんだよな？」

「外にいる熊のぬいぐるみと同じ雰囲気（におい）がするんだけど…」

「何変な顔してるの？ えっとねー、こっちの黒髪のがお菊ちゃんで、こっちの白髪のがお染ちゃん。可愛いでしょ、人形作ったことないから葵路（あおいのみち）んとこの人形師に骨格だけお願いしたんだけどなかなかいい出来じゃない？」

超ご機嫌なラン。

「魔力補充は子供たちじゃ難しいから、鉄と銅を組んで魔力カートリッジを作つといた。あ、魔力カートリッジって言うのは、魔力を込めた護石に似たやつね。コレ単体じゃ何の役にも立たない接続専用の鍊具、かな？ とりあえず、10本はあるし、これなら安価に作れるし、シスターが忙しいときでも子供らだけで人形に魔力を充填できるから。それでね、シトラス」

突然話を振られ、シトラスは大げさなほど肩をびくつかせる。

「…え？」

「魔力カートリッジの容量と燃費を知りたいから、ちょっとこの子達と追いかけてこしてくれる？」

シトラスと人形たちの間に立ち、ごそごそと準備するラン。

「とりあえず、最高出力でゴー」

ぱっ、とランが人形たちの前から横へ移動する。

いつの間にか人形たちが握っているものを目にし、シトラスは血の気の引いた顔をした。

『般若』という魔導文字の黒髪の人形がぎりぎりと言を立てながらお面を被る。真っ白い肌に牙を？き出しにする鬼の面。被った途端、美しい黒髪は不揃いに広がった。

『山姥』の白髪の人形は、耳まで口の裂けた皺の深い老婆の面を被る。光沢のあった白髪は、艶のないざんばら髪へと変わっていた。人形が握るには、身の丈と同じぐらいの大きさの鉈。

「鬼ごっこっていうから、ちゃんと鬼を模してみたの」

魔導文字は魔力を変質させるものだが、何らかの『名前』の意味を持つ魔導文字の場合は性質の変化というよりもその『名前』が持つ特性への変化となる。

『般若』も『山姥』も聞いた事はないが、どちらも鬼の特性を持つらしい。いうなれば、魔物。

シトラスが後退さる。

ちゃんと逃げ切ってね、というランの無慈悲な言葉を合図にするように、人形たちはシトラスへ一斉に飛び掛った。

間一髪で避けるシトラス。

扉と窓の位置を確認すると、躊躇うことなく一番近い窓の外へ飛び出した。

そのまま走り去る音がする。二体の人形も既にその後を追って外へ消えていた。

こめかみを押さえて頭痛を訴えるジーンは、胡乱げな目をランに

向ける。

「あれ、本当に教会に持っていくのか？」

「そだよ」

「…もう一回聞くな、あれを本当に教会に持っていくのか？」

「そだよ？」

不思議そうな顔をするランに、ジーンはその場に崩れ落ちた。

嵐の前の、眼鏡の長話

梅路から路地を進んだ先の高台に、一軒の大衆食堂がある。
うめのみち

周辺の住民たちから絶賛される、甘辛いタレに漬け込んだ肉をこんがり焼いた特製料理は店を開けてから3時間もしないうちに完売するほどだ。

店主の名をジル。食堂の名を『大衆食堂』という。

ふざけてるんじゃないかと言われる名だが、店主が店名は分かりやすいほうが良いと言う意向の元この名前に落ち着いている。

忙しい早朝のかき入れ時を過ぎて客が疎らになるのを見計らい、ジルは店を従業員に任せると外へ出た。

梅の花が咲き出してようやく暖かくなったとはいえ、未だ吹く風は冷たい。

服の前を掻き合わせながら高台の景色を堪能していると、後ろから声が掛かった。

「おっちゃん、おはよう！」

異国風の珍しい肌の色と顔立ちの、黒髪の少女が食堂の脇の階段から手を振っている。ラン、という名の具師だ。

「おう、ランちゃん。久々にお出掛けかい？」

「ギルドに仕事探しに行くところ。昨日までやってた無償仕事も終わったし、その辺の出費の埋め合わせに導具か錬具の仕事でもあればいいな、って」

わずか10歳の少女だが、その辺の大人顔負けの仕事をこなしているという。

「昨日っていやあ、ランちゃんこの若い兄ちゃん、変なのに追いかけられてたぜ」

「うん、知ってる。けしかけたの私だし」

さも当然とばかりにそう言う少女に、ジルは苦笑した。

「ありゃあ何だったんだ？」

「教会のシスターに頼まれて、鬼ごっこ人形作っただよ。で、魔力消費の経過が知りたくてシトラス使って実験したの」
途端にジルの顔が歪んだ。

「…あれを教会に持っていくのか？」

「何で皆して同じこと言うのかなー？ 持っていくよ？」

「…本当にあれを、教会の子供たちに持っていくのか？」

「だから何なのさ…？」

いや何でもない、とジルは首を振った。

所詮無償仕事である。シスターも作ってくれた手前文句も言うまい。子供があれで遊ぶのかどうかという疑問は残るが。

「そうだ。ギルドに行くんなら、俺の依頼を受けてくれないか？
まあ、他の連中に受けられてればそれまでだが。朝早くに依頼を出してきいたんだ、見てみるといい」

そう言って、ジルは僅かに顔を曇らせた。

＊

剣に蛇の絡まった盾章が目印の総合幫助機関の扉を、ランは軽い足取りのまま開けた。

広い窓がギルドの正面入り口と左側に沢山取り付けられているので、内部は随分と明るい。

入って中央にずらりと受付カウンターが並び、カウンターの右端に木札受渡し所なるものがある。受付の順番がそれで決まっており、木札の番号を呼ばれたら受付に行けばいいのだ。

木札受渡し所の隣には本棚。魔物や植物、鉱石の図鑑なんかが並んでいる。

正面入って左、朝日が燦々と差す窓辺には長机が4つ並ぶ。入り口に近いほうから初級、中級、上級、特殊という区分の依頼書がバインダーにまとめられて広げられていた。ここで自分の階級に応じた依頼を受けることになる。

級はギルドの貢献度と本人の実力によって定められており、討伐系任務を受けないランは中級止まりである。ちなみにジーンとシトラスは上級だ。

ランは依頼書の束から大衆食堂の主人の依頼を探す気はない。脇目も振らずに依頼書の長机の更に奥、一人用の机で作業するギルド職員のところへ足を向けた。

瓶底眼鏡、三つ編みおさげ、見ただけで分かる典型的なドジっ子属性。

ギルドの中でも記憶力と情報処理能力にはぴか一の実力を誇る、レーベツカ・ミルヴェツテである。

「はよー、眼鏡」

「…お早うございます、ランさん。でもそろそろいい加減に名前と呼んでくださいよう」

今日はどうなされたんですか？ と可愛らしく首を傾げる。瓶底眼鏡に毎日同じ髪型、化粧っ気のない顔だが、傭兵たちの間では何かと人気のレーベツカ。庇護欲でもそえられるのかも知れない。

「『大衆食堂』のジルからの依頼って、まだある？」

首を傾げたまま、レーベツカは顎に手を当てる。

「早朝、5時に受付を受理しました。その後は、初級の依頼書とともに机に並べまして。初級の机には今までに34名の傭兵が立ちましたが、誰もその依頼には手を付けておりません」

「説明長っ」

「そんなことないですよ。朝受けた依頼で、夜に説明するときにはもう少し長くなりますよ」

「ジルのおっちゃんの依頼があるか、って聞いてんだから『初級の机にあります』だけで十分じゃないの？ そもそも私は依頼受理の時間も初級の傭兵が依頼の机に何人立ったかも、興味ない」

きっぱりとランが言い切ると、レーベツカはわずかに眉を寄せる。

「物事には順序が大切ですよう」

「物事には順序以前に、何を聞かれているのかに対する答えが一

番大切だと思う。まーいいや、説明が異常に長いのは眼鏡の眼鏡たる所以だしね」

そう言って、ランは踵を返す。

そもそもランがここへ来たのはジルの依頼を探すために来たのであり、初級の長机にまだある、と聞いた時点で用は済んでいた。

初級の長机には数人の傭兵が依頼を眺めていたが、ランはその間から手を伸ばして一枚の依頼を抜き取った。香ばしい甘辛のタレの匂いが染み付いた、依頼書。勿論大衆食堂の店主からのものだ。

それを持って、もう一度レーベッカのところへ行く。

「んじゃ、この依頼受けるから」

「はい、受領いたしました。『依頼内容は妹の護送。エルゾ村に住む妹をマリアンジュの大衆食堂へつれてきてほしい。妹の夫である義弟の言うことには、妹は精神を病んでいるようだ。連れてくるにあたり、相応の迷惑をかけるだろう』とのことです。詳しい内容は本人に聞いていただきます。依頼料は銀貨1枚、手数料として銅版1枚をいただきます」

ランは銅版一枚をレーベッカへ渡す。手数料は依頼料の10パーセントである。

「では、依頼の期限は5日間ですのでよろしくおねがいます」
今日から5日の間に、ジルの妹を連れてくること。それが、ランに任された依頼だった。

嵐の前の、眼鏡の長話（後書き）

銅貨10枚が銅版1枚。銅版10枚が銀貨1枚。銀貨10枚が銀板1枚。生活は銀と銅だけで賄えます。貴族は金貨も使います。

なぜなに講義（自習）（前書き）

話が、進まない。

なぜなに講義（自習）

「さて、前は具師と錬具師、魔具師について講義したと思う。今日は魔術について講義しようか」

ジーンは教室の生徒たちを見回した。何人もの少年少女たちの目が、死んだ魚のような目から一瞬にして輝きを取り戻している。

「何だか嬉しそうなところ悪いが、魔術を教えるわけじゃないからな」

今日も朝から派遣教師などをしているジーンである。

すでに昨日のうちにランの仕事は終わったため、それまでの間という契約で教師をしていたのだが、本日朝から仕事の断りを入れに学校に赴いたら拘束された。

ほんのちよつとで良いんだ、1時間だけでも！ という拘束されながら聞いた校長の説得で、渋々朝一番の授業を担当している。

「魔術とは、『力ある言葉』を使わずに世界に干渉できる技術のことだ。詠唱や手足の動きといった法則、思考、呪物を用いることで発動する。それじゃあ、魔術の種類についてだな。魔術には個人魔術と精霊魔術がある。精霊魔術ならば君たちも見たことがあると思うが？」

女生徒が一人、手を上げた。

「教会の司祭様が使っている治癒魔術、ですか？」

「正解。もっとも、治癒魔術だけじゃないけどな。モルメア教に関係ある施設で使われる魔術は全て精霊魔術だ。これは、モルメア神の使いとされる精霊に力を借りることで世界に干渉するという方法で魔術が行使されるからだな。呪物はモルメア十字、詠唱は祈りやそれに準ずるもの」

縦棒と横棒が同じ長さの十字に、2本が垂直に重なった部分に小さな円。教会の屋根にはこのシンボルが常に掲げられている。ジーンはそれを黒板に書き写した。

若干歪んでいるが、まあいいだろう。

「そして、個人魔術。これは様々な系統流派に分かれ、師匠から弟子たちへ受け継がれてきた独自の魔術のことだ。家に伝わるものもあれば、地域に伝わるものもある。教会所属の魔術師でない限り、世間一般での魔術師はたいてい個人魔術の使い手だ。傭兵にも多くいるしな」

個人魔術は数が多い上に、独自のアレンジを加える者もいる。

戦闘中では魔術師の使う魔術がどんなものかを知っているだけでも随分と楽に戦えたものだ。流石にジーンもこんな血生臭い感想を生徒に漏らすつもりはない。

「個人魔術は具師の魔導文字ほどじゃないにしろ、秘匿されることも多いな」

と、廊下がなにやらうるさいことに気がついた。

生徒たちの気が散るのだから一言注意してやろう、とジーンは扉を開け。

「ほんのちよつと、で良かったんだよね？ さあ、ジーン。ほんのちよつと授業したんだから帰ろうか。こっちの依頼は昨日で終わってるんでしょ？ 本業ようへいの方の依頼受けたから」

そこに立っていたのは、学校の教師2人と校長を腰と両腕に張り付かせたまま平然と歩く見慣れた少女だった。

＊

ランはギルドへ寄ったその足で、学校へ派遣教師の依頼終了証を取りに行ったはずのジーンをまず回収した。

朝出かけていったまましばらく帰ってこなかったのですが、どうせ頼みを断りきれずに授業しているんだろうと予想していたが、やはり授業していた。

校長から無理やりに依頼終了証を奪い、難癖付けられる前に退散する。

お前、もう派遣教師の職が来なくなったらどうするんだ！ と泡を食ったように叫ぶジーンを、ランは首をちよつと捻って気絶させた。引きずって歩き、奇怪なものを見るような目をした人々が通り過ぎる中を大衆食堂の前の高台へ放り投げて放置。

今度はシトラスを回収しに家へ向かう。

昨日の夜遅くに、両脇に魔力切れで動かなくなったお菊人形とお染人形を抱えて無事に帰宅したシトラスは、そのまま玄関でぶっ倒れて本人も動かなくなった。唯の疲労である。

そのままにしておくのと邪魔だったので、ジーンに小汚いシトラスを部屋まで運んでもらった。

早朝に目を覚まし、一度風呂に入ったようだ。今は二度寝続行中である。

玄関をぬけ、階段を上がり、ランはシトラスの部屋の扉を開け放った。

「おっはよー！ シトラス！」

どばーん、という間拔けな音を立てて扉が開き。

…その後の事は割愛しよう。

どうせ碌な起こし方じゃない。あえて言うなら、シトラスの悲鳴と轟音が響き渡ったぐらいだろう。

かくして、大衆食堂の前には首を抑えて呻く男と若干焦げ気味の寝不足の顔をした男と、それを満足そうに見つめる少女が揃うことになった。

「で？ これ、何の厄災？」

シトラスの言葉ももつともである。

「依頼を受けたの。ここのおっちゃん依頼」

そう言って、ランは自分の後ろに立つ建物を指差した。『大衆食堂』である。食堂の中から何人かの物好きな野次馬が、ランたちの様子を興味深げに見守っている。

その実、喜劇かなにかを見る客の目だが。

「妹さんをエルゾ村からここまで送り届ける依頼なんだけどね」

「エルゾ村、というと：ここから馬車で3時間か？」

「で、どうも精神を病んでるっていう話。か弱い私一人だと、彼女の旦那さんが信用してくれないと思うのね？　むしろ信用する人がいたら、そっちのほうが精神病んでるっていう。だ、か、ら」

ランは頬にひとさし指を当て、二人を上目遣いで見つめる。

琥珀色のキラキラした瞳に見つめられ、墜ちない男はいない。いないが、この場にいる二人にはそれは悪魔のご命令でしかない。

「勿論、手伝うね？」

「すでにこの場に力づくで連れてこられた時点で拒否権はないな」
二人は揃って溜息を吐いた。それを了承の意と取ったランは、嬉しそうに両手を挙げた。

「それじゃ、行ってみよう」

なぜなに講義（自習）（後書き）

マリアンジュのある教会にはラン・ホージョー作の天使像がある。二体の美しい少女の人形は、ランの敬虔な信仰心によるものだろうか。二体の天使は、今なおその教会を見守り続けているのである。（ルブル旅行出版　マリアンジュ編より抜粋）

拝啓、義兄さんへ。

大衆食堂、なんていうアバウトな名前のわりには可愛らしい雰囲気
の店内。

丸みを帯びたテーブルと椅子は、ひとつひとつが店主の手作りで
どれもモチーフが違う。薔薇だったり、葡萄だったり、小鳥だつた
り。その全てに言える事は、愛らしいものばかりということか。少
なくとも、モチーフに猛獣の類も無骨な武具の類も見当たらない。

全てのテーブルに季節の花を飾りつけ、籐籠のカラトリーにはピ
カピカに磨かれた銀の食器。埃よけの布は、店主手作りのパッチワ
ークキルトだ。

窓は総レースのカーテン。カーテン留めには花のコサージュ。

キッチンとフロアを分けるカウンターの上に、テディベアがタキ
シードを着て座っていた。キッチンの視線よけのカーテンはガラス
玉が連なるすだれ風。

明らかに、少女趣味が混じっている気がする。

料理はものすごく旨い、店主も気さくない人だ。だが、食堂に
一步入ってこの光景を見ると思わず眩暈を起こしそうになる。実際
に口コミで美味しいと評判の名店だからと入ってきた客が、そのま
ま回れ右して帰っていった光景を見たことがあるぐらいだ。

「らっしゃい！」

この少女趣味満載の景色とかけ離れた挨拶が、ランの耳を打つ。
ガラス玉のすだれの向こうから、顎に傷をつけた銀の短髪の男が
顔を出した。勿論この店主、ジルである。

「依頼は有ったかい？」

「うん。この依頼は私とジーン、シトラスの3人で受けるよ」

ランたちはカウンターに近いテーブルに腰を下ろす。すぐにキッ
チンから熊のような体格の大男が注文を取りにきた。この店の店員
で、名をアリーという。

初めて入ってきた客が店内の雰囲気をもともしなかったとしても、アリーが注文を取りに来たのを襲われると勘違いして逃げ出した、ということも多い。

本当にいろいろな意味で損をしている店である。

「朝にも昼にも中途半端な時間だがな。依頼を受けてくれたことだから、奢ってやる」

ジルがにやりと笑って、そう言った。

「じゃあ、私は今日のお勧めケーキセット！ ドリンクはルーシユ茶！」

「お前は少しは遠慮というものをしろ。：コーヒーで」

「俺も旦那と一緒に、コーヒーでよろしく。うんと濃いのがいいな」
キッチンの奥へ引っ込むジル。

しばらくすると奥から何かと戦闘を繰り返すような音がした。
作っているものは、今日のお勧めケーキセットとハーブティーとコーヒーを2杯のはずである。

「いつもいつも思うんだけど。このキッチンの奥にはダンジョンが広がって、ジルは採れたての食材を入手して料理を出してるんじゃないかな？ とか」

「知ってるか？ それ、マリアンジュの都市伝説だぜ」

意味のないことをランとシトラスが話していると、ベリータルトと甘い香りのルーシユ茶、コーヒーをジルが持ってきてくれた。

「ほらよ、食いな。じゃ、依頼の説明するぜ」

店主はそう言っ、一枚の手紙を差し出した。読め、とのことらしい。

代表してジーンが手に取った。差出人はエルゾ村のオルフ・ラーレンとある。

「えーなにになに？ 拝啓、義兄さんへ。いかがお過ごしでしょうか、梅の花も見ごろを過ぎましてそろそろ桜の咲く季節となりました」

「ジーン、本題」

「了解。：シアの様子が急におかしくなりました。僕たちに子供がいないのにもかかわらず、自分たちには子供がいたのだと言い張ります。今朝からずっとです。昨日の夜はまったく普通であったのに……。しかもそれだけではなく、隣のリジーさんのところにも子供はいないはずなのに、子供がいたのだと言い出しています。リジーさんの家にも確かめに行ったばかりか、暴れたようです」

拙い手紙を読み進めていくにつれ、ランの顔が陰しくなっていく。「シアは家から飛び出して、村中を裸足で駆け回りました。あの家にも子供はいた、この家にもいた、そう言って走り回るので。村には心の病に精通する医者はいませんので、マリアンジュの医者へ連れて行きたいと思います。ですが、家のヤギや牛の世話があるためこの村を離れるわけには行きません。義兄さんに厚かましいお願いですが、馬車を手配してもらえませんか？ それから、シアの気が落ち着くまで義兄さんの家にいさせてあげられませんか？ 村は小さいので、シアの病気は肩身が狭くなると思います」
だ、そうだ。とジーンは手紙をジルに手渡した。その顔は眉を寄せて、陰しい。

ベリータルトを手紙を読んでいる最中に平らげたランも、じろりと店主を睨みつける。その様子にジーンは慌ててランのわき腹を小突いた。ここで少女に暴れられては困る。

「ちょっと、夜道には気をつける、って言うておこうか？」

「ん？ 何のことだ？」

とぼける店主。

「コレのどこが初級の依頼なのかな？ 私の勘によるとんでもなく厄介な依頼じゃないかな、と思うんだけどね」

この依頼の重要性、というか厄介性を分かっていないのはシトラスだけだ。不思議そうな顔で3人の顔を順番に眺めている。

「別に依頼料をケチろうとしたわけじゃねえよ、ギルドの眼鏡っ子に依頼書を渡したら、初級と判断されたただけだ。俺のせいじゃない」

「…あんの、眼鏡っ！ いや、そもそもあんな文面の依頼書を作ったおっちゃんにも問題があると思うけど」

「それじゃあ妹のこと、よろしく頼むぜ」

怒りの表情で、ランはルーシュ茶を飲み干すと勢いよく立ち上がった。

「一応聞いておくけど、妹さんは連れてくるってことでいいのね？」

「馬車の手配はしておいた。東門の前で待ってるから、俺の名を出してくれや」

店を出て行く3人の背中に、ジルが声をかける。

「シアんとこの一人息子の名を、シェスってんだ」

ぱたん、と大衆食堂の扉が閉じた。

拝啓、義兄さんへ。(後書き)

うちの近所も、ようやく桜が咲きました。

そういえば、昼ご飯食べてない。(前書き)

がんばれ、私の脳細胞。たまに表現する言葉が出てこなくて、困る。

そういえば、昼ご飯食べてない。

この世界で移動手段といえば、馬車が基本である。

街から一步出ればそこはもう危険地帯であり、盗賊もいれば魔物もいる。場所によっては自然の天候ですら危険といった具合だ。馬車ならば魔物避けの護符は常備されているし、貸し出し馬車の御者は傭兵が請け負うことが多いため、戦闘になっても安心できる。

徒歩での旅など、傭兵でなければやらない。もしくは、よほどの貧乏人ぐらいだ。

移動手段は他に馬や、人の背丈より高く足の高い鳥類のヴァーや走竜と呼ばれる亜竜などもある。が、飼うには世話が面倒だし、値段が高い。根無し草のように旅を続けるならまだしも、たまに旅に出かける程度の人間にはそういった動物は不向きだった。

しかも有難いことに、グラナダの王家は街道整備に力を注いでくれている。

よほど辺鄙な村への道でなければ、馬車で行くのに苦勞する事はない。

ランたちが向かうエルゾ村にも街道は走っている。王都へ向かう街道ほどではないにしても、そこそこ整備されたものだ。馬車がすれ違ってもまだ余裕があるほどに広い。

「それよりさ、よく分かんないんだけど？」

一から全部説明してくれ、というシトラスの頭の悪さを暴露する発言に、ランは冷たい視線を浴びせた。

大衆食堂の店主は馬車だけ用意してしてくれたので、今の御者台にはジーンが座っている。彼もボケ気味のシトラスをちらりと見て、溜息をついた。

「大衆食堂の店主の妹さんが、病氣になって。何だっけ、子供がいるみたいな妄想しちゃった…んだっけ？　それで俺らが迎えに行くって言う依頼だよな？　そのどこが難しい訳？　そーいや、あ

のおっさん店出るとき何か言ってたけど」

「馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、ここまでだったとは」

「あんたホントに成人してる？」

双方からの非難に、シトラスは肩身を狭くした。

「説明するのはエルゾ村に着いてからかな。私の予想だし、違ってたら万々歳。まあおっちゃんの話聞くに嫌な予感っていうのがばっちし当たってるみたいだけど」

「…訳わかんね」

「だーかーらー、それはここで話しても仕方ないから。シトラスは有事に備えて剣でも手入れしてればいいの！ 荷物の整理でもしてれば！」

ランはそう言って、自分の荷物を引き寄せた。

小さな引き出しのたくさん付いた、薬種箱のようなものである。

ランが背負うと上半身が隠れてしまいうぐらいで、背負うというよりも薬種箱に足が生えて歩いているような姿になる。

少女はそれを『仔細箱しさいばこ』と呼んでいる。薬種箱と言うとランはい顔をしない。

誰が富山の薬売りだ、などと訳の分からないことを言って怒るのである。大抵それにプラスして拳か足が飛んでくる。

ともかく中身は具師としての道具類だ。

筆や護符用の紙から、宝石や金属、魔物の素材、アルコールランブや鉄製三脚台や彫刻刀まで。こんなことがあるうかと、まで考えて準備してきた必須用具である。そんなに要らないんじゃないか、という程の量だが有って困る事はない。

勿論、身軽であったほうがいい時もある。そんなときには筆とインク、紙を腰のポーチに入れていく程度にしてあるが。

今回は嫌な予感がするうえに厄介なことになりそうなので、大荷物なのである。

シトラスも少々自分の持ち物を確認する。荷物はランよりはずつと少ない。

双剣に、茶色の皮製のショルダーだけである。鞆の中身は主に携帯食と応急キット。ランのようにその場で最善のものを用意するという芸達者な事は出来ないが、これだけあればどんな局面でも乗り切れる程度のものは入っている。

ジーンの黒い革の鞆にも同じようなものが入っているはずだ。獲物は双剣ではなく片刃の長剣であるが。

「もうすぐ着くぞ」

御者台のジーンが馬車の中の2人に声をかけた。

道の先に、昼ご飯を作っているのだろう幾筋もの煙が上がる村が見えてきた。

＊

マリアンジュから馬車で3時間、街道に沿って発展していった家々が一つの集落を作った典型。それがエルゾ村である。

街道沿いにあるだけに、村には宿屋や商店が道沿いにいくつも建てられていた。

質素で飾らない素朴な宿には何人かの旅行者がゆったりと茶を飲んでるのが見える。商店ではやはり旅人が食料や旅の消耗品を手に入れていた。

マリアンジュの街ほど活気があるわけではないが、小さい村にしては随分とにぎやかだった。

中心の道から緩やかに斜面となる丘には草原が広がっているのが見える。点々と白い何かが見えるのは、この辺の産業の中心である畜産のヤギや牛であろうか。茶色の点は馬で、赤や黒い点はヴァーの羽の色かもしれない。

道の脇にある宿の馬小屋にもヴァーが暇そうに干草を啄ばんでいるのが見えた。

威勢のいい客引きの声がする道を通り抜け、丘のほうへ進む。

途端に道が悪くなるが、デコボコのあぜ道の脇に建つ家の前で馬

車を止めた。

「着いたぞ」

ジーンの言葉に、ランとシトラスが荷台から降りる。

同時に家の扉が開いて、男が飛び出してきた。頬に猫に引っかかれたような三本線がくつきりと残っているし、左目の下に青痣をこしらえている。

「お待ちしてました！ 義兄さんの使いの方ですよね！？」

「ギルドの傭兵で、俺はジーン。奥さんは？」

ジーンが代表として名乗る。ランが受けた依頼だが、少女を代表として話をすると相手に不信感を植え付けかねない。更に言えば、ランが相手の態度が気に食わないとして暴れだしたりすると面倒になるので、それを牽制する要素もあったりする。

「僕はオルフ・ラーレンと言います。妻はシア。シアは…その、奥に…」

ちらり、とオルフは家の奥を見る。

「とにかく、中へどうぞ。ただ、ちょっと今シアが興奮状態にあって…。この痣とか引っかき傷とか、彼女が暴れたからなんです。怪我しないように、注意してください」

中へ、と言われ3人はオルフの後に続く。

そのドアをくぐる前、ランはジーンとシトラスに聞こえる程度の声で呟いた。

「村に、子供の姿が見えない」

重苦しく響いた声は、ランの嫌な予感が当たったことを物語っていた。

乱心するは

オルフに案内されて通されたのは、客間ではなく彼らの寝室だった。

二つあるベッドのうちの一つに女性が座ってる。彼女がシア・ラーレンだろう。

大衆食堂の店主と同じ銀髪で、目つきの鋭いところまでそっくりななかなかの美人だ。だが、今は心労のためか瞳は落ち窪みやつれて見える。それでも寝室に入ってきたオルフとその客であるランたちに対して、睨みつける事は忘れなかった。

「あんたたち、誰よ？ あんたたちも私を気違い呼ばわりする気かしら？」

「あ、シア。この人たちは君を義兄さんのところへ送ってくれの人だよ。今君は心の病気なんだ、しばらく気の休まる場所でゆっくりするといいよ」

まるで諭すようなオルフの言葉に、シアは睨みつけることで黙らせた。

その手首に目を留め、ランは眉を顰める。

「ちょっと」

非難する口調でオルフを見上げ、次いでシアの右手を指差した。

「何で、拘束されてる訳？ あんたの奥さんでしょ？」

シアの右手には一本の紐が固く結ばれていた。その紐はベッドの足に括り付けられている。何度も紐をはずそうとしたのだろう、右手は擦過傷で赤く腫れて血が滲んでいた。

「い、いや。あまりに暴れるもんだから、この村にいる医者に相談したら：こうなって」

「こうなって、じゃない！ なんて真似してるの！？ シトラス、紐をぶった切ってやって」

黙りこんだまま睨みつけるシアに、シトラスが一步近づく。が、

後ろからオルフが羽交い絞めにしてきた。力があるわけではないが、まさかいきなり飛び掛られるとシトラスも思っていなかったのだろう、わずかによろめく。

「だ、駄目だ！ 駄目だ駄目だ駄目だっ！」

「おわ。え？ この兄さん、何で急にこんな行動に出てんの？」

羽交い絞めにしたまま、シトラスを振り回そうとするオルフ。

シトラスは困惑したまま、痛い痛いとし心の籠らない口調で呟いている。痛いなどと言いながら、振り回されるどころか一步も動いていない。腐っても傭兵である。

「とにかく駄目だっ！ シアはマリアンジュの義兄さんのところへ連れて行かなきゃいけないんだ！」

様子がとにかくおかしい。シアも突然のオルフの変化に驚きで目を見開いている。

ランとジーンは目を見合わせて頷いた。

ジーンがオルフとシトラスの間に腕を滑り込ませ、オルフの首を掴んで引き倒す。一緒になってシトラスも倒れるほど間抜けではないので、ジーンが行動を始めたときには既にオルフの腕から自分の体を引き抜いている。

首を押さえられたまま、オルフは床の上で暴れていた。

再度ランとジーンが目を合わせ、ランが頷く。

ゴキン、という音が響くとオルフは白目を剥いて動かなくなった。

「ちょ、オ、オルフ！！」

シアが慌てて身を乗り出すのをランは手で制した。

「あー、大丈夫。心配ないよ。ちょーっと煩かったから眠ってもらっただけ」

「く、首の骨折ってないわよね？ こんなことされたとはいえ、一応ソレは私の旦那だからね？」

「問題ないよ、折れたら治しとく」

偉そうに首を縦に振ったランに、シアは顔を青ざめさせて恐る恐るオルフの顔を覗く。紐で縛られているため、近寄れないのが辛い

がそれでも息をしているのは確認できた。思わず、ほっと胸を撫で下ろす。

「さーて、それじゃ。シアさん、あなたにいくつか質問したいことがあるんだけど、いい？　あなたたちの子供のシエスや近所の子供たちのことについて」

ランの言葉に、シアが顔を上げる。

ベッドのシーツを皺になるほど握り締め、シアはしっかりと頷いた。

「と、その前に。シトラス」

「はいよー」

銀線が閃く。チン、という軽い金属音が鳴ると、シアの手首を拘束していた紐が床に落ちた。

「さすがに正常な精神状態の人をいつまでも拘束しとくわけにもいかないし。あとは：『満ちろ』」

ランが一言呟く。

途端、シアの血の滲んだ右手首の傷が一瞬にして元の綺麗な肌へ変化した。

ランの使う個人魔術である。主に言葉よりも想像力イメージで世界に干渉する方法を取っている。本業が魔導文字を扱う具師であるから、徒然と言葉にすることよりも『たった一文字に込められる意味』というイメージを大切にするのだ。

つまり、『満ちろ』という一言に、シアの右手に生命力を集めるというイメージを重ねたのである。

「右手も治ったことだし、本題に入ろうか。まず：子供がいなくなったのは、いつ？」

「ちよっとはっきりしないんですけど、3日前だと思います。おとといの朝に子供がいなくなったことがはっきりと分かったんですけど、その前がちよっとあやふやで」

「ということは、おとといの朝に発狂したと間違えられて、オルフが手紙を書き、昨日ジルの所へ届いて、今朝依頼したということ

になるけど?」

ランは首を捻る。

手紙には『今朝からシアの様子がおかしい』と書かれていたはずだ。ということはオルフは書いたその日に手紙を届けさせていないということだろうか。この村からマリアンジュまで馬車で3時間というわずかな距離であるから、手紙がその日のうちに届くのは当然である。

普通なら、書いたその日の昼ごろに手紙を出し、夕方にジルが受け取る。次の日の早朝に依頼を出せば時間的にもぴたりと一致するのだが。

「それとも、手紙が途中で止められた? そもそもそれなら手紙を捨てちゃえばいいんだから、こんな面倒ごと起こさなくてもいいと思うんだけど。んー、コレはちよつとオオゴトかな?」

まあいいや、とランはシアに話の続きを促す。

「3日前はなんだか頭に霞がかかったような感じで、朝はいたような気がするし、いなかったかもしれないし、という具合なんです。それでおとといの朝になって、ああシエスを起こしにいかなきゃって思ったら：ハッと思い出して」

「4日前は?」

「一緒にサーカスを見に行ったのを覚えてます。笛を吹くピエロがいたり、猛獣のショーがあったり、こんな村では珍しいんですけどね。それで夜までサーカスの演目を見て…」

ランが物凄い嫌そうな顔をした。

「サーカスう?」

頭に浮かぶイメージは、ピエロではない。まだら模様の服を着た笛を吹く男だった。

子供を連れ去った、という逸話をもつ『ハーメルンの笛吹き男』である。

馬鹿につける薬も探せばあるかもしれない（前書き）

左手の薬指の腹に、血豆ができました。
タイピングがちよつと痛い。

馬鹿につける薬も探せばあるかもしれない

ランは頭に浮かんだ『ハーメルンの笛吹き男』を手を振って追い払った。

この世界にハーメルン、などという単語を知っている人がいるとは到底思えなかったし、そもそも本当に笛吹き男が子供たちを攫って行ったとは思わない。

子供を攫っていったとしたら、それは笛吹き男なる怪奇現象みたいなことではなくて本物の人買いか盗賊団である。

早く子供たちを取り戻さないと、どこへ売られるか分からない。むしろ、生死すら危うい状況なのだ。

シアが暴れる理由も分かる。

「シアさん、消えた子供の数とか年齢層は分かる？」

「生まれたばかりの子供は村にいるの。消えたのはシェスぐらいの…5歳から8歳、10人ぐらいかしら？ この村のその年齢の子は全員…」

ふむ、とジーンが呟いた。

「つまり、将来働き手になりそうな子供たちを一気に攫って行った、というところか」

「となるとサーカスの連中が怪しい訳ね」

「各地でこんなことを繰り返してきた可能性がある。ギルドに手配書がないか調べてみるべきだろうな」

「うーん、でもオオゴトにならなかった可能性のが高いかも。少なくとも連中、認識阻害とか精神操作の魔術か導具を持ってると思うし。認識阻害のせいだけで、この村がパニックに陥ってないのは行幸かも。下手に周りに騒がれると、一気に遁走されそうだし」

「ギルドは後回しにして、先にサーカスを追おう。子供を連れている大所帯だ、見つからないということもあるまい」

ランとジーンが顔を合わせて話し込んでいると、空気を読まない

能天気な声が割り込んできた。

「で、どーいうこと？」

勿論史上初の大馬鹿、シトラスである。他に例のない

思わずランがこめかみを揉む。

「馬鹿だ馬鹿だとは以下略。ほんつとに、あんたは頭の中に何詰めてんの？ 脳みそじゃないよね？」

「まあ、今の今まで面倒くさいという理由からシトラスに何も話していない俺たちにも非があるのかも知れんな。個人的にはそんな非は無いと断言できるが。非があると思わなければ、話が進みそうもない。これはあれだ、大変申し訳ありませんでしたと言いながら頭を下げ、内心で舌を出しているような…」

変にだらだらと喋りだすジーンを、ランは膝裏を蹴り飛ばすことで阻止した。

「つまり、この村にいた子供たちが攫われたの。親たちに『自分たちには子供がいなかった』っていう勘違いを起こさせて、攫ったことが周りにばれないようにしてたくさん犯罪を繰り返してきたんだと思う。で、その犯罪者たちはサーカスの旅団を装っている可能性がある」

「何で？」

どこまで馬鹿なんだ。

「シアさんが言うには子供が攫われる前にサーカスが来てたって言ってたでしょ」

「でもその人たちが本当に犯罪者だって決めるのもどーかと思うぞ」

「シトラスにしては随分まともに考えたよね。でもね、よく考えて。もし普通に旅人を装った人が子供たちを攫ったとすると、5歳から8歳ぐらいまでの子供だけを10人も一気に集められる？」

「一気じゃないかも？」

「だったら攫った家だけに認識阻害をかける？ 周りの住人が異変に気づくでしょうが。村全体にかけてみる？ そうすると10人

攫うのにどんだけ認識障害をかけなおさなきゃいけないの？」

まるで教師と生徒のような会話をしだすランとシトラス。

その横でジーンがオルフを荒縄で縛っているし、シアは自分の兄のところへ行くのに必要な衣類などを鞆に詰め込んでいた。

「いちいち面倒なことをするよりも、一気に子供を攫ったと考えたほうが理にかなってるでしょ。で、普通の旅人が攫ったとすると、一軒一軒家を覗いて子供を捜さなきゃいけない。もしくは外で遊んでいる子供に精神操作をかけて夜中に外に出てくるように仕向ける、とか。そうすると5歳から8歳の子供が全員外で遊んでいるなんていう偶然なんかそうそう有りはしないね」

「つまり、一気に子供の年齢と人数が把握できて、村人の大半に認識障害やら精神操作やらをかけられるのが『サーカス』だってことか！」

ぽんと手を打ったシトラスに、ランは適当に拍手した。

はいよくできました、というよりもようやく分かったかこの馬鹿野郎という気分である。すでにジーンはシアと蓑虫にされたオルフを馬車に案内し終わっていた。

ジーンが戸口から顔を出す。

「ラン、役割分担はどうする？」

「私とシトラスが残って、サーカスの足取りを追う。ジーンは一度マリアンジュへ戻って、ジンの依頼を達成させておいて。ギルドと衛士に事の次第を伝えたら、サーカスの情報を集めてよ。状況証拠が足りなくて衛士が動かないっていうなら、シアにギルドに依頼で出させてもいい」

頷くジーンに、ランたちも家から外へ出る。

ランは足元に落ちていた木片を拾うと、仔細箱から筆と墨を取り出した。

「とりあえず、通信が出来るようにしとかないと」

達筆な字で魔導文字を書き込む。『以心伝心』。

海月魚くらげうおの粘着毒から毒だけを抜き、その粘着液に魔力を伝達しや

すいアークシールの樹液を煮詰めて混ぜた墨。コレを使うことで、魔力の通りにくい媒体へ魔力を通した際の壊れやすさというリスクを補うことが出来るのである。

だったら、その辺で拾った木片でなくまともな素材を使えばいいのだが。

「はい、こっちはジーンが持って。で、この一件が終わったら即座に埋めて！　こんな陳腐な通信機が私の作品だなんて広まったらそれこそ恥ずかしくて死ぬっ！　今度ちゃんと、イヤークラス型の通信機でも作ってあげるからさ」

どうせ捨てるのならば、その辺のもので代用するというわけである。

ジーンが御者台にのると、馬が嘶いた。馬車の幌を僅かに上げてシアが顔を出す。

「シエスのことを、私の息子のことをよろしくお願いします！」
「任せて。あ、そだ、もう一つ質問があったんだ。ここの医者って、巡回医？」

不思議な問いに、シアは訝しげな顔をしながらも頷いた。

「ええ、巡回医です。確か2週間前に来ましたね、あと1週間もすれば他の村へ回るとか」

「そか。ありがと」

「それじゃ行くけど、ランも気をつけろ」

ランはにこりと笑い、頷いた。

馬車が土煙を上げて遠ざかっていくのを、ランとシトラスは見送る。その後姿がまだ大きいうちに、二人は行動を開始した。

「それじゃ、まずは村の巡回医んところでも行ってみましょ」

馬鹿につける薬も探せばあるかもしれない（後書き）

出土した木片は、ラン・ホージョーの筆跡と類似点がある。しかし、ランの作品と比べてあまりにも粗雑であるため、恐らく誰かが彼女の作品を模倣したものであろうと推測される。（マリアンジュ東B遺跡トレンチH6番 出土遺物報告書より抜粋）

男はつらいんです

村の端に、白い建物がある。

世界各地、どんな辺境の村にも一つはあるモルメア教会。巡回神父や巡回医らがやってきては一時の拠点として過ごす場所でもあった。更に、神に祈りをささげる天の曜日になれば、村中の住民が祈りをささげに来る場所でもある。

観音開きの扉の上には、色とりどりのガラスをはめ込んだステンドグラスが飾られている。ステンドグラスの中央には銀で作られたモルメア十字が酸化して黒ずんでいた。

扉は鉄の鋳が嵌め込まれた頑丈なもので、魔物の大群や盗賊団などの連中が来た時に村人を匿うために作られている。

その教会は今、巡回医の診療所となっていた。

「ごめんくださーいっ」

ランは扉に向かってそう叫ぶと、中からの返事も待たずに開け放った。

後ろをついてきたシトラスは腰の剣の柄に手を置いている。ランに何か危険が迫れば、すぐさま相手を細切れにする気満々だ。ランが傷つこうものなら、おそらくシトラスがジーンに細切れにされる。教会の演説台の横、色とりどりの花が植えられた花瓶の脇にもう一つ扉があった。

その扉が開く。

茶色の頭が僅かに覗いた。

「悪いが、診療は14時からだ。もしよければ、それまでの時間モルメア神に祈りを捧げているといい」

「生憎だけど、私に祈りを捧げるような信仰心はないよ」

閉められようとした扉が、止まる。

その隙間にシトラスが強引に体を割り込ませた。奥から非難する声。

シトラスの開けた扉に、ランもゆつくりとした足取りで向かう。扉の向こう側は診療室だった。簡素なベッドと小さな丸椅子、脇にしつらえられたテーブルには何枚かのカルテが無造作に散らばっている。分厚い医療書やフラスコ、治療道具も一緒に机の上だ。奥の戸棚には薬品が並べられ、薬草類が窓際で吊るされていた。

「こんにちは、お医者先生の。ちょっと質問をしに来ただけです？」

「悪いが私は午後の診察の準備で忙しいのだ。後にしてもらおう」中にいたのは50代半ばの男だった。

痩せた長身で、肌は生白い。頬は削げ、眼窩は落ち窪んでいる。ぎよろりと大きな目はしきりにあたりを彷徨わせていた。全体的に、骸骨に肉付けしたという感じの男だった。

「別に手を煩わせることでもないの、本当に少しのことだから。ただ、あなたが正直に話してくれるのならば、という条件が付くだけだ」

「ほう？」

男の顔が歪む。その手が、白衣のポケットに伸びるのをランもシトラスも見逃さなかった。

シトラスがランの前へ出ようとするのを手で制する。

「質問は簡単よ。サーカスはどこへ向かったの？」

お前も共犯だ、と言外に告げる。

ランの言葉に男が白衣から大人の男の親指ほどの太さがあるペンを取り出し、2人に向けた。

「『汝の心に我を浸せっ！』」

「『閉じよ！』」

男から放たれる魔術に、ランも魔術で応戦した。ばきばりごきごきんっ、と空気をへし折るようなすさまじい音が部屋に響き渡る。

男の精神操作系の魔術とランの防御結界魔術、お互いの魔術がぶつかり合った干渉音である。

干渉音に、男が怯む。

普通干渉音がするような魔術戦は大規模戦闘ぐらいであり、傭兵たちの諍いでも音が響くような事は起こらない。男が驚いたのは、おそらく男の魔術が自前のものではないからだろう。ここまでの威力が出るとは思わなかったに違いない。更にはそんな魔術を相手にたったワンフリーズの詠唱で防ぐランは化け物じみていた。

勿論その隙を逃すようなランではない。ランは手に持っていたペーン―よく見ればそれは杖であったが―を取り落とした男に一気に飛びかかり、

問答無用、躊躇う素振りすら見せず、力いっぱい男の股間を蹴り上げた。

正確に言えば、捻り込む。

「うぎゃああああああっ!!」

響き渡る悲鳴。

声もなく医者はその場に股間を押さえて崩れ落ちた。

ランはノックアウトした男を一瞥し、自分の後ろを振り返る。顔を蒼白にして、股間を押さえるシトラスがいる。

「…何であんたが悲鳴上げてんの?」

「それは多分、男の子にしか分かんないと思うっ!」

痛くもないだろうに涙声で叫ぶ器用なシトラスに、ランは冷たい視線を向ける。馬鹿じゃないの? と目が語っていた。むろん、馬鹿だが。

「ず、ずみばせん…」

ランとシトラスが目線を下げる。

脂汗を流し、ついでに涙も鼻水も垂らした男が2人を見上げていた。

「腰を、叩いては…ただけ、ませんでしよ、か…」

上がっちゃったか―、とシトラスが呟く。ランは何のことか分からずに首を捻った。

「うーん、同じ男のよしみで助けてやりたいのはやまやまなんだけどね。多分それやってると、あんたと同じ轍を踏みかねないから

さ、ゴメン！」

おそらく、ランに敵に情けなんかかけるんじゃない！ と男と同じく急所を蹴り上げられて悶絶するだろう。

ランがすでに悶絶している男に、にやりと笑みを向けた。

「さあて、質問に答えてもらいましょーか」

恐怖の尋問タイムの始まりである。

男はつらいんです(後書き)

野球の好珍プレーでは定番ネタですよ。

宦官もつらいぜ（前書き）

流血表現などはありませんが、グロいエグいついでに卑猥かもしれ
ません。

軽いノリで読み飛ばしてください。

宦官もつらいぜ

急所への一撃に立ち直れない医者の体を引き摺って、椅子に座らせる。

「本当はこういうの、ジーンのが上手いんだけどねー。私ってば芯は優しいから、尋問とかって苦手なんだ」

荒縄で背凭れと一緒に上半身を拘束した。

言っている言葉とは裏腹に、明らかに嬉々とした表情を浮かべるラン。

シトラスはと言うと、男の後ろ側に立ち、おかしい行動を起こさないように剣に手をかけている。

そもそも男には見えないのだが、シトラスの顔色はすこぶる悪い。この尋問がどれだけ凶悪なのかを理解している顔である。

だからといって止める気もない。子供たちを強引に親元から引き離すような連中の共犯者に対して、そこまで優しくなれない。

「ん、じゃ。とりあえずは、簡単に聞いてみましょ。すみませーん、お医者さん？ サークスがどこへ行ったのか、教えてくれませんか？」

「…」

「あら、だんまり？ 予想範囲だけど」

男は脂汗を浮かべたまま、眉間に皺を寄せてランから目をそらした。

ランはその男の様子に薄く笑みを浮かべると、ポケットから2粒の赤い実を取り出した。

赤い実、ではない。硝酸塩、炭、硫黄を混合して作った火薬玉である。3つの材料を混合した黒色火薬に炎を遮断するコルニルの樹皮を巻き、こよりを差し込んで作ったミニ爆薬。こよりの導火線に火をつければ、大体5秒後に直径30セルチル程度のクレーターが生まれる。

普段は相手を怯ませる程度にしか使わない代物だ。

ミニ爆薬を一つ、ランは男の股間に転がした。

もう一つは机の上にあった灰皿に落とす。

赤い実としか見えない爆薬を、男は危機感もなく不思議そうな顔で見つめている。後ろでシトラスの顔色が更に悪くなった。

「サーカスがどこへ行ったのか教えてくれないと、コレを使います」

机の上のタバコ箱から、火種を一つ取り出した。

えいやっ、とランは大げさな手振りで灰皿の中に火を投げ入れる。ドバン、と破裂音。

黒色の石で出来た灰皿が、みるも無残に木っ端微塵に吹き飛んでいる。机の上も爆発の余波で、机そのものが2、30セルチル程焦げた。カルテや医療道具もあらかた吹き飛び、机の下に散乱していた。

「いやあ、本当に不本意なんだよ？ 私、優しいからさ、こういう手段に出ると心がキューって痛むんだけど。あなたが喋ってくれないから、仕方ないよね？」

にこにこ笑みを浮かべながら言うべき台詞ではない。

「大丈夫大丈夫、死んだりはしないよ？ ただちょーっと、…痛いだけ」

「知ってるか？ コレやって試験受けると、とある国では国家役人になれるんだとよ」

ランからの聞きかじりを披露するシトラス。宦官制度は少なくともそんな試験の合格祈願みたなものではないのだが。

「試験やって、成績優秀者が登用する前に去勢することもあった、って話でしょ。そもそも、去勢した人もその3割は細菌感染で亡くなっちゃうみたいだけど」

「うわー、そうなの？ 大変だな、アンタ」

ランとシトラスの場を弁えているんだかいなんだか分からない、楽しげな会話。だが、その話を聞いていた男の顔からはどんどん血

の気が引いていく。

「ま、そうなれば：女の人とよろしくやるのは、永遠に諦めるのね」

「ご愁傷様」

人でなしコンビの言葉に、男の顔色は紙のように真っ白になった。

＊

教会に一人真っ白に燃え尽きた男をそのまま放り出し、ランとシトラスはヴァーを2頭借りて村を出た。

尋問を開始して僅か10分程度、相手の股間を一度蹴り上げたといえ流血なしで口を割らせたランの手際のよさに、シトラスが感心したような顔を：するわけはなかった。

「あのなー、嬢ちゃん。ああいうことは俺がするからさあ、できれば黙ってて欲しかったかも」

ヴァーを走らせながら、隣を併走するランに言う。

仔細箱がガチャガチャと鳴るのが耳に届くが、中身は大丈夫なのだろうか？

「シトラスにやらせたら、それこそ流血沙汰でしょーが。私はそういうの、あんまり好きじゃないの知ってるでしょ？ そりゃ、殴りも蹴りもするけど、血を見るのはホントの大勝負のときぐらいにしといてよ」

あんたが剣を抜くのを止めるつもりはないよ、喜びもしないけどさ、とランは小さく呟いた。

基本姿勢が喧嘩上等、傍若無人を絵に描いた、唯我独尊を地でいくだけに分かりにくいのが、ランは血を見るのは好きではない。勿論必要とあればラン本人も武器を持って、相手を殺せる。それだけの覚悟を持って傭兵をやっている。だが、相手を殺さずただ殴るだけで喧嘩が収まるのならばそれに越した事はないとも思っている。

その喧嘩を収める方法が、人によっては洒落にならない被害を生

むことになるわけだが。

死ななければ不幸になってもかまわない、のがランの持論でもある。

「だからってな、さすがに俺も心臓に悪いわけ」

次のシトラスの言葉に、ランは握っていたヴァー用の鞭を投げつけた。

「嬢ちゃん、それ以上凶悪で最悪で性悪になってどうすんの？」

「っ！！」

自覚があるからこそ、反論する言葉は見つからなかった。

ようやくぴりぴりした雰囲気や和んでくる。

向かう先は、グラナダ王国首都ラガンジュ。2人は誘拐サーカス団の後を約4日遅れで走り抜ける。

宦官もつらいぜ（後書き）

ヴァーは帰省本能が強いので、どこに放しても戻ってきます。
乗り捨て御免のレンタカーならぬレンタヴァーは重宝。

状況を報告します！（前書き）

わ、笑いが少ないっ！

状況を報告します！

エルゾ村からマリアンジュまでは3時間。

だが、ジーンの走らせた馬車はその距離を2時間で走破した。

「2時間って…いったいどんな走らせ方をしたんですか？」

必要以上に飛ばしたおかげで、馬車は思った以上に揺れた。シアはなんとか床にしがみつくことで無事だったが、荒縄で芋虫にされたオルフは馬車内を転がりまくった。未だに目が覚めていないのが、救いだったかもしれない。

マリアンジュの城壁門をかつ飛ばしてたどり着いた馬車着き場で、シアはよろよろとした足取りで馬車を降りた。未だに地面が揺れているような感覚がする。

「馬車に加速の魔術をかけたただけだ」

「は、はぁ」

何でもない事のように平然とそう言うジーン。

魔術を2時間かけ続けたという事実には、シアは本気でよろめいた。普通魔術というものは魔力、精神力など様々な力を使う。体内の魔力で世界に干渉し、イメージが魔術を補強し、そして精神力が魔術という世界を変える力を継続させるのだ。

それを2時間ぶっ通しで行使し続けるには相当な力を持った魔術師でないと出来ない。むしろ、一流程度の魔術師でも難しい、出来るのならそれは超一流と呼ばれる化け物だけである。

呆氣に取られたシアに、ジーンは苦笑する。

「それでも本職は魔術師だからな」

肩にオルフを担ぎ、マリアンジュの石の道を黙々と進む。

周りから好奇の視線が2人に突き刺さるが、ジーンはまったく気にしていない。シアもそれにならって出来るだけ周りの視線は気にしないように、男の後ろをついて行く。

シアにとってみればそんな視線に晒されるのは耐えられないのだ

が、ここで恥ずかしがって顔を赤らめるのは自分たちが可笑しなことをしているときも自覚しているような気がする。何も世間様に恥ずかしがることをしていません、と開き直るほうが精神的にも楽だった。

だが、振り返る人の何割かはジーンを見つめて『またか』といった顔をするのはどういうことだろうか。

「あなたたちってこういう事、普通にしてるの？」

「ん？」

「だから、道の往来の真ん中を人を抱えて歩くとか、してるの？」
素朴な疑問だったが、ジーンは自虐的に笑った。

「今朝、運ばれた口。まあ日常茶飯事」

シアは若干聞いたことを後悔した。

梅の咲く路を通り、階段を上る。高台にある大衆食堂の前まで来ると、店の中からジルが顔を出した。

「シア」

「兄さん！」

シアがジルに駆け寄り、その胸に飛び込んだ。鼻腔いっぱい広がるは、ジルの作る特製のタレの香ばしい匂いだった。

思わず涙ぐむシアに、ジルはその肩を優しく抱いてやる。

「おう、ジーン。えらく早かったな」

「事態がそれだけ逼迫してるって言えば満足か？　これで依頼は達成だ、いいな？」

ついで、とばかりにジーンはジルの目の前に気絶したままのオルフを放り出した。石畳に転がる芋虫から、僅かにうめき声もする。

「おいよ。別にコレまで持ってくる事はなかったんじゃないか？　つか、手紙にも家のヤギやら羊やらの世話で忙しいからシアだけで、って話だったろーが」

「だから、逼迫してるって言っただろ。ギルドの調査員をこいつに村まで案内してもらう。俺は忙しい」

口調が若干刺々しい。雰囲気も僅かにだが硬化していた。

「…お前さ、ランちゃんがいなくてどうしてそう」

オルフの体を足で蹴りだすジーンとジンの2人組みの会話を、シアは途中で差し止めた。

「ああ、もう！ 兄さん！ シェスが誘拐されたの！」

「ああ、分かってる。だから、こいつらにお前の護送を頼んだんだ。ジーン、忙しいところ悪いんだが、状況を聞かせてもらえるか？」
シアの頭を撫でながら、ジルはジーンに顎をしゃくって大衆食堂を示す。中で説明してくれ、というジェスチャーにジーンは不承不承ではあるが頷いた。

店内は誰もいなかった。

周りを見回したジーンに、ジルが今日は午後から臨時休業、と声をかける。シアをカウンターに近い椅子に座らせると、アリーに外にある芋虫を持ってこさせた。オルフのことである。

「で？」

「村に来たサーカス団、っていうのがどうも村の子供たちを誘拐したようだ。大体4日前ぐらいか。村にいた巡回医もグルらしいな、既にランがサーカス団の向かった先を吐かせた」

「大規模なのか？」

「一気に10人近く誘拐でき、更には具師か腕のそこそこの魔術師がいる可能性がある。サーカスだから、他の村でも同じようなことをした可能性も捨てきれないな。恐らく相当名のある盗賊団か、俺らですら名前も分からせないほどの実力ある裏家業」

ジルが嫌な顔をした。

「どうやってシェスたちを助ける？」

「それはこれから考える。とりあえずはギルドと衛士に連絡して、国のほうから応援をもらうつもりだ。さすがに俺らじゃ荷が重いからな。今はランとシトラスが先行してる。1日で2日の距離を走り抜けるぞ、あいつら」

シアが俯いた顔を上げた。

「シェスの居場所、分かったんですか？！」

まだジーンたちが村の子供たちの誘拐を聞いてから半日も経っていないのに、すでにサーカスの行き先を把握していることに、シアは驚きを隠せない。

「村の巡回医がサーカス団とグルだった。オルフに精神系の魔術をかけて錯乱させたのもそいつだろう。ランたちが尋問したんだ」さすがにランが一人で尋問して僅か10分程度で聞き出した、とは言えなかった。

10歳の少女がそんなことをしている事実を、幼い子供を持つ母親に聞かせたらジーンにどんなとぼちりが来るのか分からない。

ジーンがランの保護者の代わりをしているとはいえ、衣食住の全ての面倒を見ているわけではないのだ。ランはランの意志でもって行動している。ジーンにそれを止める資格も権利もない。ランが傭兵をしていても、ジーンは止めるつもりはなかった。

ジーンは店の窓の外を見る。傾いた太陽が明るい輝きでもってジーンの顔を照らしていた。

「サーカスの行き先は首都、ガランジュだ」

マリアンジュから西へ10日で首都へ着く。ランとシトラスがサーカスに追いつくのは早くてあと4日後。うまくいけば首都まで残り2日の距離で見つけられるはずである。

ギルドマスター登場

ジーンがオルフを連れてギルドの扉をくぐると、そこにはちょうどお目当ての人物がいた。

西日に照らされた金髪はキラキラと輝き、深い緑の瞳は人々を魅了するほどの美しさ。白皙の美貌と貴族よりも更に貴族らしい優雅な立ち振る舞いの男。露出度の高い袖なしの上着は胸の下で切り取られ、割れた腹筋が覗いている。ゆったりしたズボンに、銀の細工を施したサンダル。薄い紗の布を羽織っているが、左肩を滑り落ちたであろう布は肘の辺りに流れている。その服の全てが、白一色だった。

まるで薔薇でも背負っているのではないかと錯覚する美貌のその男は入ってきたジーンに目を向け、

「あれ？ ジーンかい？ 久しぶりだね、ランはいないようだけど」

至極丁寧で、背中がぞくぞくするような色気を含んだ声でジーンに話かけてきた。

ジーンの後ろで男に見惚れていたオルフが、ギルドの板張りの床の僅かな段差に躓いている。

分からなくもない。

本物の王子様よりも王子様っぽいこの男の口調と無駄に垂れ流される色気。女限定などではなく、老若男女誰をも魅了するのだ。現に、ギルド内にいるほとんどの人間がこの男を熱っぽい視線で見つめていた。例外は、この美貌に魅力を感じない朴念仁か、顔に飽きたと豪語できるほどの仲のいい連中だけである。

「無駄に元気そうで何よりだ、ギルドマスター」

露にされる左肩には、剣に蛇の巻きついた紋章が彫り込まれていた。

世界公認総合^{ギルド}幫助機関の中でも実力は折り紙つき、マリアンジュ

を含めたグラナダ東部を統括するギルドの責任者ハーヴェイ・メノリアである。

＊

ギルドの奥へと通され、ジーンたちは執務室と書かれた一室に通されることになった。

大規模な誘拐団については人の耳のある場所で安易に話す話題でもないし、何よりハーヴェイがギルドの表に立つことは色々と不都合が生じるためだ。

この美貌にトチ狂った男女がどういう行動に出るか、押して知るべし。更にはギルドの業務が大幅に滞ることにもなる。それはギルドマスターとしても大いに困る。

「せめて、客室に通せ」

「どうせ仕事の話だろう？　この方が様々な資料があるから、話がしやすいと思ったのだけれど？　お気に召さなかったか」

「ここにるのが俺だけなら構わないがな。一応客人もいるんだ、配慮ぐらいしたっていいんじゃないのか？　ギルドの威厳とかいう食えないものがどうか、色々あるんだろ？」

「食えないって言わないでほしいね」

通された執務室は周りの壁を全て本や資料、地図などの巻物といったもので埋め尽くされている。部屋の奥には重厚な執務机がでんと置かれていた。その机の前には更に大きな机と、幾つかの椅子。仕事の話をここでする、といった通りにこの大きな机で作戦を練るのだろう。地図を広げてもまだ余裕があるほどの大きさだ。

壁や天井には明り取りの窓もない。完全なる密室。外を隔てる扉も、普通の家にあるドアよりも厚い。

外にここでの会話の内容を漏らさない、という意図の下に造られた部屋でもあった。

ジーンとオルフは椅子を勧められ、大きな机の近くにある椅子に

腰を下ろした。

「飲み物を用意させよう。コーヒーで構わないかい？」

「ああ」

ハーヴェイは執務机から通信用の導具に手をかざす。ぼそぼそと導具に向かって話しかけている。通信用の導具は高価ではあるが、手に入らないというほどのレア物ではない。街の具師のうち何人かは通信用の魔導文字を習得している者がいるので、金を出せばちゃんと作ってもらえるのだ。

「さて、飲み物が来るまで時間があるが。話を聞いてもいいだろうか？」

執務机の椅子ではなく、大きな机のジーンとオルフの向かいにハーヴェイは腰を下ろした。

「約4日前、サーカス団に偽装した馬鹿共がエルゾ村の子供を10人ばかり連れ去った。そいつらの仲間に具師か腕のそこそこの魔術師がいる可能性がある。どうも規模がデカイし他の村からも子供を攫ったかもしれないから、ギルドと衛士に協力を頼もうと思っただが」

「ふうん。それは面倒だね、君が『そこそ腕のいい』なんて評価するなんて。ギルドとしてもそんな連中を野放しにしておきたくはないし、国だってそう思っているだろうよ。衛士にはギルドのほうから連絡を入れておこう」

と、扉がノックされる。

開いた扉の先にはワゴンにコーヒーを3つ載せて押してきたギルド職員の女性が立っていた。顔が赤いのはハーヴェイのせいだろう。しずしずとしとやかに歩き、3人にそれぞれコーヒーを配る。そのくせ目はギルドマスターに釘付けだった。

「ありがとうございます。そうだ、悪いんだがあとでライバックを呼んでおいてくれるかい？」

「は、はい！ 分かりました！」

真っ赤な顔でそう叫ぶ女性職員は、慌ててワゴンを押して出て行

った。その様子をハーヴェイはなんの感慨も浮かんでいないような顔で見送る。本当に、彼の美貌を見て顔を赤らめる女性たちに、何も感じていないらしい。いつものこと、としか思っていないのだろう。

「人数とかは分かっているの？」

ハーヴェイがオルフに問いかける。無意識で流し目を送っていた。その様子にオルフが身じろぎする。どうやらこの色気全開の美貌のギルドマスターを前にして緊張しているようだった。

「え、ええと：サーカスの人数は、大体15人ぐらいでしょうか。裏方さんまで入れると、20人ぐらいなのかなあ：？」

随分曖昧な言葉だが、ハーヴェイは軽く頷いている。

有能なギルドマスターである。恐らく頭の中では今までに起きた事件や該当しそうな人攫いの連中の情報が展開されているのだろう。

「そのサーカス団に何か特徴のある人とかは、いなかった？」

「と、特徴？　：そ、そういうえは何だか変な口調で喋る若い人が一人、ピエロをしてました。あとは、金髪のすごい美女とか、蜘蛛の刺青を刻んだスキンヘッドの男とか：」

詳細に思い出せるわけではない、との前置きで気づいたことを述べるオルフ。

「それから、体中に蛇の刺青をした白髪の美女とか：」

その言葉に、ハーヴェイだけでなくジーンも目を見開いた。ハーヴェイが音を立てて立ち上がる。

「『^{ストーリー}蠢く蛇』シシリア・ノーマンかつ！」

「ってことは、相手は『^{イーターズ}人喰い魔方阵』。そこそ腕のいい魔術師がいるって話は確かみたいだな」

2人の言葉に、オルフが訳のわからないといった顔をする。

その顔を見てジーンは眉を顰めた顔を向けた。

「『人食い魔方阵』っていう通り名の犯罪集団だ。子供を攫って売る集団じゃない」

次の言葉に、オルフの顔から血の気が引いた。

「子供を生け贄にして魔術を使う、邪教崇拜集団だ」

サーカス団の静かな夜（前書き）

流血表現、グロイのエロイのあります。気をつけてください。

サーカス団の静かな夜

外は、ざわざわと風が森の木々を揺らしている。

少し前まで曇天であった。今はもう雲と空の判別のつかないほど暗く、夜の帳を落としているだろう。

星のない夜。月のない夜。

大小さまざまなテントが夜の闇の中で更に暗く浮かび上がる。

人の声もうしない。本当のサーカス団ではないにしろ、見世物をしながらの仕事である。朝早くから夕方まで、旅程をこなしつつも見世物の練習までしてきたのだ。さすがに日が落ちれば、自然と眠くなる。

どれだけ勤勉なんだ、とは火吹きの見世物をしてきた大男の言葉である。

だが、偽者であろうとここで手は抜けない。どこから自分たちの素性がばれ、衛士に追いかけられるか分からないのだから。

静かなテントのうち、一つ。

子供のすすり泣く声が聞こえた。

声は一人分。まだ幼い、少女の声だった。

そのテントは他のテントと比べてやや大振りで、ただの旅宿テントではありえないほどの過度の装飾が施されている。テントの骨格には緻密な細工と宝石が飾られ、布も複雑な文様の分厚い絨毯のよう。床は地べたではなく、テントの大きさと同じぐらいの毛の長い絨毯が敷かれていた。

まるで王侯貴族のためのテントだ。

そこには一人の女性と、少女がいた。

妖艶な女性だ。月夜にならばよく映えただろう、白糸のような髪。魅了されるほどの美しい赤い瞳。大きな胸、括れた腰、男ならば誰でもふるいつきたくなる腰つき。体を覆う布も薄い紗を乳房と腰周りを軽く覆う程度で、体の線があらわになっている。

そして、体全体に蠢くように刻まれた蛇の刺青。

『^{ストーリー}蠢く蛇』の異名をとる魔女、シシリア・ノーマンである。

テントの四方に配置された燭台の明かりに照らされ、魔女が薄く笑う。揺らめく炎が、彼女の体の蛇をまるで生き物のように蠢かせる。

彼女が立っているのは、大きく広げられた布に描かれた魔方陣の中央より、僅かに外れたところ。

そんな魔女の前で、魔方陣の中央で震えるのは5歳ばかりの少女だった。

目を真っ赤に腫らして泣いている少女は、全裸だ。体中に赤い染料で魔方陣や何らかの魔導文字が描かれている。

「怖がる事は、ないわ」

シシリアの言葉に、魔力が宿る。

彼女の妖艶さと周囲の異常性に恐怖で動けない少女に、魔女は跪いて顔を寄せた。

「何も怖がることなど、ないのよ」

纏わり付くような甘い声は、毒だ。言葉を重ねるごとに、震えながら泣いていた少女の瞳から正気の色が失われていく。

魔女が少女に口付ける。

唇に触れ、下唇を食む。少女が薄く開けた口腔に魔女は舌を滑り込ませた。歯列をなぞり、上顎を舌先で愛撫する。小さな口腔を満たさなく、弄る。

「んう」

少女が恍惚とした表情で喉を鳴らす。

口付けをしながらその様子を楽しみ、シシリアは少女の胸元に指を這わせる。ぴくん、と少女が体を振った。快感を拾っているのか、少女の体が赤く火照るように色を変えた。

まだ膨らみもない胸元を撫で下ろし、心臓の真上で円を書くように指を動かす、ぐしゃり。

魔女は、少女の柔らかな肌に爪を突き刺した。そのまま手を突っ込み、心臓を引きずり出す。

少女の顔から、生気が消えた。支えられていない体が、シシリアが心臓を取り出した腕を引くと同時に後ろへ倒れる。びくり、びくりと2度ほど痙攣すると、動かなくなった。

「『甘い、甘い、果実をここに。私の体の糧となれ』」

魔女の手の中の血まみれの心臓が、淡く光る。

それを躊躇いもなく口に入れた。

滴る血が、魔女の胸元を赤く染め上げていく。白く細い喉が、上下した。

「いやあなんや、ほんまエロいなあ姉さんは」

昏い魔力に満ちたテント内に、突然明るい声が響いた。

テントの入り口、いつの間にそこにいたのか青年が一人、テントの骨組みに寄りかかるように立っている。

夜の暗闇より黒い髪、黒い目。黒と白のピエロの格好がよく似合うほどの、人を食った笑み。僅かに細められた瞳の奥には、星のようなきらめきが覗いている。

「あら、坊や。覗き見は悪趣味よ」

「食人儀式しとるあたりでそっちのが悪趣味やと思うねんけど」

感染症の心配せなあかん？ と、場違いな心配をしだした青年に、シシリアは口元をぬぐいながら微笑んだ。

「本当なら、儀式を見られた時点で殺しているところよ。今回は許してあげる。あなたには色々借りもあることだし」

「そりゃ、おおきに」

感謝を述べてはいるが、態度はぶてぶてしいことこの上ない。

それでもシシリアは気分を害する事はなかった。不思議な口調で喋るこの青年を、彼女は甚く気に入っていた。

「それで？ 何のようなのかしら？」

「いやあ、綺麗な姉さんがイカガワシイ儀式する言うから、ちょっと見学と思ってんけど」

「次見たら、今度の生け贄には坊やを使うわよ？」

「へいへい、気いづけますよって。そや、一個忠告したろ」

青年は転がる少女の死体をちらりと見やり、シシリアに視線を合わせた。

「強欲は身を滅ぼすんやで。暗闇に死ぬまで閉じ込められんよーに気いづけるんやな」

「あら？ 私は自分のために儀式をしているわけではないわよ。

私が望むのは、ただ『あの方』のみ。あの方のために力をつけ、あの方のために世界を昏くしたい。それが私の願いよ。そのために暗闇に身を沈めるのならば、それは本望だわ」

「…さよか」

恍惚とした表情で語りだした魔女に、青年は肩をすくめて踵を返した。おやすみい、と手を振って。

暗かった空には、いつの間にか月が出ていた。

疲れには一番です（前書き）

オカシイ。喜劇、のはずが笑いが無いぞ？

疲れには一番です

ランとシトラスがヴァーを飛ばして、2日ほど。このまま走り続けられれば一両日中にが確実に追いつくだろうところまで来ていた。4日ほどかけて追いつくところを、2人は3日もかからずに追いつこうとしているのだ。

すでに2人の格好はボロボロ、といっても過言ではない。

汗と砂にまみれ、全体的に黒ずんで見える。風呂にも入らず、走りっぱなしだったのだから当然だ。

起きているときには走り続け、食事もヴァーの上。寝るのもヴァーの上。寝るときなどはランとシトラスが交互に眠りつつ、もう片方が寝たほうのヴァーも一緒に誘導するというとんでもない強行軍を敢行した。ちなみに、眠るときヴァーを走らせたら確実に落鳥するので、歩かせたが。

日に何度か魔術で加速までした。

ヴァーも3回交換させた。

3回交換させたのに、自分たちを交換させることは出来ないわけで、さすがに体力に自信のあるシトラスですらこの強行軍には閉口した。

ヴァーの長い首に頭をもたせ掛け、何とか走っている有様である。ここまでのしたのだから、追いつけないはずがない。

と、シトラスの隣を併走していたランが、ぐらりと傾ぐ。

「うわっ！　ちょ、嬢！！」

慌てて手を差し出し、落鳥しかかったランを片腕で抱きとめる。ランが離さなかった手綱がヴァーの轡を引いたため、ヴァーが急ブレーキをかけた。シトラスも落鳥する前に自分のヴァーに停止を命ずる。

ランの顔色を伺い、シトラスは舌打ちした。

黒髪が汗のせいで額に張り付いている。その肌の色は尋常でなく

白い。

「嬢ちゃん、具合悪いなら言ってってば」

「疲れただけ…10歳の体力舐めるなよー」

喋れるだけマシ、とシトラスは内心でホッとした。類まれなる頭脳と怪力と魔術操作を誇るランであるが、その体は10歳の子供なのだ。体力がないのは仕方ない。本人もそれを分かっているから、戦闘になれば短期決戦型で即座にケリをつけるのだ。

が、こういう場面では我慢しないでほしい。

「ちよい、休もう。ここで嬢ちゃんに倒れられたら拙いっしょ」

「…それもそうか。それに、私たちが追いついたところで2人だけで全員捕縛するとか、無謀なものね」

それにやっておきたいこともあったし、とランは素直に頷いた。

エルゾ村から出て、その日の夜。ジーンから連絡があった。

相手は『人食い魔方阵^{イーターズ}』。ランもシトラスも、その名には聞き覚えがあった。曰く、魔物の王たるロニセラを信仰し、世界を絶望へ叩き込もうとしているとか。淫行、食人、虐殺、生け贄、拷問あらゆる残虐な行いを平気とする狂集団だとか。

その辺はジーンのが詳しい。ランとは傭兵経験の差で、シトラスとは頭の出来の差で。

その『人食い魔方阵』の中で、幹部の一人の魔女。それが今回の大規模誘拐の首謀者ではないか、とジーンは言った。邪悪なる蛇ヴァルフアムに魂を売った、『蠢く蛇^{スネーカー}』と呼ばれる女である。

噂も色々と聞く魔女だ。女性の生血を好み、幼女的心臓を食らう。100年以上美しい姿を保ったままであるという、妖艶な女。

魔術結社の中でも実力は折り紙つきな『人食い魔方阵』の幹部とその部下たちを相手に、ランとシトラスの2人だけで乗り込んで行って全員殺さず捕縛するなんていうのは無理だ。なおかつ、殺人励行だったとしても、遠距離魔術などを一斉に発動させられれば、近づくことなくこちらが死ぬ。

人売りではなくて生け贄だったが、それを止めるためにはこちら

もそれなりの手数が必要だった。

「嬢ちゃんの体力回復用に、なんか美味しいもんでも作るかなー」

「どうせ焼くぐらいしかできないんだから。適当でいいよ。…食べられれば」

「んな、どーでもよさげに言うんじゃないの」

ヴァーから降りて、2人は街道を外れて脇を流れる川のほとりまで歩く。ヴァーはシトラスが2頭とも引率する。ランの体がまっすぐ歩けていないので、ヴァーを引率したら鳥の足に轢かれる気がしたのだ。あながち間違ってもいないと思う。

川岸は、ちょうど寝泊りできるスペースがあった。むしろ、蛇行する川からの堆積物でスペースは大型の馬車が5台ぐらい楽に泊められるほど広い。

「お風呂入りたいよね」

「まず飯だろ？ 作ってるから、少し休んどきなよ」

川を見つめてぼんやりと呟くランに、シトラスは背を向けた。ここで野宿する人も多いのだろう、岩の中央を凹ませた鍋みたいな石と、石を積み上げた竈らしいものがそのまま残されていたのでありがたく使わせてもらうことにする。

鍋らしい岩を洗い、水を注ぐ。竈には火を熾す。

どこん。

「どわっ!？」

突然響く轟音に慌てて振り向けば、川原に直径5メートルのクレ―ターが出来上がっていた。

「…嬢ちゃん？」

寝ぼけてるのか、機嫌が悪いのか、それとも飯の催促なのか。とりあえず何の反応も返してこないランをいぶかしげに思うが、飯の準備に再度取り掛かる。

鍋はまだ水だが、その中に乾燥米を投入する。同じく乾燥した野菜類も細かく砕いて一緒に入れた。ふやけるまで時間がかかるので、その辺に転がっている丸太をお椀の形に削っていく。彫刻刀がなく

とも、これぐらいならば腰の剣でなんとかなるものだ。さすがに意匠を彫るほど凝るつもりもない。

お椀を2つに匙を2つ作ると、ちょうどよく鍋の中身が沸騰していた。

塩味を利かせた干し肉を細くスライスし、鍋に入れる。

匙でぐるりとかき混ぜて、完成。

シトラス特製、雑煮粥である。

「嬢ちゃん、出来たっ…うわぁ…何、それ」

後ろで何かごそごそしていたのは知っていたけれど、シトラスは振り向いて絶句した。

もうもうと湯気の立つ、乳白色の露天風呂。

自慢げに腕を組んで立つ、具師の少女。作品造りもいいけれど、疲れているんだから無理はしないでもらいたい。第一、こんなところにこんなもの造って、どうするつもりだ。有難いけれど、何もないところに湯気の立ち上る温泉がぽつんとあるのは異様な光景である。

「何、って。お風呂。せっかくだから、ゆっくり入りたいでしょ？」

それは、時と場合による。シトラスは心の中でそう突っ込んだ。

秘密兵器（前書き）

ようやく、本領発揮。ものづくり。

秘密兵器

シトラスの雑煮粥をお腹いっぱい堪能し、ランは早速露天風呂に飛び込んだ。

ついでに砂と汗にまみれた防刃仕様のシャツとパンツ、対魔術対衝撃用の魔導文字を織り込んだ黒のコートも脇を流れる川に浸して洗っておいた。あとで竈に『乾燥機』の魔導文字を書いておけば服もすぐに乾くだろう。

それまでタオル一枚半裸で歩き回ることになるが、一緒にいるのが気心知れたシトラスである。

これで手を出してきたら、川底に沈めるだけだ。

「シトラスー、竈の火始末したら、燻製作るみたいに竈の上も囲っておいて。灰が服に付くのやだから、板でも敷いといてくれると有難いかも」

「へいへーい」

腰に布を巻いただけ、その格好に剣を持つという変態みたいな姿のシトラスが苦笑している気配がする。

一応、見張りというやつである。

服はランが乱暴に引っぺがして自分の脱いだ服と一緒に川に放り込んでやった。

悲鳴を上げるシトラスに、何だか楽しくなったのは秘密である。

せめて腰布だけは勘弁して、と言われたので、葉っぱでも着けてろと言ったのだが突っぱねられた。隠すからヤラシイのだ、だってら全裸でいれば良いとも言ったが、嬢ちゃんは女の子でしょーっ！と更に突っぱねられた。

わがままな男である。

そういう問題ではない、とジーンがここにいたらそう言っていただろう。

程よく温まったところで、シトラスと見張りを交代した。

竈の下に敷かれた板に『吸水』の魔導文字を書く。天板に重ねられた石のひとつを手にとってこちらには『熱射』、四方の壁には熱風を巡らせるために、指向性を持たせた『右風』という文字を書いた。これで、簡易乾燥機は完成である。

あとは服を放り込んで竈の前面も蓋をする。ちなみに、中を覗き込んでも構わないが、軽度の火傷を覚悟したほうが良いかもしれない。服が燃えるほどではないので、酷いことにはならないだろうが。

「あとどれぐらいで、服乾く？」

「10分もかかんないかも」

顔を上げると、いつのまに温泉からあがったのか、水滴を滴らせたシトラスが覗き込んでいた。気が付かなかったあたり、せっかく見張りを交代したくせにまったく役に立たなかったランである。

「やー、さっぱりした。さすが嬢ちゃん、具師ってなんでもありだよなー」

シスターが便利屋だと勘違いする気も分かるわ、とシトラスは暢気にのたまった。

「褒めても煽ててもこれ以上は何も出ないよ？」

「ん？ いや、これ以上嬢ちゃんに何かしてもらおうとか、思っ
てないよ？ 嬢ちゃん何かして欲しーってんなら何でもするけど。
そういう嬢ちゃん何かしたいことがあるんじゃないかなかったっけ？ 見
張りしとくよ」

さらにと告げられたフェミニスト発言。

ランはまじまじとシトラスを上から下まで見つめ、

「顔の造作良し、性格良し、ギルド上位、ついでにフェミニスト。
これで頭の中身までマトモだったら最優良物件なんだよね。…浮い
た話の一つも出ないのは、どういうこと？」

ラン自身がその最大の壁である事実を差し置いて、溜息を吐いて
そう呟いた。

「服乾いたら、竈ごとぶち壊して良いんだっけー？」

竈の前で、シトラスの疑問が聞こえてきた。

小指の爪ぐらいの長さの細い木の枝を2本束ね、白い糸を巻いていく。更に上から3分の1ぐらいのところに垂直にもう1本取り付けて、糸で巻いていく。簡単に表現するならば、トラブルドールというおまじないの人形に近い。

完成した小さな人形を脇に置き、仔細箱から銅板を取り出した。それを2セルチル四方に6枚切り分ける。その一つに錐で小さな穴を開けておいた。

火の温度を調節できる自作のアルコールランプを灯し、温度を最大にする。炎が青白く揺らめいた。

銅板をそれぞれ溶接していく。左右と底を次々に溶接し、最後に穴の開いた銅板を取り付ける。その際、中に先ほど作っておいた人形を入れた。溶接し終わると、片面に一つ穴のあるサイコロが完成。振れば、中に入っている人形がカラカラと音を立てた。

「で、嬢ちゃんは何を作ってるの？」

「んー？ 対魔女用錬具？」

仔細箱から赤黒い塊を取り出す。ついでに、両手で円を作った程度の小さい鍋も。

アルコールランプの温度を下げ、普通の赤い炎に戻して、鍋に塊と水を投入する。塊が溶け、鍋の中に真っ赤な液体が広がった。魔物の中でも人型をした上級魔の血である。

ぐつぐつと沸騰する鍋に、スライムの核、サラマンダーの鱗、幾つかの薬草を一気に混ぜた。

「…錬具？」

「魔具、かも」

鍋の中の血が、どろりと粘度を増す。その中に、銅板のサイコロを突っ込んで、更にかき混ぜる。

しばらくかき混ぜると、どういう訳かサイコロに上級魔の血がく

つつき、鍋の中の血を綺麗にこそぎながら球体を形作った。そこで、鍋を火から下ろし、アルコールランプも消す。

球体は大人の握りこぶし程度の大きさ、しかも赤から滑らかな黒に色を変えている。

鍋とランプを収納し、彫刻刀を取り出した。

罪人に押される焼き鍔の紋である髑髏と荒縄を表面に彫り、ある魔導文字も刻み込んだ。

「…魔具？」

「結局、導具になったよね」

パチパチ、と焚き火が爆ぜる。その前で、ランとシトラスは顔を突き合わせていた。

ランが疲労で落鳥しかかって、5時間。今日はもうこれ以上進まないと決めていたが、ランの作っていた導具が思った以上に時間を食ったせいで夜もだいぶ更けていた。

「で、それは何のために使うの？」

「さっきも言ったでしょ、対魔女用」

黒光りする玉をランはポケットに突っ込んだ。

「あの魔女なら、これで捕まえられるはずなの。噂が本当ならば、だけど」

「訳分かんないんだけど」

首を傾げるシトラスに、ランは片づけを終えるところの場に寝転んだ。ごつごつとした地面だけれど、文句を言っただけならいい。むしろ今までヴァーの上でうとうとするぐらいしか出来なかったのだ、横になれるだけ有難かった。

「さっき、首都からの旅人に会ってさ、サーカスのこと聞いた。ここから半日のところで野営してたって」

「そう。じゃ、ようやく追いついたって訳ね」

目をつぶると、一気に睡魔がやってくる。

「決戦間近、かな？ 夜中に、起こして…火の番、こーたいする、から…」

ランの意識が急激な睡魔に耐え切れず、ころりと落ちた。

秘密兵器（後書き）

首都へ向かう街道の途中に、温泉があった。神が授けてくださったのだろうか。温泉は乳白色で私の疲れを一気に癒してくれる。モルメア神よ、感謝します。私はこれで、まだ先へ進むことが出来る。（とある旅人の日記より抜粋）

最後の興行、頑張ってます。

キラキラと、日の光に輝くビーズの衣装を身に纏った踊り子たち。巨大なボールの上で器用にバランスを取りながら笛を吹くピエロ。刃物のジャグリングをする筋骨隆々の半裸の男。

獅子や虎を鞭一本で自在に操る動物使い。

綱渡りの美女に空中ブランコの少年少女、小さなトランクに体を収納する軟体男、女性を10人乗せて歩く人間ピラミッドの大男。僅かな時間で組み立てた巨大テントの中は、街中の人でいっぱいである。だれもがサーカスの興行を心待ちにしていた顔だ。

サーカス団が朝から演目を開始して既に3回の演目を終えていたが、疲れを見せぬサーカスの団員に観客から惜しみない拍手と歓声が飛ぶ。

テントの周りにはこの人出にあやかろうと、沢山の屋台が軒を連ねていた。綿菓子や棒付き飴、から揚げが飛ぶように売れ、テントの中へ食べ物や飲み物を抱えた子供たちが嬉しそうに駆け戻っていく。

首都に程近いハーモアの街で、サーカス団は興行を行っていた。

「首都ラガンジュに入る前の最後の興行だよ！ さあさあ嬢ちゃん坊ちゃん爺ちゃん婆ちゃん兄さん姉さん父さん母さん、皆寄って行きなあ！」

黒いマントに髑髏のメイクをした仮装女がビラを撒きながら街中を歩いていく。その後ろから同じくボカッチャの皮を被って仮装した陽気なお化けが笛や鈴を鳴らしながらぞろぞろと歩く。更にその後ろには、彼らをものめずらしげに眺める子供たち。

落ちたビラを拾う街の住人が、周りの友人と顔を見合わせて巨大テントへ足を向ける。

ハーモアの街は、いつも以上に賑わっていた。

その様子を見つめる4つの目。勿論、ランとシトラスである。

2人は前日の休憩でゆっくりと体を休めることが出来たため、一気にサーカス団との距離を詰めてハーモアの街で追いつくことが出来たのである。

ランたちに合流しようとしているジーンに、ハーモアの街で追いついたよーと通信を入れれば、褒められるどころかどんな無茶をしゃがった、この馬鹿たれ！と怒鳴られることとなった。ちなみに、ジーンは単独で合流しようとしてこちらへ向かっていて、ギルドマスターのハーヴェイは一人乗りの飛竜で先に首都へ向かいラガンジュ周辺管轄のギルドマスターと合流するという。

ジーンはどんな手段を使っているのか、ランたちのもとまであと2日もすれば到着するという。それこそどんな無茶をしゃがった！と言いたいぐらいだ。

ハーヴェイはすでに首都に到着している。飛竜ならばマリアンジュから首都まで3日で行けるからだ。だが、飛竜はグラナダ国管轄の特殊移動用であり一般人にはまず乗る機会もないし、なにより乗りこなすにはそれなりの技術と経験と、なにより度胸がいる。：らしい。

一度国からの依頼に参加したシトラスが飛竜に乗ったが、もう無理、と途中で降りた経緯がある。

「ハーヴェイの作戦だと、ラガンジュに入る前にケリをつけたいんだって。どうもラガンジュでしか出来ない生け贄の儀式があるんじゃないか、って話。そうじゃなきゃ警戒の強い首都まで子供たちを引き連れていくなんて馬鹿な真似しないもんね」

「ラガンジュに入られて万一包囲網を破られたら、それこそ儀式されかねないってことか？」

ハーモアの大通りの一角にあるカフェ、そのテラスでランとシトラスはサーカス団の動向を見張っていた。

見張る、といっても大げさな事は何もしていない。どうせ今はサーカスの興行中だ。せいぜい街中を歩き回る仮装したビラ配りの連中の子供たちを見る視線を、何とはなしに眺めるぐらいである。

ランは黒いコートや仔細箱を久しぶりの宿に預け、今は深緑のベルベットのドレスを着込んでいる。白いフリルと黒いレースのドレスは、ランを貴族の娘のような気品ある姿に変えていた。ハーモアの街の高級店で半額に値切って買った暴拳の品である。

シトラスは黒色のハイネックの防刃シャツに、ぴったりとしたズボン。淡い紫のゆったりとした袖の上着を羽織っている。腰には双剣。ランが貴族のお嬢様ならば、こちらは少女を守る騎士^{ナイト}だ。

少なくとも2人の見てくれはそういうものだが、中身は当然ながら野蛮なほうへ天秤を傾ける人種である。

「ジーンが言うには、幼子を大量にを生け贄にすると魔物の王が復活するんだって。だけど、無理だろうよそこまで深刻に受け止めなくても構わないがな、子供の命はともかく。ってさ」

ランは目の前に聳え立つアイス3段重ねのモロン、パーナ、チチグなどの果物をこれでもかと盛り付けたフルーツパフェを口に放り込んだ。食べていけないはずのシトラスが、その光景にお腹いっぱいな顔をする。

「けど、ラガンジュで戦うのも住民に迷惑かかるし、なにより王のお膝元でそんな面倒な騒ぎは勘弁してっていうのがいろんな関係者の本音っぽい。それに、首都に入る前に一度生け贄の儀式をして魔女の力を底上げしておくだろうから、そのときに踏み込んだほうが犠牲も少なくてすむよーってジーンが」

「つまり、明日か明後日あたりが本番って訳か。腕が鳴るなー」

「うん、それでね。踏み込む3時間前に、この玉を割ってくれる？」

ランが唐突にシトラスに小さな玉を手渡した。

「…何する気？」

双子石、と呼ばれる片方が割ればもう片方も割れるという相互特性を持った石。淡い桜色のそれを光に翳しながら、シトラスは眉を寄せた。

なんだかランが面倒、というか騒動を起こす確信があった。

最後の興行、頑張ってます。（後書き）

ボカッチャ、モロン、バーナ、チチグ。カボチャとメロンとバナナ
とイチゴ!...と似たものだと思ってください。

最後の夜へ（前書き）

そろそろクライマックス！
突き進むぜ！

最後の夜へ

曇天の下、真っ白い鳩が一羽舞い降りる。

皺もシミもない真っ白な細腕が伸ばされると、鳩はその腕目掛けて進み、

するり、と白蛇と化して細腕を伝って白い紗を巻きつけた服の中へと滑り込んだ。

「やはり、ラガンジュは閉鎖されてるわね。まったくどこから漏れたのかしら、忌々しい」

シシリア・ノーマンは瞳を閉ざし、舌打ちしそうな声色でそう呟いた。彼女の使い魔^{ファミリア}に、首都の様子を探らせたのだ。

首都の大門は厳戒体制。どこから話が漏れたのか、サーカス団が表向きで実質は『人食い魔方阵^{イーターズ}』ということを見破られてしまっていた。このまま行けば確実に戦闘になるだろうし、衛士の目を欺くために少人数で入り込むことも、子供らの通行証がない状況では難しいだろう。

子供らを置いていく事は出来ない。優しさ、なんてものではなく生け贄には必要だから。

「そら面倒なことになりよったなあ。どないするん？　このまま強制突破？」

「坊やは何かアイデアはないの？」

テントの入り口に陣取っていたシシリアは、室内で優雅にお茶を飲む青年を振り返った。

既にピエロの服は脱ぎ、黒のノースリーブシャツにポケットの沢山付いた軍用ズボンみたいなカーキ色のズボンを穿いている。

「えー、何で俺がそないなこと考えんとあかんの？　俺の仕事は子供らを引き寄せられる導具をつくることであって、姉さんにアイデアだすことやないんやけどな」

「…坊や、それ本気で言っているのかしら？」

魔女の周りの魔力が渦を巻く。

青年はその姿に焦ることもなく両手を挙げた。ホールドアップ。

「冗談や、冗談。せやけど、このまま強行突入のほうが楽やと思う。俺らのメンバー全員で一気に突っ込めば、姉さんと何人かの子供らは包囲網を潜り抜けられるやろ。下手に策なんか仕掛けて、一人一人搦め手で捕まるような愚は冒さんほうがええで」

「『人食い魔方阵』のメンバーを見捨てろ、と？」

青年が心外そうに笑った。

「そのために連れてきとったんやないんか？」

「…ご想像にお任せするわ」

シシリアは妖艶な気配を引き摺りながらテントを出て行った。

＊

嵐の前触れのような、ざわざわと木々が不安を煽る音を奏でる真夜中。

魔女の号令によって擬似サーカス団の全てのメンバーが一箇所に集められた。プライベート用のテントでは入りきらない総勢27名。彼らは普段の演目の練習に使う大きなテントにいた。

サーカスに使う全ての道具は撤去され、その代わりに中央に紫色の魔法陣を描いた絨毯と逆五芒星になるように置かれた職台が5つ。そして、1メートル四方の鉄格子に子供一人が所在無げに座り込んでいる。子供はどこか良いところのお嬢ちゃんのように、着ている服は砂や埃で汚れていたけれどいかにも上等そうである。

「良い夜をお過ごし？　これからの予定について、結論がでたわ。今後の予定としてはこのままラガンジュまで進み、強行突破する方向で行く」

集められた団員を見回して、シシリアは声を上げた。

ざわり、と周りがざわめく。

「危惧するところの通り、このまま強行突破した場合には何人か

の犠牲が出るでしょうね。けれど、我ら『人食い魔方陣』の大いなる目的は魔物の王たる御方の復活！　そのためならば、私も命すら投げ出す覚悟がある。それは皆も同じよね？」

周りに目を向ければ、全員が熱っぽい眼差しで頷きあっている。その姿に、魔女は微笑を浮かべた。

「なれば、この『蠢く蛇』^{ストーリー} シシリアが皆に力を分け与えてあげるわ。私の生け贄の魔術ならば、ここにいる全員に戦術級魔術^{レギオン}を使えるほどの魔力を与えられる。その力を使い、魔物の王を封じた憎きグラナダ王家に死の鉄槌を！　そして、あの御方を甦らせるのよ！」
わっ、と皆が口々に歓声を上げる。戦術級の魔術を使えることに喜ぶ者、シシリアの生け贄の魔術をじかに見る機会に恵まれたと興奮をあらわにする者、魔物の王を甦らせられるというその言葉に胸を躍らせる者。

彼らの歓喜に、魔女は満足そうに頷くと、魔方陣の中央に置かれた鉄格子の前へ立つ。

中の子供は怯えた顔で彼女と周りを交互に見つめては、震えている。その姿は憐れだが、『人食い魔方陣』の連中にはそんな感情はない。精々扱いやすい生け贄だ、と思うぐらいだった。

魔女が子供に妖艶な笑顔を向けた。

「大丈夫よ？　怖がらないで。これからあなたは偉大なる成功の第一歩となるのだから」

偉大なる成功の、第一歩の『踏み台』に。

子供の血を周囲に撒き散らし、この場にいる全員でその血を浴びて淫行に耽ることこの魔術は完成する。

白く細い腕を鉄格子に翳す。

「あ、…あの…っ」

魔術を発動する直前、中の子供がシシリアに声をかけた。

怯える様子があるけれど、生け贄に話しかけられたのは初めてだった。思わず手を止め、その少女を覗き込む。

黒髪に、涙に濡れる琥珀色の目。

「なにかしら？」

深緑のドレスを着た、貴族の娘。

ラン・ホー・ジョーは赤い唇を三日月形のような笑みを浮かべた魔女に、こう言った。

「ブス」

空気が一瞬にして凍りついた。

突入！

笑顔のまま固まった魔女は、少女を見つめる。

言われた言葉を、頭は理解してくれなかったらしい。口から出てきたのは何の変哲もない一言だった。

「…え？」

勿論、親切なランはもう一度、むしろ更に詳しく言葉を吐き出した。

「果てしない地平線ブス！ 割り切れない一円ブス！ 目も当てられない七転八倒ブス！ どこを取っても金太郎飴ブースっ！」

魔女は言われた言葉の意味を半分も理解できなかったであろうが、少なくとも罵倒されているということは分かったらしい。

少女の言葉をどこまで理解したのか、白黒ピエロの青年がテントの隅で蹲って震えている。堪えきれない笑い声で、大爆笑しているのは確実だった。目に涙を浮かべるあたり、そうとうツボにはまった様である。シシリアにとっては忌々しいことこの上ない。

その額に青筋が浮かんだ。ぶちり、と寛容さを示す縄がブチ切れる幻聴が、確かに響く。

「っ！！ この、クソ餓鬼いい！！」

今までの妖艶さや艶かしさをかなぐり捨てて、魔女は腕を振るった。

生み出される業火。魔女の腕に彫り込まれた青黒い蛇が、真紅に染まり炎と化しながら具現する。

何の詠唱もない。ただ、魔女の感情の爆発と共に蛇の頭を模した炎が、ランの入る鉄格子の籠を噛み砕く。ジュ、という僅かな音と共に、鉄格子が融解した。

魔方阵の描かれた絨毯に青白い炎を燃やし、シシリアの憤怒に満ちた赤い瞳が炎に揺らめいた。その姿に、周囲の団員たちは声もない。鉄すら溶かすほどの高熱を発する圧倒的な魔術を見せ付けられ

ただ、当然であった。

未だに笑い続ける青年は後ほど肅清しようと、魔女は心の中に刻み込んだが。

「ふん、他愛も…」

ない、と言い切る事は出来なかった。

言い切る前に、テントの布が上下左右関係なく引き裂かれたのである。

＊

ランから双子石の欠片を受け取って、次の日。シトラスは合流したジーンに盛大に説教を受けることとなった。

説教される内容は、ランがサーカス団に攫われたから。…とは若干違い、自分から捕まりに行ったから、である。どうして止めなかったんだと怒られても、シトラスにランを言葉巧みに止められる頭脳はないし実力行使も年端もいかない少女に対してできることではなかった。

首都から到着したギルドマスターたちとの協議の結果、ランを含めた子供たちの早期救出のためにその日の夜にサーカス団を強襲することとなった。

というのはほぼ建前で、本音はランが要らんことをして被害が更に広がるのを恐れたためである。

目を放した隙にサーカス団の野営地から火の手が上がり、メンバー全員ミディアムに焼きあがったままうんうん唸っている…なんてことになるかもしれない。

サーカス団には近づくのが大変だという見解を持っていたランであるから、儀式のために一箇所に集まるようなチャンスがあればこれぞ天の思し召しとかなんとか訳の分からないことを言いつつ、大規模魔術でドカンとかやりかねない…というか、やる。

これらはジーンやシトラス、ギルドマスターらの意見であり、ラ

ンに言わせればそこまで浅はかではないとの反論を貰うだろう。
とりあえず、ジーンと相談した結果、双子石はそのままにした。
いつ突入か分からない以上、そう簡単に割ってしまう事は出来なかった。タイミングを計り間違えて割らずに突入する愚は出来れば犯したくはないが、ランの所為でもある行き当たりばったりな作戦では仕方がない。

その日のうちに、ギルドと衛士から精鋭を5人と、ジーン、シトラス、ギルドマスターズの計9人でサーカスの野営地に身を隠す。ランが面倒を起こしていませんように、と祈るのも忘れない。

空は幸運にも曇天。月の光も差し込まない暗い草むらでじっとしていた彼らは、

集まる強大な魔力反応に草むらを飛び出て一気に儀式場となっているテントを引き裂くべく、斬りつけた。

彼らの心の中は一つである。ランが要らんことをしたのか！

テントをビリビリに破き、シトラスが中へ踏み込む。

目を周囲に走らせ、人数と位置を確認。彼らの心中とは裏腹に、そこにランの姿はない。となると、儀式を行おうとしたのかもしれない。犠牲者が増えたか、とシトラスは苦々しげに舌打ちした。

テントの中央の女が『蠢く蛇』^{ストーリー}だろうと予想する。やり合うつもりもないので、その魔女から視線をはずす。

シトラスは剣士である。一流と呼ばれる魔術師ぐらいならばタイマンでも何とかなるが、超一流の魔術師とやり合うには分が悪い。それならば、同じ魔術師のジーンに任せるほうが効率もいいし、安全だった。

他の連中に目を向けようとして、シトラスの眼球は一つの場所に固定された。

ぐずぐずと溶けていく、赤く熱せられた鉄格子。

その手前に転がる『双子石』に。

ランが、持っていた。

シトラスが割らずに持っている、その片割れ。

周りから聞こえる怒号と悲鳴と剣戟の音が、一瞬遠のいた気がした。

頭の中が煮えたぎるような感覚。周りのことも一切頭の中から蒸発したまま鉄格子に駆け寄ろうと足を踏み出そうとした。

その後ろから、ジーンに肩を掴まれるまでは。

「ジ、ジーン！ あれ、あれ：ランがつ」

動転したまま詰め寄ると、ジーンはシトラスが指し示した方向へ視線を向ける。

ふい、と逸らした。

「あれぐらいでくたばる様なランじゃないだろう、この過保護」
薄く笑みを浮かべながらそう言うジーンに、シトラスの頭が冷える。パチパチと瞬きを繰り返し、次いで眉を寄せた。

「ジーンに言われたらお終いな台詞だね、それ」

「お互い様だと思うがな。ともかく、あつちは何とかするから前は周りをどうにかしといてくれ」

頷いたシトラスが剣を抜いて走り抜けるのを見送って、ジーンは頭痛を和らげるかのようにこめかみを揉んだ。

鉄格子の脇に立つ魔女が、ジーンを警戒するように魔力を集めだす。彼女にもジーンの魔術師としての力量の高さが感じられるのか、いつにもまして真剣な表情だった。

無造作に魔女との距離を詰めるジーン。

その足がぴたりと止まった。

「ラン、いつまで死んだ振りしてるつもりだ」

「いやぁ敵と味方が入り乱れる中に入って間違えて味方ぶちのめすのも悪いし？　しばらくサボろうかと思ってたんだけどね」

灼熱の鉄格子から聞こえるのきな声に、魔女は信じられないものを見る目で振り返った。

爆ぜる火の粉も焼け爛れる鉄ですらも、触れる事は出来ないでいる。

炎のど真ん中に、深緑のドレスを身に纏った少女が不敵な笑みで

立っていた。

剣の傭兵（前書き）

戦闘描写につき、流血・残酷表現あります。

剣の傭兵

走り出したシトラスがちらりと後ろを振り返れば、赤く焼けた鉄格子の中に立つドレス姿の少女を見つけることが出来た。思わず、笑う。

あれだけ取り乱しておいて、それでもやっぱりあの程度のことではランが死ぬはずがないと思った。

目の前に女が飛び出てくる。

踊り子の一人だと認識する前に、シトラスの双剣が抜刀されて女の上半身と下半身が真後ろへ転がった。内臓も骨も綺麗に真っ二つにされた死体から、鮮血が零れ落ちる。

この程度の事は、シトラスにしてみれば準備運動にもならない。ただの据え物斬りと変わらなかった。

次いで飛び込んでくる巨大な男。こいつは人間ピラミッドだったかな、と覚えの悪い頭から記憶の残滓を掘り起こした。

腕力で振り下ろされる巨大な両刃の剣が、シトラスの頭上を過ぎていく。

空気の唸りを上げながらの突きに、後退。右下へ斬り込む連携にシトラスは右手の剣の刃を斜めに滑らせて回避した。耳障りな音を立てて刃と刃がぶつかり、火花を散らす。

シトラスは剣を軸に、男の懐へと滑り込む。

驚愕する男の顎から垂直に左の剣を押し込んだ。顎と口から血を滴らせ、シトラスを覆うように倒れてくるのを蹴飛ばして転がした。

「さすがは剣の傭兵ソードマスターだけのことはあるね」

「うっさいなー、人のこと見てないで仕事しろよ、お前ら」

シトラスの剣の間合いの外から、ハーヴェイが声をかける。

その彼は、長い槍を振るっていた。

飛び掛ってきた踊り子の一人を一瞬のうちに左の眼孔、首、心臓、右のわき腹、左太ももの五箇所を穿つ。血飛沫が円を描くように回

り、ハーヴェイの後ろから剣を振り下ろす踊り子の頭を突き刺した。槍に吊り下げられる死体を、無造作に振るい落とす。

ハーヴェイの脇にはラガンジュのギルドマスターであるウォルボラ老が立つ。伸びすぎた白髪の間から目だけをシトラスに寄越した。「年寄りにこの重労働はいささかキツイて」

「じゃあ出てくんなんっの！ 羽目外し過ぎてぎっくり腰とかいうオチはやめろよ！」

そう言いつつも老人は両手から鋼糸を放ち、寄ってくる者を全てこま切れにしている。その血まみれの鋼糸は空中に放り出された相手の剣を絡めとり、そのまま空中で振り回す。鋼糸と剣による不規則な攻撃により、さらに何人かが絶命した。

連れてきた精鋭たちは、魔術師と互角に遣り合っている。あくまでも、互角に。

それを見るとギルドマスターズの圧倒的なまでの戦闘力は化け物にしか見えない。それはシトラスに関しても言えることではあるが、自分の事は棚に上げている。

「…あいつら、何で連れてきたんだよ」

「運よく捕獲した奴らを運ぶ人員に決まってるだろう。下手に弱いと戦闘のとばっちりですんでしまうかもしれないだろう？」

ランに負けず劣らずの曲者揃いのギルドマスターズ。

言っていることもとんでもない。

ふと、シトラスが瞬きする。そのまま一步横へずれた。

風を切る音と共に片刃の曲刀が脇を通り過ぎていく。地面を穿つ剣は、返して横薙ぎの斬撃。シトラスはそれをしゃがんで回避する。前転して後ろを振り向くと、スキンヘッドの男が睨みつけていた。右側面に蜘蛛の刺青を入れている。

「ん、嫌な感じ」

シトラスの予感に正解を見せ付けるように、スキンヘッドの男の右腕が霞んで消えた。曲刀と一緒に。

直後、シトラスは首を傾けて体を回す。真後ろから頸動脈を狙い、

曲刀とそれを握る腕が空中に生えていた。一瞬のうちに消失、スキンヘッドの男に腕が戻る。

「うんわぁ、空間跳躍系の魔術？」

そう言って嘆く間も無く、男の両腕が消失した。シトラスは相手の攻撃がどこから来るのか予測せずに今度は前方へ飛び込みの要領で回避する。枯れ草色の髪と、首の後ろにちりっと痛みが走った。

死角から攻撃してくるのならば、前方に逃げれば回避できると踏んでの行動である。首を掻き切られなくて済んだ。ただし、その何度と同じ行動をするわけにはいかない。

「ははっ！ 俺の全方向攻撃から逃げられると思うなよお！」

男が嗤う。

だが。

「結局のところ、腕は2本だけしかないんだろ？ それのどが、全方向なんだっての」

嗤ったのは、シトラスも一緒だった。

死角から襲う攻撃。それはつまり、シトラスの視覚外である後方からという限定された場所からの攻撃に他ならない。

しかも、空間跳躍の魔術は、空間に自分の体を越えさせるもの。男の体と繋がっている。ならば、男の二の腕、上半身、視線を観察すればおのずと発動の瞬間の動作も見えてくる。

そのタイミングで、

シトラスは左斜め下から伸びてきたナイフを持った手を手首から切り落とし、真後ろから曲刀を振りかぶる腕を肘下から切断した。ごとりと自分の後ろで2本の腕が落ちる音がする。それをじつくり眺める趣味など、シトラスにはない。

前方では両腕を切られた男が獣のような叫びを上げてのた打ち回る。

止めを刺そうとシトラスは一步足を踏み出し、途中でやめた。痛みで絶叫するスキンヘッドの後ろに、いつの間にか真白い麗人が立っている。

返り血も浴びていないハーヴェイが、スキンヘッド目掛けて渾身の力を込めて蹴りつけた。

途端にスキンヘッドが沈黙する。

「そこそこの人数捕縛しておかないと、上への配慮も面子あるし」
こんな場所でも王子様みたいな男がにこりと笑みを浮かべる。その姿にシトラスは嫌なものを見る目で眉を寄せた。ハーヴェイの笑顔に対してこんな顔が出来る人間は限られている。

「どうせ捕縛すること忘れて、殺戮衝動で動いてたんだろーが」

「視界に入った瞬間斬り捨てた君に言われたくないけどね。というわけだから、悪いけど生け捕りの方向で動いてくれるかい？」

「はいよー」

シトラスは剣の血糊を払うと鞘に収めた。

これから殴打力が物を言う。鞘ごと腰から引き抜いて、シトラスは飽きもせず飛び掛かってくる連中に振り下ろした。

魔術の傭兵（前書き）

魔術戦です。魔術戦。まじゅつ。んん？ …あれえ？

魔術の傭兵

シトラスが魔術と剣戟の中へ消えたのを見送って、ランは赤々と溶ける鉄の檻を跨ぐ。そばに立つだけでも相当の熱さだということにも関わらず、ランの顔は涼しいものだった。

魔術による防御。

魔力量と抜きん出た魔術操作により、外界からの一切の攻撃を無効化し続けているのだ。

「ランは下がっていて良いぞ」

「勿論そのつもり。あ、捕縛の方向だから」

トドメはさすな、とそう言い終わるとランはジーンとシシリアから距離を取った。ふと、その顔に笑顔が浮かぶ。

「そういえば、さっきのシトラスの言葉聞いた？ 私のこと名前で呼んでた。相当取り乱してたわね、アイツ」

「これ以上のドッキリは勘弁しろよ。心臓に毛が生えたようなシトラスでもたんわ」

俺も心労で老けそう、とジーンが自嘲気味に呟いた。

その間、魔女はまったく動くことが出来ないうでいた。動かない、ではなく動けない。

ジーンから溢れ出る魔力と既に開始されている魔術戦、上位の魔物である邪悪なる蛇ヴァルフアムと契約を結んだ魔女をもってしても簡単に太刀打ちできない。

水面下で、魔女が影より召喚する蛇を呼び出そうとするのを、ジーンは一つ残らず叩き潰していく。叩き潰す、というよりも魔女が行う呼び出すのに必要な手順に横から無駄な術式を追加入力、無理やりエラーを引き起こして召喚を失敗させているようなものだ。

言葉にすれば簡単そうに聞こえるが、目に見えない魔術式を読みそれに干渉するなど正気の沙汰ではない。

むしろ魔女が蛇を召喚し終えてから火力に物を言わせた魔術で、

それこそ文字通り叩き潰したほうが簡単だし効率もいい。

何故ジーンが、面倒くさい方法を取っているのか。

簡単だ。実力を見せ付けるためである。

俺はお前よりも強いのだ、とジーンは魔女に対して魔術で突きつけているのだ。

だが、シシリアにも魔女としてのプライドがある。この程度だと思われるのも、屈辱だ。

「舐めるんじゃないよっ！」

ごっ、と魔女から炎が立ち上った。いや、炎の色をした濃密な魔力。

その力が魔女の体をぐるりと一周し、魔女の上空3メートルあたりで凝る。

蛇、である。

シシリアを守るような形でとぐろを巻き、無残にも引き裂かれて曇天を拝めるテントの上部まで鎌首を上げた巨大な蛇がジーンを見下ろしていた。

「我が蛇の君よ！ 貴方の僕に敵を喰い散らかす力を与えたまえ！」

魔女が胸元を広げる。

そこには焼き鏝で押し付けられたと思われる紋章が刻まれていた。赤い炎の色をしていた魔力の蛇が、魔である漆黒へ変化する。

邪悪なる蛇が、魔女に力を与えたのだ。

美しい白磁の肌は無残にも焼け爛れたその禍々しい印。邪悪なる蛇に忠誠を誓った者に与えられる、僕の印。僕たちにサディスティックな愛情を与える事でも有名な蛇の魔物は、自らの力を求められれば僕にも手を差し伸べる『残酷な博愛』の性を持つ。

つまり、ジーン対シシリアだった構図は、ジーン対邪悪なる蛇ヴァルフアムと魔女シシリアという構図に書き換えられたということだ。

ジーンの顔が、歪んだ。

ぶちぶちぶちっ、と何かが千切れる音と共に、ジーンの右腕から大量の血が噴出した。

今までもぐら叩きの要領で湧いて出ようとする影の蛇に術式を追加入力していたが、新たに加えられたヴァルフアムの力がジーンの術式に逆に進入、そこから純粹な魔力が逆流してきたのである。咄嗟に張った防壁のお陰で、術式を考える脳味噌への魔力の逆流は防いだ。

もし脳へ魔力が逆流していたら、血を噴出していたのは頭だったはずである。というよりも脳漿をぶちまけていた可能性が高い。

ジーンが行っていた妨害魔術が停止。

魔女とジーンの周囲に、一気に大量の影色をした蛇が飛び出した。

「喰い散らかされて、死ねっ！」

ヒステリックに叫ぶ魔女。白かった髪は、魔物である主人の影響を受け、徐々に灰色がかってきていた。

「ったく、ヴァルフアムもよくまあこんな女の忠誠を受けたもんだな」

ぽつりと。

誰にも聞こえないほどの音量で、ジーンが呟いた。顔は苦痛に歪んでいるわけでも絶望に歪んでいるわけでもなかった。ただ、少し苦々しげに笑っている。

ゆらゆらと輪郭をおぼろげにしながら、影の蛇がジーンへ殺到する。

それを。

ジーンは手を一振りするだけで、消滅させた。

大げさな魔術の詠唱をしたわけでもない。何らかの導具や呪具を使ったわけでもない。ただ、手を一振りしただけで。

「…え？」

燃えている炎を消すよりも簡単に、叩き潰したのでもなく吹き飛ばしたわけでもなく、数百にも及ぶ影の蛇の魔術を一瞬で消滅させたのである。

シシリアは呆然と、その光景を見る。

何もない。今まで自分の手足のように動き、目の前のいけ好かない男へ攻撃していた蛇が、いない。

がくり、と膝が崩れた。

邪悪なる蛇ヴァルフアムとの契約にほとんどの魔力を費やした彼女に、余力は残っていない。だが、残っていたとしても、上位の魔物の力ですら簡単に消し飛ばした男にこれ以上どんな攻撃をすればいいのだろうか。

「アイツの博愛もいい加減にしろつつたのに。どいつもこいつも、俺を何だと思ってやがる。結局、尻拭いしてんの俺じゃねえかよ」

ぶつぶつと口汚く誰かを罵るジーン。

「あ、あんた…一体？」

「なあ、あんたもそう思うだろ？ 部下の舐めてのはちゃんとしねえといけねえよな」

黒々としたジーンの双眸が魔女を射抜く。

既にシシリアの魔力の塊であった蛇は消滅し、ジーンの目の前には腰を抜かしかけた哀れな女が一人いるだけだ。

「あ、んた…」

「今度会ったらシメとかねえとな」

「あ、貴方…様、は…っ」

ジーンの所業に蒼白になりつつあったシシリアの顔に、僅かに赤みが差す。力の入らない体でジーンへ向かって手を伸ばそうとし、

「はいはい、そっこまでー！」

シシリアの伸ばした手を躊躇いなく振り払ったのは、深緑のドレスの少女だった。

具師の傭兵

魔女の手を払いのけ、無造作に割って入ったランにジーンは眉を寄せた。

「ラン、危ないぞ。いくら魔力が尽きそうだといっても、仮にも魔物と契約を結んだ魔女だ」

「あーはいはい。ジーンのメツキが剥がれかけたから仕方なく危険を顧みず、割って入った私になんて言い草。悲しくてこの辺一帯の地形を変えちゃいそう」

よよよ、と大げさに泣きまねするラン。

ジーンが大きな溜息を吐いて、口を閉ざした。地形を変えられては困る。

「…に、してるの？」

「ん？」

こんな血なまぐさい場所でさえいつもと変わらない態度のランが、首を傾げた。目の前で腰を抜かしたままの魔女が、ぶつぶつと何かを呟いている。

よく聞こうと耳に手をあて。

「何故！ どうしてあんたみたいな餓鬼がっ！ その御方の傍に立つの！？」

キーン、と耳から脳髓を突き抜けるような叫び声にランが仰け反った。

「崇めなさい！ ひれ伏しなさい！ その憎たらしい口を縫いつけ、許しを請え！ その御方は…！」

「煩いなあ」

たった一言。魔女の叫びを一蹴し、ランは口を尖らせた。

「ジーンが本当に望んでいることも分からないくせに、偉そうな口を利かないで。第一あんたには色々と罪状があるって分かっている？ あんたの命は私が握ってるの。人に命令できる立場じゃないっ

て、分かる？」

「ラン、魔女の言葉は人には毒だぞ」

お前の言葉は悪人に毒だけどな、という台詞は飲み込んだジーンである。

無駄にお喋りなぞしていればいつの間にやら洗脳されていた、何てこともありえる訳だ。ランの性格上そういう術にかかり難そうだが、もしやということもあるだろう。

ジーンの忠告に、ランは頷いた。

「そっか、分かった。それにこんなオバサンの話に付き合う義理もないもんね」

魔女のこめかみが引きつるのを、無視。

ランはポケットから先日作った導具を取り出した。黒色をした玉である。手のひらでころころと転がしながら、魔女の額へ近づける。腰を抜かしたまま後退さるシシリアに、ジーンの拘束魔術が発動。手足を地面に縫い付けられたかのように動かせなくなる。首を反らせるのを、ランの細く小さな手が、顎を押さえて正面へ向けた。

「コレはね、乙女の生血を浴び、乙女を食らった女を裁くための導具なの。あんたにぴったり」

魔女の顔から血の気が引いていく。

「や、やめ……っ！」

「……あのさあ、あんたに対して命乞いした子供っていた？ その子供、助けてあげた？ 助けもしなかったような人間が、他人にそれを要求するのは場違いじゃないの？」

ふ、と呆れたように溜息を吐いたランは、その黒い玉を躊躇うことなくシシリアの額に触れさせた。

「『閉ざせ』」

魔力が導具へ流れる。

黒く、硬かった玉が溶けたようにシシリアの体内へと沈み、魔女の瞳から光が消えた。

ランが手を離すと、魔女は抵抗する様子も逃げる素振りも見せず

にその場で座り込んだままである。うろろと目線を彷徨わせているが、焦点があわない。

手を伸ばし、地面を叩き、そして自分の顔に触れる。

「ラン」

訳が分からない、とジーンは魔女から離れたランに顔を向けた。

殺したわけではない、拘束したらしいのだがそれにしては魔女の実行が不可解すぎるのだ。

「あれは一体？」

「ああ、あれ？ あれは……」

一仕事終えた、と先ほどの不機嫌さが嘘のように晴れ晴れとした顔のランが説明しようとし、

「ありゃ、バートリ・エルジェーベドの受けた罰やな」

今まで一体どこにいたのか、黒いコートに山高帽を被った青年が、魔女の後ろで興味深げに彼女の様子を観察していた。

「うら若き乙女の血を好んだエルジェーベドは貴族として位が高かったん、死刑は免れたんや。その代わりとして、一生涯自分の居城の寝室に幽閉されんねん。窓も扉も厳重に漆喰で塗り固められた暗闇に、や。今の魔女の姉さんは、一切の外界からの刺激が無い状況っちゅーわけや。目も見えとらん、声も聞こえへん、触れたものも感じ取れへんのとちゃう？ ……せやから言うたんや、暗闇に閉じ込められても知らへんよって」

得体の知れない登場の仕方、更に悦に入っただけにランの導具の説明をする可笑しな青年に、ジーンが警戒の視線を込めてランの前へ出る。

ランの顔は、驚愕に歪んでいた。登場の仕方に驚いたわけではない。この青年が、『バートリ・エルジェーベド』を知っていることが問題だった。

知らず、目つきがきつくなる。

「あんた、何？」

ピエロだった青年は、魔女の周りをぐるりと一周し、呆けたよう

な彼女のその顔を覗き込んだ。

その顔には好奇心が溢れている。導具の概要だけ理解しているようだが、詳しい材料や魔導文字を知りたいと、青年の目が輝いていた。

「俺か？ それはおチビさんにも分かつとるんやないか？ 一度ある事は、二度ある言うやんか、なあ。自分がこっち流されてもーた時に、自分だけやないんやろーなって、思わへんかったか？」

ランに向ける顔は、笑顔。ただしどこか壊れたような。

邪悪に傾きつつあるその笑顔を忌々しげに見つめ、ランは口を歪めて無理やり笑みを浮かべる。

「こんなところで、同郷の悪人に出会えるなんて思わなかったわ」
青年の手に握られる、金羊の角。

この青年が同郷の人間であるならば、その角が角笛であるならば。青年が金色に輝く角を唇に当てる。

「俺も、思わへんかったわ。まあ、短い付き合いに、なるやろーけどな」

にこりと笑い、ハーメルンの笛吹き男の『笛』を吹き鳴らした。
笛は子供を操ることができる。だが、それはハーメルンの町長がとある仕事の報酬を出し渋ったために、子供たちを連れて行ってしまった、という話に繋がる。

その仕事とは。

鼠狩り、である。笛吹き男の『笛』は、鼠を操ることが出来るのだ。

それを事実とするかのように、ランとジーンそれに周囲で戦闘を繰り広げていた全員が、目を赤く光らせる『人食い鼠』の大群に囲まれていた。

具師の傭兵（後書き）

人は、魔になることがある。敵の前で、恋人の前で、家族の前で、大いなる運命の前で。では、逆は？（『人と魔と』 シーク・ワイエ スト著）

同郷の悪人

周囲を埋め尽くす人食い鼠の数に、団員を相手にしていたシトラスが叫ぶ。

「うわぁあっ！ 気持ち悪いっ！」

双剣で薙ぎ払うも、鼠は後から後から湧いてくる。しかも、この人食い鼠、敵味方の区別をつけてくれるような有難い頭脳は持ち合わせていないらしい。捕縛したサーカス団員たちにも、鼠の魔の手が及んでいた。

「痛った！ た、助けて…」

「うがーっ！ メンドイ！！」

ところどころを噛み付かれては、シトラスたちギルドや衛士の面々に助けを求めている。助けなければいけないのは分かっているが、こちらとら自分の身も守らねばならぬ。暢気に転がっているだけの人間から、どこに鼠が群がって痛いだの早く助けるだの言われるのは気に食わない。

もう2、3人ばかり放っておいてもいいかな、と諦めかけるシトラスだった。

それでも食いちぎられそうな団員の救助、というか被捕縛者の安全のために頑張るシトラス。とはいえ際限なく文字通り湧いて出る勢いの人食い鼠に、早々に音をあげた。

「嬢ちゃんっ！ なんとかしてええ」

「…私はドラえもんじゃないんだけどね」

人食い鼠を丁寧に一匹一匹蹴り上げるランが、不服そうに呟く。ランの周りの鼠たちは、ジーンによって消滅させられている。文字通りの、消滅。

ジーンが腕を一振りすれば、大量の鼠が灰に変わる。

笛吹き男の『笛』を吹き鳴らす青年が、一人だけぽつりと被害を免れる魔女に視線を移した。

「おチビさん、どないすんねん？ この人食い鼠は利巧とは言えへんけど、アホでもないで。鼠の嫌いな超音波でも聞かせるんか？ あんま、意味ないと思うけどなあ」

「魔獣に家庭害獣対策が効くわけないでしょーが」

アホか、とランが忌々しげに吐き捨てた。ランはもしものために、サーカス団が使う『笛』がハーメルンの笛吹き男のものと酷似した時のために、鼠除け対策の笛を準備してきていた。だが、それはあくまでも家庭害獣である普通の鼠のためのものだ。人間が大好物という化け鼠に効くとは思っていない。

「あとは、そーやなあ。うちの魔女の姉さんに頼んでみんか？」
まったく鼠を寄せ付けない魔女が、虚ろな顔で座っている。

この魔女が契約を交わした相手は、『蛇』だ。鼠の天敵である。今シシリアの体には、先ほど力を借りたばかりの邪悪なる蛇の気配が色濃く残っていた。

魔女の罰を解除し、彼女に協力をさせれば、ここにいる鼠など恐るるに足らない。
だが。

「却下。解除した途端、トンズラされるのがオチ」

解除した場合、青年が人食い鼠に指向性を持たせてギルドメンバーと衛士に攻撃を限定、対処しているうちに気が付いたら魔女もその他のサーカス団員も全員消えていたなどという笑えないことになる。

そこまでランも馬鹿ではない。

どうもピエロの青年には馬鹿にされている気がしてならないのだが。むしろ、子供扱いか。

「あんた、私のこと馬鹿にしてない？ そもそも、さっきのあなたのセリフの一度あることは二度あるんじゃないやなくて、二度あることは三度あるっていう言葉を間違えてる時点であんたの方がよっぽど馬鹿だと思うけど？」

「細かつ！ そんな俺すら覚えてへんよーな過ぎたこと、ねちね

ち言ってる嫌われるで。そもそも、こないな可笑しな異世界漂流なん二度も三度もあっても困る言うねん。おチビは若干ユーモアのセンスに欠けてるとちゃうかー？」

びきり、とランのこめかみに青筋が走る。

「クロス」

ランは自分の堪忍袋が裂けかける音が聞こえた気がした。たまには、自分に素直になるのもいいかもしれない。怒りにまかせて。

そんなことを口に出せば、お前はいつでも我儘放題口になっている。とジーンとシトラスの両名から突っ込みが入っただろうが。

ランは人食い鼠を無視し、滑るように青年の懐へ潜り込んだ。

右足が床を打ち鳴らし、そのエネルギーをすべて右拳に注ぎ込む。震脚と、打撃。

どん、という音と共に青年が後ろへ吹っ飛んだ。だが、ランの顔は冴えない。不意打ちを狙った攻撃に、青年が合わせてきたのである。自分から後ろへ飛んだのだ。

「チッ」

思わず、行儀悪くも舌打ちが漏れた。

「危なっ！　つか、えげつない真似すんなや！　内臓潰す気か！　！」

「内臓潰すなら、大纏だいてん使うわ」

「八極拳！？　もう嫌や、暴力おチビに構ったたらマジに殺されるかもしれへん」

ランの使ったのは、中国拳法の一つ。八極拳。大纏とは、打撃を避けながら相手の体に密着し、後方へ投げる技である。が、投げる前に腹部に寸頸を叩きこむ流派もある。それを、腹と背の両方から叩き込めるとどうなるか、勿論内臓破裂である。

青年も八極拳を知っていたようだ。固有名詞に反応した。顔を青くする方向で。

ランの間合いから慌てて飛びのき、『笛』を口に付けた。

「これ以上やったら、大怪我必死やからなあ。魔女の姉さんは仕方ないからおチビんとこ預かりにしといたる。そのうち『人食い魔法陣』^{イーター}の方から誰か超越されるやろ」

「あんたじゃないの？」

かかって来い、ボコボコにしてやる。とランが好戦的な目を向ける。

「俺は、フリーの具師やから。これで依頼は終わりや」

笛を口に咥えたまま両手を広げ、青年は軽薄な笑みを浮かべた。吹き鳴らされる、音。

「それじゃあな、おチビさん」

「ええ、さようなら。地獄に堕ちろ」

青年が別れを告げたその一瞬の油断に、ランが手首の隠し場所から取り出した棒手裏剣が突き刺さった。

表面の魔導文字に、青年が目を見開く。

『必殺必中』。投げれば必ず、自分の定めた目標にぶち当たる。ばきん、と鼠を操っていた『笛』が、割れた。

終幕の炎（前書き）

とりあえず、次で一区切りかな。

終幕の炎

「アホかああああ!!」

全員から、絶叫で説教された。ランはその大音量に一瞬顔を顰めたものの一応愁傷な態度で、

「…うん、ゴメン!」

今回は私が悪かった、とランが軽く片手を上げた。…愁傷?

人食い鼠を操っていた『笛』が壊れ、制御が利かなくなるとどうなるか。

結論。

暴走、である。

テント内にいる人間には手も足もでねえわ、と人食い鼠が考えたのかどうかは分からないが、テントを出ようと鼠たちがやたらと駆け回る。統率が取れていたときには向かってくるのを蹴散らせばよかったが、逃げる鼠を追いかけてどうにかするのは無理である。

野放しにすれば、近隣の村や町に被害が及ぶだろう。

逃げ出そうとする鼠を集中的に狙って、今のところは外への脱出を防いでいた。テントをビリビリに破いたジーンたちにも問題があるのだが、それは些細だろう。

「そもそも、あの関西弁のピエロが化け鼠集めたせい!」

「そもそもと言える被害か、これが!」

ちなみに、そのピエロは騒ぎの混乱に乗じて遁走している。最後に見た、お気の毒様という人を馬鹿にした笑顔が脳裏に焼きついて腹立たしい限りだ。

「だって、あの導具はどうしても壊しておきたかったの」

子供を誘拐する導具など、あってはならない。

また作られたならば結局壊した意味が無いと思うが、あのピエロの青年は一度作って壊れたものは二度と作らない気がする。

「そのへんはまあいい。だがこの状況、どうする?」

ジーンはそう言うのと、顎に手を当てて思案する。

悠長にしていられるほどの猶予は無い。今でこそなんとか均衡を保っているが、どこで洩れが出てくるかわからない。現に、衛士の方は魔物と戦うことが少ないせいもあり、ぎりぎりの状況のようだった。

ランはその返答に、魔術の詠唱で答えた。

「『閉ざせ』」

テントを覆うほどの大きさで、結界が張られる。逃げようとしていた化け鼠の数匹がその結界に弾かれた。

「とりあえず、鼠限定結界：なんて。私たちはすり抜けられるように結界術式を改良してあるから、皆外へ出て」

「：なんか、嫌な予感が」

シトラスが呻く。

「で、出たところで、結界内を大爆破」

全員の意見が一致した。またいらんことを。

ランの小さなことでも大きなことでも更に問題を大きくして解決するその面倒な性質。特に被害を被るジーンとシトラスには日常茶飯事だが、こんな場面でやらなくても良いではないか。

「別到大爆発させなくても：」

ハーヴェイの突っ込みに、皆一様に頷いた。

だが、

「何で？ やるなら徹底的に、がマリアンジュ^{うち}んとこのギルドに掲げられてるモットーでしょ？」

「：そのモットー、取り消しても良いかな？ 新しく『何事も穏便に』とかにしよう」

「明日からね」

歯牙にもかけないランに、ハーヴェイは撃墜された。

「ここで大爆発したら、周りの村々に迷惑がかかるぞい」
今度はウォルボラがランを諭す。

「人攫いの集団をとっ捕まえた祝砲と思えば、怒られないでしょ」

こちらも撃墜。

「テントごと爆破なんて、大変だぞ！」

「一匹ずつ捕まえるほうが大変だったの」

「魔力の量が足りないんじゃないのか？」

「あんたの薄くなった髪の毛よりマシっていうぐらいはあるっつの」

撃墜王^{エース}の言葉に次々と沈む男ども。彼らは最後に、頼みの綱のジンとシトラスに目を向けた。

「「無理」」

2人は揃って首を横に振った。

数分後、サーカス団の野営地に轟音と火柱が立ち上った。

＊

シュヴィー朝86年、早春月13日。

空を覆う赤々とした炎は、さながら蛇のようであった。

夜の闇にとぐろを巻くように蠢く蛇。その下では英雄たちが邪神に魅せられた者たちとの壮絶な戦いが行われているのであろう。

静寂に戻りつつある森の奥では、今なお剣戟の音が響いているはずだ。

子供たちの泣き声と、魔女の詠唱の声と、そして英雄たちの勇敢なる叫びが私の耳に幻ではあるが、確かに届いた気がする。

翌朝、衛士詰め所の前に並ぶ邪教の徒。

そこには妖艶な魔女が虚ろな顔で座り込んでいる。彼女の目には、現世の全てが映らないのだろう。

美しい山々、愛らしい花。思わず微笑を浮かべたくなる、子供たちの姿。

それに全て拒絶を示した魔女の、その姿に私は恐ろしさのあまり魔女から目をそらした。

そこに英雄たちの姿は無い。

彼らはまたどこか絶望に飲まれそうな者たちのために、剣を取っているのだろう。

『ベド自事伝』 マルデュ・ベド著

反省会（前書き）

しばらくお休みします。ネタ考えます。

反省会

事件収束の祝砲という大爆発から数日後、大衆食堂にて内輪の祝賀会が開かれた。

集まったのは、『人食^{イーターズ}い魔方陣』による集団誘拐事件解決の立役者であるランとジーンとシトラス。マリアンジュ管轄ギルドのギルドマスターであるハーヴェイ。店主のジルは勿論、その妹のシアと彼女の夫であるオルフ。そして、誘拐されていたシエス少年の8名である。

祝賀会、といっても大層なものではなく皆の無事を祝してジルお手製の料理をたらふく食おう、という趣旨である。ランたちしてみれば、ジルの依頼料では割に合わない仕事量だったための割増料金の代わりでもあった。

「というわけで！ 無事にシエス君も帰ってきたことなので！カンパーイ！！」

音頭を取ったのはやたらと機嫌のいいハーヴェイ。

グラスの中を混ぜあうような乾杯。ビールにワイン、オレンジジュースと混ざり合って飲めるのか。

酒まで入ってしまったオレンジジュースを手になっているシエスは、キラキラとした目でハーヴェイを見つめている。シアとオルフもハーヴェイに見惚れている姿に、ランたち3人はこの青年が呼ぶんじやなかったと心から後悔した。いたいけな少年に、道を踏み外させたくない。

母や伯父と同じ銀色の髪の毛の、年上の女性たちに可愛がられるような美少年である。僅かにタレ目なところが父親に似たようだが、それ以外は何故かジルにそっくりだった。

「シエス君が無事に帰ってきたけれど、無事に済んだのかと聞かれれば首を傾げたいんだがな、ラン？」

「十分無事に済んだでしょ」

ジーンの咎めるような科白と眼差しにランが至極不思議そうに首を傾げた。

駄目だこりゃ、とシトラスがいがみ合う2人から目をそらしてビールを呷る。

酒の肴はジル特製の肉料理とランが作ったチーズ揚げ各種盛り合わせ。ランが厨房の一角を占拠してつまみを作り出したあたりから、ジルお手製料理を食べようという趣旨は立ち消えていた。

「あの最後の爆発がちょっと、ねえ。逮捕者12人っていう異例の勝利だっていうのに、上からあれにだけケチつけられたんだよ?」
「何さ、こっちは数日間走りっぱなしで追いついて、導具作って、潜入までして捕まえたって言うのに。最後の最後でパツと出のギルドマスターにオイシイところ取られた上に、報奨金の半分を迷惑料とかで掠め取られたんだからおあいこでしょ?」

「は!?! 何それ? 俺聞いてない!」

シトラスが叫ぶ。

「半額ぶんどられたってどういうことだよ! 確かに報奨金少なかったけど!」

「ま、結局ランのいらんことのせいでそうなった、ということだ。俺は裏技使って距離を短縮したんで、あんまり大変な目にはあつてないんだけど」

「ふざけんなちくしょー! 結局、ランは最後に腹いせの大爆発でストレスは発散できて、今回何の問題も起こしていない上街道突っ走って疲れて、使わない頭を珍しく使った俺が一番の貧乏くじ引いたんじゃないか!」

酒ごとテーブルに懐くシトラスに、周りには思い思いの方法で彼の冥福を祈る。

「そんなことよりさ、どうしてシアさんだけ精神系の魔術から回復できたの?」

「あ、それは多分コレが原因なんじゃないかな、って」

冥福を祈ったら祈ったで気が済んだのか、ランは話題を強引に変

えた。シトラスの苦労など『そんなことより』程度である。

ランの素朴な疑問に答えたのは、なんとシエスであった。

シアが首に下げていたペンダントを外し、ランへ渡す。

木製の札のような、簡素なペンダントである。紐は麻製で、木札と一緒に可愛らしい花の形をした木の彫り物が下がっている。花は青い染料が塗られていた。

「これは？」

ランの後ろからジーンが覗き込む。

「これ、ピエロのお兄さんに貰ったんです」

脳裏を駆け回る大量の人食い鼠、そして黒いピエロ。ランの手にした木札がミキメシと不穏な音を立てた。あの顔を思い出すと、むやみに力が滾るのよね。と呟いている。

「一番大切な人に、自分を忘れてほしくない人に渡しなさいって。だから、母さんは僕のことを覚えてたんじゃないでしょうか」

ランは木札をひっくり返し、

ふっと笑った。

木札の表、彫りこまれた小さな花で作った枠の中に書かれた魔導文字。

「日本人って、人がいいから根っからの悪人にはなれないって、誰か言ってたね」

あの壊れたような笑顔には、何か訳があるのかもしれないし、無いのかもしれない。演技だったのかもしれない。だが、少なくともこのペンダントをシエスに渡したのがピエロの本心だとしたら、自分と相容れないような道の一步向こう側へ踏み越えたような狂人ではないのだろう。

「ラン？ その魔導文字、読めるのか？」

軽く頷いて、木札のペンダントをシアに返した。

「『Forget me not』、私を忘れないで。あいつ、もしかしたらサーカス団逮捕されるの、望んでたのかもね。そうじゃなきゃこんなもの作ってまで、痕跡残すような真似しないでしょ」

ーよ」

何を企んでいるのか、何がしたいのかは分からないが、同郷のよしみで名前ぐらい聞いというてやればよかったか。

と、しんみりした空気をぶち破るように、厨房から戦闘するような音が響く。

「お前らー！ 冷めねえうちに食えー！」

奥から声をかけるジル。

皆互いに顔を見合わせて笑うと、テーブルに載った豪勢な料理に手を出した。

反省会（後書き）

ピエロのあり方に、賛否両論ありそうな予感。
でも気に入ってるんで、持ち上げときたい。

めでたい果実（前書き）

はい、おまちどう！ あれ？
待ってない？
いやいや、そんな事
言わずに…どうぞどうぞ。

めでたい果実

季節は春から夏へと移り変わろうとする。

柔らかな新芽の緑は、瞬く間に濃く瑞々しい色へと姿を変えていく。青空も更に青く、暖かな木漏れ日も次第に黒い石畳をじりじりと焼き焦がす熱へと変わるだろう。

春の草花は花を落とし、葉を茂らせる。

今はツツジの朱色や白い花、藤やスミレの紫がその鮮やかさを競うように咲き乱れていた。

ランの住居への道である梅路うめのみちは通りの名となった梅の花は既に無く、緑の葉が風にそよいでいる。もうしばらくすれば、大きな青梅が実るだろう。

それでも家々の花壇にはパンジーをはじめとする園芸種が通りを歩く人の目を楽しませているし、空から覆いかぶさるように藤の花も見ごろを迎えていた。

マリアンジュはたとえ冬であっても、草花の絶える事はないのだから。

路地の奥の奥。トマトやキュウリ、ナス、ハーブ類などの食べられる草しか植わっていないランの家。

家主であるランは暖かな日差しが降り注ぐ天気の良い日であるにもかかわらず、朝からずっと家に籠っていた。

立っているのはキツチン。

別に錬金術を使って精霊石から自我の無い無性精霊エーテル体を取り出しているわけでもないし、ポーションを作っているわけでも毒薬を作っているわけでもない。

ボウルに浮き粉っぽい粉と片栗粉を入れ、熱湯を入れて手早く混ぜる。

ふたをしてしばらく置いたのち、台の上にあけ、砂糖とラードの代用品である脂の塊を加えて手でよく捏ねていく。すべすべで耳た

ぶのようなやわらかさになったら幾つかの塊に取り分ける。

ランの作業に淀みはない。作業中に汚れた道具類をためることなく洗う始末だ。

麺棒で薄く円形にのぼし、取り分けたうちの1つには水で溶いた緑の色粉で色をつけ、葉っぱの形を作っておく。

レイゾーコにすでに用意してあった白あんを作った皮で包み桃の形に整える。

葉を2枚ずつ付け、湯気のたっている蒸し器に放り込んでしばらくしたら完成である。

出来上がったのはホカホカと湯気の立つ寿桃、つまり桃饅頭である。

最後に、コンロの上に用意してあった焼きゴテを桃饅頭一つ一つに丁寧に押し付けた。

「仙桃、完成っ！」

後ろに効果音と光が飛ぶようなテンションで、ランは出来上がったばかりの桃饅頭を掲げてポーズを取る。誰も見ていないので、恥ずかしがる必要も無い。

無いのだが、ランは我に返ったようにピタリと静止した。

「：阿呆らし。っていうか、ノリで変なもの作っちゃったなー」
微妙な顔で、頬を掻く。

作ったのがただの桃饅頭だったら良かったのだが、最後の最後でノリでやってしまった魔導文字の焼きゴテが問題だった。

「仙桃だしなー。普通の人間に食わせられないじゃん」

仙桃イコール西王母である。中国神話に詳しい者ならば、一発でピンとくる程のポピュラーなアイテムだ。

しばらく悩んでいたランは思いついたように手を打った。

「ま、ジーンになら食わせて平気か。死とかの概念ないって話だし」

この調子なら、シトラスには死なないからと言って痺れ薬などを飲ませそうな勢いである。

昼もだいぶ過ぎたころになって、玄関からガチャガチャという音が聞こえ、ランは手を止めた。

強盗や空き巣の類ならば、家の前の路地に鎮座する守護者のテデガーディアンイベアが丁寧な接客をしてくれるはずなのでそういう客ではない。

「ただいまー！ 嬢ちゃん、クッキー買って来たから一緒に食べようー」

「ただいま。ラン、何事も無かったか？」

玄関から聞こえたのはジーンとシトラスの帰宅の声。聞くだけで過保護ぶりが分かる科白である。

途中で身奇麗にしてきたのか、戦闘後のはずが随分とこざっぱりしている。

先の誘拐事件で街道脇にランが温泉をこしらえた話をギルドマスターであるハーヴェイに話したところ、ギルドの中にも欲しいという話になったので建設した。恐らく依頼達成報告後、ひとつ風呂浴びてきたのだろう。

「お帰り。ハイオークの殲滅、だっけ？ 随分時間かかったみたいだけど？」

しかも、ジーンは無傷だがシトラスは頭と腕に包帯を巻いている。大抵の傷ならば回復魔術で痕も残らず治るのだが、どうやらそうとう大怪我をしてきたらしい。

「ハイオーク程度に苦戦したの？ どうしちゃった訳？」

「あー、途中でレッドドラゴンが乱入してきてさ。邪魔だったんで、尻尾切り落として蹴飛ばして刻んできた。ハイオークのほうは旦那が一人でお片付け」

「：私も人の事言えない程度に非常識だけどさ。シトラスも大概だよね」

竜種戦といえば、騎士団一個大隊で挑む大規模戦闘の代名詞であ

る。

キッチンのテーブルにレッドドラゴンの鱗の入った袋が乗せられ、流し台の脇に各種部位らしい血の滴る肉が置かれた。どちらも本来ならばギルドに高額報酬で引き取ってもらえるものだが、これらは全てランの製作に使用されてジーンやシトラスに武器・防具に組み込まれたりする。その分、報酬のほうはランから払われるので、ギルドに持つていくよりもお得だった。

片付けの最中だった蒸し器をジーンが受け取って、戸棚の一番上に仕舞う。それを見ながら、ランはポッドを取り出してお茶の準備を始めた。

シトラスがクッキーを買ってきたのなら、紅茶かハーブティにしようとう戸棚を漁る。

ついでにメレンゲ焼きもレイゾーコから取り出した。この2人とお茶をするのにクッキーだけで足りるとは思わない。本当ならば桃饅頭でも出せばいいのだが、危ない導具と化しているので却下が。

「あ、なんか美味しそーなもん発見！」

能天気な言葉に嫌な予感を覚え、ランは慌てて振り返る。

シトラスが、『不老不死』の魔導文字を焼きつけた仙桃を頬張っている姿が目に入った。

「うわあああああああつ！！」

ランにしては珍しく、絶叫した。

仲良く、一緒に（前書き）

ちよっとお下品です。注意！

仲良く、一緒に

シトラスが食べた桃饅頭の危険性を口にする前に、とりあえずの応急処置として鳩尾に一発拳を叩き込んで吐いていただいた。

何の説明も無く、ランの暴拳を受けたシトラスには災難である。

「何してる、ラン！」

「吐いた！？ 全部吐けた！？」

ジーンが慌ててランを羽交い絞めにする。ランの前では吐瀉物を拭いながら、肉体的にも精神的にもダメージを受けているらしいシトラスが眉を寄せている。

「：ちよ、いくら俺でも、怒る、よ？」

「その辺に関してはゴメン。でも、シトラスの食べたモノがモノだったから」

羽交い絞め、というかランを高々と持ち上げていたジーンは、暴拳に及んだ少女が落ち着いたのを見て取って床へおろす。雑巾を何枚か虚空から取り出すと、床へ放る。

「とにかく、片付けろ。話はそれからだ」

いつも以上に怒っているらしいジーンの顔を見つめたランは、溜息を吐いて頷いた。

テーブルの上には金彩の縁取りのオールドローズのティーセット。紅茶はシトラスの胃と食堂の粘膜を考えて、ロイヤルミルクティーである。ただ、ランのティーカップには僅かに緑がかった透明な液体とレモンの輪切りが浮いている。ミルクティーの嫌いなランは一人ミントティーだ。

ティーカップと同じ絵柄の皿には、クッキーと焼きメレンゲが並び。その隣には色とりどりの果物が籠から溢れんばかりに盛られて

いた。チョコレートやナッツ類もテーブルに並び、すでに3時のおやつな雰囲気ではないが、食べ盛りなシトラスや胃が四次元空間もなくやというジーンにとってはコレが普通である。

そんな豪勢なおやつを前にして、3人は揃って溜息を吐いた。

「ラン、またなんてものを作ったんだ…」

「興が乗っちゃったんだってば。ジーンなら食べられるし、シトラスにはしっかり言っておけば良いかなーって思ったんだけどね」
言う前に食べられたわけである。

「しかし、よりもよって『不老不死』ねー。実感わかないけど」
自分の両手を眺めるシトラスに、ランは手にしていたスプーンを放り投げる。

「実感あってたまるか。星が終わるまで生きながらえるなんてどんな拷問よ。吐かせておいたから、大丈夫だと…いいなあってぐらいの希望的観測だけど、不老不死になってない事を祈るのみよ。一応今のところは体に異常も無いみたいだし、体に導具を取り込むと文字が浮き出るって話だけどそんな兆候も無いみたいだし…今のところは」

断定できない事だらけの言葉の数々に、シトラスは顔を引きつらせた。

「要はなってる可能性もあるってことじゃねーか」

「とりあえず吐かせた。消化されなければ何とかなるんじゃないかって、ついでにもう一手段も講じてあるけどね」

もう一度、3人は溜息を吐く。

「まあ最悪、死なくなったら永眠って方法で氷河の奥底で眠るとかあるぞ」

「この際宇宙に放り出して漂流とか？ それなら死んでんの変わらないよね」

2人の想像にシトラスがぶるりと震える。

「他人事だと思ってるっ！ いや、他人事だけど。それを俺の前で言わないでくんない！？ 何か殺人計画練ってるみたいですよ」

く怖いんだけど!」

「あながち間違っではないな」

「うわぁ、旦那すごく楽しそうでヤダ」

と、不意にジーンが眉を顰めて立ち上がった。

シトラスが首を傾げる。

「旦那?」

「:トイレ」

リビングを出て行くジーンを見送り、ランはクッキーに手を伸ばした。

さくさくとした食感と中に入っているアーモンドのカリカリとした食感が合わさってなかなかおいしい。甘さもちょうど良いぐらいだ。

「シトラス、これ何処の店?」

「んー? これ? ギルドんとこの前の通りの:っ!」

言いかけて、立ち上がる。一筋の汗がシトラスの横顔をたどって落ちた。

そのまま椅子を蹴ってリビングを出ると、足早に廊下を進み、ジーンが未だに出てこないトイレのドアに拳を打ちつける。

「旦那! 早く出てっ!」

『無理!』

中からくぐもった声が叫ぶ。

「やばい! マジやばいから!」

『やばいのぐらい分かる! っていうか、ラン! お前一体何をした!?』

その言葉に、シトラスが青ざめた顔で振り返る。廊下の先にはティーパーツを持ったランが佇んでいる。

『さっき聞き逃したが、お前が言ってたもう一手段って何だ!』

ランはことさら沈痛な顔を見せる。

「出すもの出させるために、シトラスに下剤を飲ませようと思っただよ。で、私ってば自分で言うのもなんだけど、優しいからさ。

一人でトイレに籠るなんて可哀想だなんて
嫌な予感がするのは、そのポッドの中身。

沈痛そうな表情は、いつの間にかキラキラと輝くような笑顔になっている。

「ポットに下剤、入れといた」

『こんの、ど阿呆ーっ!!』

「説教は後にして、早く出てえええ…」

叫ぶジーン、トイレのドアを前に崩れ落ちるシトラス。

シトラスに不老不死の仙桃を食わせた事はともかく、2人に下剤を飲ませた事に関してはまったく反省する気の無いランは、満足そうに頷いた。

ランの優しさ、人はそれをありがた迷惑という。

2人で仲良くゴロゴロピーになった所で、トイレは一つしかないのである。

暗黒書庫（前書き）

ゆっくり更新していくつもりです。

暗黒書庫

銀縁の盾紋が朝日にきらきらと輝いている。^{エスカッション}

総合補助機関、通称ギルド。幫助、と名のつく通りにギルドが行っているのは人や商店、国家と傭兵間の仲介業務である。

血気盛ん、下手を言えば頭の足りない連中が大半の傭兵に、様々な契約書と契約金の交渉をしろというのは無理な話。傭兵に仕事を依頼する一般人は、相手の武力に契約金を釣りあげられる危険もあるし、事実として傭兵にビビる人は少なくない。そういう契約事に不慣れな傭兵と、力にものを言わせられて契約金を割高にされかねない一般人の仲介は必要不可欠だった。

まだ辺りの商店も開いていない朝7時30分。だというのに、ギルドの前はまるで昼間の大通りのように賑わっている。魔物の退治や商人の護衛といった仕事で、朝からマリアンジュを出る傭兵たちだ。

日の出とともにマリアンジュの大門が開くので、ちょうどこの時刻が昼の仕事に出る傭兵が一番多い。通勤ラッシュ、といったところか。これで夜間の屋敷の護衛や魔物の夜の生態調査などの仕事がある傭兵は夕方にギルドから依頼書を持って出ていくため、昼の仕事から帰ってくる傭兵と鉢合わせになり、今以上にごった返すのだ。

さて、まだ店も開いていないのならば、仕事を受けた傭兵がどうやって仕事に必要な物資を調達するかといえば。

「あんれ、ランチゃんこんなとこいるの、珍しいー」

エセ中国人を絵に描いたような、でっぷりと太ったちよび髭の男が陽気な声をあげる。

「仕事か？ 仕事か！ 往復何日よ？ 携帯食料いるか？ 干し飯安いよ？ ベーコンもチーズもいいの入ってるよ」

「ちよつと、エセ商人。挨拶ぐらいはすべきじゃないの？ って

いうか、早とちってくれたところ悪いんだけど、仕事じゃなくて調べ物で来たの」

ギルドの裏手に広がる大きな倉庫街がある。その大半の倉庫を改造し壁をいくつか取り払って、小さな商店が軒を連ねていた。商店だけでなく、露天商の簡素な布のテントの下にも所狭しと商品が並び、呼び子が声を張り上げている。

そこは傭兵に必要な物資を一気に買い集められる、^{バザール}商店街『ヴェルトウーカ』だ。

24時間営業、というか閉める扉すらない簡素な店には武器や防具類を売るところもあれば一般用の服を売る店もある。昼夜関係なく仕事をする傭兵のためにとギルドが主催する商店街ではあるが、売っているものは傭兵のためだけにあるものではない。24時間営業の便利さで、普通の人も買い物に訪れる。

そのため、昼間は細い路地にまで人が溢れかえる。スリにとって格好の稼ぎ場所だろう。勿論、傭兵の財布を奪った場合はその場で襟首掴まれて衛士へお土産直行コースであるが。

だが、現在早朝の時間帯のためか、それほどの混雑は見られなかった。

ランはエセ商人のへんな客引きの声を受け流し、雑踏の中へと足を入れる。

かなりの広さのある商店街の路地をいくつか曲がってどこかの店の裏口を抜け、更に路地を進んだ先。路地の奥、喧騒から切り離されたような薄暗い空間。

黒石の壁の脇に小さな黒い扉の入り口の前で、ランは立ち止まった。

扉の横には申し訳程度の大きさの標識が下がっている。

『書庫』。

ここがランの目的地である。

ただ『書庫』と名のつくその場所は、扉を開けた先の階段を延々と下りたところにある。

入り口の黒い扉よりも重厚な鉄鋌の打たれた扉を開けると、縦25メートル横15メートルほどの空間が広がっていた。その空間の両脇には3メートルの高さの本棚が25メートルびっしりと覆いつくしている。

「やほー。ちよっくら調べ物に来たよ」

ランは25メートル先の本棚の突き当たりに声をかける。そこには簡素な机と椅子があり、腰を下ろしている老婆がいた。

長い白髪を三つ編みに結わえ、漆黒のメイド服のようなエプロンドレスを着ている。奇怪なことに両目は黒い包帯が巻かれ、その布には赤い蚯蚓ののたくった様な魔導文字と思われるものが描かれている。右手にも黒い包帯と魔導文字が描かれ、羽ペンを握り締めた形で固定されていた。手元には壁一面にある書物の装丁と同じ黒い皮の白紙の本が置かれ、老婆はまるで紙面が見えているかの勢いでもって文字を綴っていた。

老婆の名はレーベッカ・ミルヴェツテ。

ギルドにいる瓶底眼鏡の同名を持つ、彼女の祖母に当たる人物である。

「…シトラス・バートンの『不老不死』を解決する方法が書かれているものはないよ」

「うわあ、しょっぱなから挫折しそうな有難いお言葉をアリガトウ。その辺はもう置いておくことにして、体内に魔導文字を取り込んだ具体例とその弊害あたりを調べとこうかな」

疲れたようにこめかみを揉むランは、壁際の本の背表紙に目を走らせた。

「題名『暗き夜の悲劇』作者ニア・マリア、3歩先の左の本棚の一番下の段。題名『食人・食文』作者不明、5歩先右側の上から2番目の棚」

「りよーかい」

老婆の正確な言葉は、ギルドの依頼書カウンターに座る瓶底眼鏡少女とそっくりである。血の繋がった家族なのだから当然といえば当然だが。

ランは老婆の言葉通りの場所から本を取り出した。

2冊の本はどちらも本来ならば発禁本である。『暗き夜の悲劇』は体に大量の魔導文字を刻むという実験を行った研究者の暴露本であるし、『食人・食文』は文字通り食人主義^{カニバリズム}の指南書のようなものでついでに魔導文字まで食ってしまえという本である。

「しかし、相変わらずすごい蔵書」

ペラペラと『食人・食文』を眺めたランは、グロテスクな挿絵に眉を寄せて本を閉じた。

この『書庫』は、発禁本すら手に入る場所ではあるが、それだけではない。本来ならば公開不可能な王国の密約文書であったり一子相伝の魔術が書かれた本であったり、外へ洩れることのない魔導文字の書き方・意味がまとめられた冊子であったりが当たり前のように収蔵されているのだ。

ここにある本で、世界のパワーバランスを一気に覆すだけの知識が手に入るのである。

勿論そんなことをするような野望を持つ人間が、おいそれと入れる場所ではない。魔術と魔導文字によって巧妙に隠されたこの書庫は、ミルヴェツテ家に所縁のある者か彼らに認められた者しか入ることが出来ないようになっている。

そのミルヴェツテ家に認められているランに、老婆が顔を向けた。
「その本は貸し出し可能。『仕事』が片付いたら返してくれれば良いさ」

「ん？ 仕事って？ 私まだ今日はギルド寄ってないけど」

ランが首を傾げる。

老婆は包帯に覆われた顔で、見えているかのようにランを見た。

「お前さんに緊急召集がかかったよ」

緊急召集。

呼ばれた人は拒否権の一切無い問答無用の、特別で、緊急で、難易度の高い、基本的に国が裏で糸を引く『戦争参加命令』である。

物資補給

ランがギルドに登録して2年、初めての緊急召集である。

『書庫』を出てすぐ、空から目の無い白い鳥が舞い降りてランの肩へ止まる。ギルドの使い鳥であり、緊急召集などの火急の用事の場合に用いられる『どんな場所にいても見つけ出す』事に特化した魔鳥だ。

使い鳥は口に小さなガラス玉を咥えている。

伝令に使う魔導具。ランに読めない魔導文字で書かれているため、なんと言う意味で書かれているのか理解できないのだが、これに声を閉じ込めることで開封した相手に肉声を届けることが出来るすぐれものだ。わざわざ声色を真似る酔狂な者がいるとすれば別だが、本来この魔導具は声を届ける本人を受け取る側が確認出来るようにと配慮されたものである。

ランはガラス玉を使い鳥から受け取ると、近くの壁に投げつける。壁から、声が聞こえた。

『ラン・ホージョー様に緊急召集が発令されました。近くのギルドから瞬移装置スルシエルを使用し、王都へお集まりください。期限は半日後、それより遅れる場合は千里の魔眼ノーアイズ・バードの左足に伝言布を取り付け、最寄ギルドへの到着予定日をご記入ください』

女性の声でそれだけ言うと、声はぱったりと止んだ。

ランは思わずこめかみを揉んだ。

「事の内容が分からなきゃ、準備の仕様がないよ…」

普通の傭兵は主に着の身着のままで戦いに望める連中だが、ランは傭兵だけれど『具師』でもある。戦闘よりもものづくりで味方に恩恵を与えるのが仕事だ。

「場所は恐らく戦場。最近の戦争事情から言って西側のカーマイン砦の攻防戦かな？ 討伐系の依頼を受けない私が戦争に呼ばれるって事自体がそもそもおかしいんだけど。っとなると、砦を攻めあ

ぐねて超便利な導具が欲しいとか、そーいう所？　カーマイン砦って言えば、水資源の豊富さゆえに砦内外を水を湛えた堀で囲んであるって話だっけ」

水源の上流から水面に重油撒いて火いつければ？　と、下流域に多大な迷惑をかけるような案を呟きつつ、ランは路地を抜ける。

商店街の大通りへ出ると、喧騒が鼓膜を打つ。

『書庫』にいたのは僅かな時間ではあったものの、時刻は朝の市場が活気づく時間になっている。ランは人ごみを器用に潜り抜けると、エセ商人と呼ぶ人物のいる店へと顔を出した。

「エセ商人っ！」

「ちょ、ちょっと！　客がいる前でエセ呼ばわりだめヨ！」

「携帯食料、干し飯、ベーコンと：野菜と果物の乾物にチーズ、あとは：ナッツ類を一週間分用意して」

言うだけ言うと、銀貨3枚を売り上げ籠に放り込んだ。

横暴、と商人が呟いている。エセ呼ばわりされたせいで、せっかくの客は不審な人を見るような目と引きつったような笑みを浮かべて立ち去ってしまった。

「折角の上客だったよ、ランちゃんの所為ね！」

「こっちも上客でしょーが。あと、アークシールの樹液とマンドラゴラの根、ヤドリギの枝、シキミの葉と：投げナイフの一番ちっさいやつを15本」

店の奥では見習いらしい少年が、ランに言われたものを全て麻袋に入れていた。

商人がウイंकをしながら手を差し出す。

「きしよい」

「待って！　感想求めた訳じゃないヨ！　これじゃお金足りないね、あと2枚必要」

ランはポケットから銀貨1枚を籠に入れる。商人のこめかみが引き攣れた。

「…ランちゃん？」

銅版3枚を投入。首を振る商人に、ランは溜息を吐いて更に銅版2枚を籠に放り投げた。

「…ま、いいでしょ。お得意様だし」

「そう思うなら、もっとまけてくれないと思うの」

「これ以上まけたら商売上がったね！ 珍しいもの取り揃えるの、大変よ。売ってるって知ってるの、ランちゃんぐらいだけど」見習いから麻袋を受け取る。どっしりとした重みであるが、怪力を誇るランには苦になるほどでもない。ひよい、と背負うと商人に手を振った。

「じゃ、ありがと。またよろしく」

「いいよ、いいよー！ まいどありがとございましたー」

大げさに手を振って、まるで感動をあらわにする様な商人に苦笑しつつ、ランはまた人々の間をすり抜ける。

大きな荷物を持っても、その速さは変わらない。

商店街を抜けると、ギルドの横に出る。だがランはギルドには入らずに家の方向へ足を向けた。仔細箱しじょうばこを持ってこなければ仕事にならないのだから当然である。

だが、

「その荷物も持って、家に戻るつもりか？」

ギルドの前に、人影。その人影がしっかりとランの仔細箱を抱えていた。

「…あれ？ ジーン？」

ジーンはにやりと笑みを浮かべた。

「ほら、嬢ちゃん。その荷物持ってやるから、貸してみ」

しかもいつの間にかやら、ランの横にはシトラスが立っている。半ば強引にシトラスはランの持っていた麻袋を取り上げて肩に担いだ。

「シトラスまで、どしたの？」

2人は揃って空を指差した。

そこには2羽のギルドの使い鳥が飛び回っている。

「緊急召集に、俺とシトラスも呼ばれたんだ」

ジーンがそう告げた。

出発！（前書き）

若干、いつもより文字数は少な目かも。でも説明文長いなあ。

出発！

ギルドの中へ足を踏み入れた3人は、傭兵たちがたむろする受付カウンターを素通りして、その脇の扉から奥へと入っていく。

「そー言えば、シトラス。体の具合は大丈夫？ どっか痛いとか変な感じするとか、無い？ ゲロ吐くのかトイレに立て簞もるとかで忙しかったみたいだけど」

シトラスが顔を引き攣らせた。

「何処のどなたさんの所為ですかね！ 特にどこも異常ないけど」

「…俺も被害者なんだがな？」

「ああ、ジーンも大丈夫？ っていうかそもそもジーンにそういう事象は起きないと思ってたんだけど」

そういう事象、つまりは下剤を一服盛った事によるトイレ立て簞もり事情を示す。シトラスに続き、ジーンも顔を引き攣らせる。

「命に危険が無い限り、俺の体は人と同じ反応を示すぞ。…こういうことが起きるなら、そんな体にしとかなかったんだがな」

「じゃ、次は痺れ薬…」

「やめろ」

ジーンがランの小さい頭を鷲掴みにして黙らせる。

入り口の扉から直線の廊下を進み、その突き当り。ギルドの盾紋エスカッションがはめ込まれた扉へ来ると、ランがノックもせずに開け放つ。

ふわりと漂う磯の香り。部屋に籠っていた湿気が一気にランたちに押し寄せた。

「あ、ランさん！ こっちですよ！」

結露により曇った眼鏡を鼻までずらしたギルド職員のレーベツカが手を振っている。いつものギルド職員の若葉色の制服ではなく、『書庫』にいる祖母と同じような黒地のエプロンドレス姿。大きな皮製のトランクを引きずっていた。

「あれ？ 何で眼鏡がそんな格好してんの？」

「緊急召集に、私も呼ばれました。えへへー。まあ、本来はお祖母ちゃんが行くべきだそうなんですけど、今ちようど執筆に忙しいので書庫から出れないんですよ。で、お祖母ちゃんと精神感応^{リンク}できる私に召集がかかったという訳です」

執筆、というのが何を書いているのか不明だが、あの老婆が書庫で一心不乱に白紙の本を埋めていた『アレ』だろうか。大方、魔物が人に知識を与えるために作ったとされる『^{グリモア}原典』の写本だろう。目を塞ぎ、耳を塞ぎ、書く両手すら神聖な文字で守らなければ発狂するといわれる、呪いの本。よくまあそんな本を書く気になるものである。

「さっき会ってきたよ」

「知ってますってば。気をつけて行ってきたさい、って言ってましたよ」

そこはギルドの一室であるというのに、床は一面水が張られて、海草や珊瑚がオブジェのように周りの壁を飾っていた。

室内は本がやっと読める程度の明るさしかない。天井からは細いキラキラと輝く糸状の何かが何本も垂れ下がり、その先端についている涙形の水滴のような鉱石から僅かな明かりが零れている。糸状の物の途中にも、丸い鉱石が仄かに光を発していた。

充滿する磯の香りに、ランが顔を顰めた。

「生臭い…」

「仕方ないだろうが。^{スルーション}瞬移装置は海洋性の巨貝なんだから」

部屋の中央、そこにジーンが言ったとおりの巨大な二枚貝が口を開けていた。貝の下半分ほどまで海水に浸かり、柔らかな海草と海綿で周りを固定されている。僅かな光を受けて輝く様は、幻想的であった。

たとえば言うならば、絵画『ヴィーナスの誕生』に描かれるヴィーナスが乗るあの巨大な貝だと思えばいい。むしろ、それよりもはるかに大きい。人一人が簡単に丸呑みできるほどの大きさである。

虹色に輝くその貝は、^{スルーション}移双蛤。

例外なく双子の貝として生まれるこの貝は、その体内に飲み込まれると双子の片割れの貝の体内へ通ることができるといふ異空間跳躍を実現する希少なものである。その昔、貝の生態が解明されていない頃、この貝に飲み込まれた者は貝の口の中をどれだけ調べても見つからなかったことから『人食い貝』『神隠蛤』という異名を取った。更に、一瞬で人間を食べてしまうという間違った危険性から、討伐の対象となり、現在では絶滅すら危惧されるほどにまで個体数は減少している。

しかも、移双蛤は生きていないとその異空間跳躍が出来ないという難点も持つ。

海の近くでもないマリアンジュのギルドで育てるのは、並大抵の努力で出来るものではなかったしそれ相応の設備投資も必要だった。現在、この瞬移装置を使うとなると、銀貨3枚は使用料として必要になる。

いつもならばこの貝を使うことは金銭的な問題で無理なのだが、今回のランたちは緊急召集である。この場合は、無料で瞬移装置を使うことが出来るのだ。

「マリアンジュのギルドから王都へ向かうのは、私たちだけです。揃ったようなので、出発しましょう」

4人の傭兵は、輝く移双蛤の中へと足を踏み入れた。

直後、蛤がその殻を閉じる。僅かなタイムラグののち、彼らがたどり着くのは王都である。

顔合わせ

王都ラガンジュ。そのギルドの一室にある瞬移装置が、まるで体を震わせるかのようにカタカタと小刻みに揺れる。

次の瞬間、閉じられていた貝の殻が勢いよく開き、中から4人の傭兵を吐き出した。

ぺっ、という擬音が似合うほどの吐き出され方に、傍で見ていた老人がその光景に肩を震わせて笑っている。

「あ痛あ！」

吐き出された順番で一番下で潰されているシトラスが悲鳴を上げた。体の半分は海水に沈んでいる。

「あ！ ご、ごめんなさい！ 今退きます」

「レーベツカちゃんの良いとしても！ その2人い！！ 俺の上に座ったまま、はーやれやれみたいな顔して寛ぐのやめてー！」
海水しよっぱいだの、剣が錆付くだの、痛い痛いレーベツカちゃんトランクが頭に当たってブクブクゴブウだの一人で賑やかなシトラスである。

肩を震わせて笑っていた老人が、そんな彼らに声をかけた。

「緊急召集だというのに、お前さんらは緊張感ないのー」

「お久しぶりね、ウォルボラ老。何処に出張かも何のためなのかも全く聞かされていないんだから、緊張できるわけないでしょ」

ランはそう言って、シトラスの上から飛び降りた。

「お久しぶりです、ウォルボラ老。その節は大変、ランがご迷惑をおかけしました」

「爺さん、久しぶりー。相変わらず棺桶に片足突っ込んでるかー？」

「お久しぶりです、ギルドマスター。お祖母ちゃんに毎日のようにラブレター出すの、いい加減に止めてください。それからバラの花束もいい加減にしてください」

4者4様の挨拶に、ウォルボラは苦笑するに留めた。特に、最後にレーベツカが吐き出すかのように告げた一言が地味に老人の胸を抉ったらしい。

「…あー、まあ、道中ご苦労じゃった。挨拶はそれぐらいでよいじゃろ。早速じゃが、仕事の話をしようかの。お前さんらで緊急召集に呼んだ人間は最後じゃからな」

部屋を出て行くウォルボラは、肩を落として小さく見えた。

レーベツカの祖母に懸想してウン十年、とかいう噂はどうやら本当のようである。

通されたのは執務室、とプレートのかかった部屋だった。

重厚な扉を開けると中には既に3人、思い思いに寛いでいる。一人は壁に体を預けて本を読み、残りの二人は椅子に腰を下ろす。そのうちの一人の脇には湯気の立つコーヒーが飲みかけのまま置かれていた。

部屋は窓のない密室。マリアンジュのギルドにもある、会話を外へ洩らさないための部屋だった。ただしマリアンジュの執務室とは違い、小さな本棚が壁際に一つあるのと茶器を収納するための食器棚と簡単なコンロに似た魔導具が備え付けられているだけで、殺風景な部屋だった。

このギルドの所在地は数多の貴族連中の住む『王都』^{ラガンジュ}である。権謀術数の飛び交うこの地で、執務室に用があるのは泥臭い傭兵だけではない。貴族連中もここを訪れる事はある。

飲み物に毒を入れられる事はないか、だれかに盗み聞きされる事は本当にないか、そういう瑣末ともいえることを順々に潰していった結果、執務室は殺風景であり飲み物は自分で入れられる環境に落ち着いたというわけである。

まず部屋に入ったウォルボラは、巨大な長机に備え付けられた椅

子の前に立つ。

「では、皆が揃ったようじゃ。思い思いに寛いでもらって構わないが、とりあえず自己紹介ぐらいはしてもらおう」

ランたちも部屋に入る。

ジーンとシトラスは揃って壁際に立ち、レーベツカは食器棚の隣にトランクを置くとそのままトランクに腰を下ろした。ランだけが一人空いている椅子に腰を下ろす。

「じゃあ、まずは僕から自己紹介してよろしいです？」

そう言ったのは、壁際で本を読んでいた青年だった。年は恐らく18、9歳といったところだろうか。前をボタンで留める袖の膨らんだ丈の長い服を着て、幅の広い腰帯で結んでいる。腰帯には薬師を示す許可紋である銀色の装飾品が下がっていた。

「僕はパトリック・ディラン。薬師です。得意なのは火薬の調合」
薬師は薬を調合するだけではない。『薬』と名のつくものであるなら、一通りは学ぶ。毒薬然り、火薬も然り。

続いて、レーベツカが一步前へ出て丁寧なお辞儀をした。

「私はレーベツカ・ミルヴェツテと申します。マリアンジュギルドの職員をしています。今回は英知の魔女の情報端末として同行いたします」

英知の魔女、というのは彼女の祖母のことである。

コーヒーを飲んでいた男が手を上げた。

「俺はクス・ルウ。城砦建築技師だ」

次いで、座っている男も周りを見渡して僅かに会釈した。

「同じく城砦建築技師をしている、バズー・ルウ。ルウは家名じゃねえ、クスと俺は同じ師匠の下で修行をした、って事をあらわす程度のモンだ」

壁際でぼんやり突っ立っていたシトラスがジーンにせっつかれて会釈した。

「俺はシトラス・バートン。剣の傭兵の称号持ち」
ソードマスター

その言葉に、建築技師の2人と薬師の青年から感嘆の溜息が洩れ

た。

剣の傭兵というのは、多大な功績を残した傭兵に対して国王が直々に贈る名誉ある称号であるが、箔がつく程度のものである。…と、シトラスは言っている。本来はこれがあれば、一介の傭兵であるにもかかわらず国王に謁見できるといふ有難いものなのだが。シトラスにしてみれば、国王に謁見予定などないのであってもなくても気にならない。

「俺はジーン・ロレッツォ。基本は魔術師だが、剣も使える」

ジーンはそれだけ言っていると、腕を組んで目を閉じた。他に言う事はないのか。

そして最後に。

全員の視線が集中する中、ランはにこりと愛想笑いを振りまいた。「私はラン・ホージョーです。お仕事は具師をしています。人に血を流させることや殺すことは嫌いですが、死ななければ腕が折れようがトラウマ抱えて悪夢を見続けようが構わないというのを信条にしています」

どんな信条だ、それ。

全員の意見が一致した。何だかランに対する突っ込みにおいては、仲の良くなりそうなメンバーたちである。

傭兵であること（前書き）

初めて感想をいただきました！ わーぱちぱちぱちー。
すみません、ものごっそ文章が硬くて長いです。

傭兵であること

ランの不穏な科白によって、場の空気は一気にノリと突っ込みの世界へ転がり落ちた。

パトリックは壁に額をつけて震えている。勿論、大爆笑である。テーブルに着くクスとバズーも下を向いて口元を押さえていた。テーブルの上のコーヒーがカタカタと音を立てているところを見ると、こちらも震えるほど笑っているのだろう。

ちなみに、笑っていないのは壁際のジーンとシトラスである。呆れていたただけだが。

レーベッカとウォルボラは何とか平常心を保っていた。こういう少女だというのは以前から嫌というほど体感している。むしろ、これぐらいで驚いたり笑ったりしては身が持たない。

そんな中、ゴホンとウォルボラが咳払いをした。

慌てたようにパトリックが姿勢を正す。

「今の自己紹介で性格が垣間見えた者もおるが…、とりあえず名前と職業ぐらいは把握してくれたじやろう。さて、そろそろ君たちが呼ばれた理由を説明しようかの」

立ったままだったウォルボラが椅子に座る。

伸びに伸びた白髪の間から覗く目が、壁際の4人に向けられた。

「話は長くなる。座ってはどうかかな？」

「あ、僕はいいです。立っているのも苦になりませんから」

「私も大丈夫です。トランクのほうが落ち着くので」

レーベッカがジーンたちを見ると、二人も気にするなというように頷いた。次いで、気がついたように食器棚を指差した。一応ギルド職員として、おもてなしの技術もそれなりには磨いている。

「そだ、もしよろしければ。コーヒーでもお入れしますよ？」

手を上げたのはランである。こういうところで、この少女に遠慮はない。

「眼鏡ー、ミルクってある？ 私カフェオレが良いな、なければ紅茶。茶菓子も勿論つけてねー」

「はいはいですよ、ミルク一瓶まるごと残ってますからカフェオレにしますね。あ、ナニヤットのバームクーヘン！？ 毎日限定10個の超レアじゃないですかあ！ やだ、私もご相伴に与ろうつと」
あずか

王都の超有名スイーツに一人はしゃぐ眼鏡少女。

きゃいきゃいと黄色い声が静かな執務室に異様に響く中、ウォルボラが胃を押さえてテーブルに突っ伏した。そうとうこの眼鏡職員には手を焼いているようだ。

ジーンとシトラスにはその苦労が若干分かる。なにせ、自分たちの近くにも周りの空気をさっぱり読まない（読めない、ではない）少女が一人、存在している。

「とにかく、静かにしてくれんか。話が出来んのだが」

「わあ、すみませーん！」

ウォルボラはもう一度咳払いをして、顔を真剣なものにと変えた。「時間がある訳ではないが、まずはこの国の戦争事情というものを説明しようと思う。傭兵だからといって、何も考えずに戦って勝てばいいというものではない。世界各地にあるギルドの傭兵であるからこそ、様々な国へ傭兵として派遣される。どういう理由で自分たちが戦うのか、それをきちんと知ってもらいたい」

ウォルボラは言葉を切って、鋭い眼光をその場にいる傭兵たちに向けた。

「どの国が正しいとか、正しくないとか、そんなことを言いたいのではない。戦うならば、全力で向かうのみだ。正しいことも正しくないこともどんな仕事も請け負うのが傭兵だ。だが、自分たちがしていることが何のためなのか、雇い主が何を考えているのか、それを理解しろ。我々は『大きな力』だ、だが道具ではない！ 考えて行動しろ、我々は『人』なのだ。『道具』には決してなるな！」

シトラスとレーベツカが揃って右手の拳を左胸にトン、と押し当

てた。

何かの決意表明をするときやそれに同意するという旨を相手に示すときに使う、傭兵の所作だ。想いを胸に刻み込む、という意味。

シトラスは剣のみで生きてきた生粋の傭兵だし、レーベツカは傭兵をまとめるギルドの職員である。傭兵の仕種が自然と身についているのだ。

ちなみに、世界に支部を持つギルドに正式な所属国はない。だが、基本的に請け負う仕事は支部のある国である。その辺の守秘義務なんかもしっかりしているので、別の国から仕事請け負っちゃったんで国内で暴動起こします、なんて事は絶対ない。

シトラスのように国王謁見の権利を受けるということは、個人業である傭兵から国の騎士への勧誘、とも受け取れるわけだ。

「…ジジイの戯言だと、言わんでくれた事に感謝しようかの」

ウォルボラはそう言うのと、テーブルの下に手を伸ばした。何かのスイッチを押した音と共にテーブルが輝き、グラナダと周辺国を示す地図が現れた。

今から5年前、グラナダに一つの悲劇が起こる。

王都から西に5日程進むと、大陸を横断する巨大な山脈の麓にたどり着く。様々な種類の鉱脈が眠る、山脈の恩恵を受ける国にとつては自国の命綱にも等しい山脈は、山脈の領土を持たない国にとつては延髓の的である。

その山脈、名をカーマイン山脈という。

グラナダには名を同じくする砦が、僅かしか山脈の恩恵を受けない隣の国であるラヴス王国との国境を守っていた。

そしてある雨の日。そのカーマイン砦で事件が起こった。

グラナダ国第一王位継承者であるディラン王子の暗殺。

現国王の一人息子である王子はその日、カーマイン砦の視察に訪

れていた。鉱石の採掘の様子などを視察しに来ていた王子を厳戒態勢の中であるにも関わらず、ラヴスの間者によって暗殺されたのである。

王子の暗殺が砦の混乱を引き起こした直後、国境付近に潜んでいたラヴスの兵士たちが砦に殺到。

周囲を険しい崖と水を湛えた堀に囲まれ、砦に入るには切り通しの細い道や草木の生い茂る森の中を進まねばならない難攻不落の砦ではあったが、王子の殺害という状況に浮き足立った兵士たちは次々と打ち破れていった。

そして、明朝。

王都ヘディラン王子の殺害の報とカーマイン砦の陥落の報が同時に王の耳に入ったのである。

それにより、グラナダ国は鉱物資源の豊富であった山脈の東側の大部分をラヴスに奪われ、王は大切な一人息子を失ったのだった。

武力も国力も余りあるほどと言われるラヴスにすぐさま抗議文を送りつけるも、一切の反応はなく。やれるものならやってみろ、と暗に仄めかされる始末。現に平和ボケしていると言われても反論できなかったグラナダであるから、このまま戦争に突入すればすぐさま王都まで侵略されたことだろう。

王もカーマイン砦を捨てるほかは選択肢はなかった。

だが、市場での鉱石物価の上昇により、導具や錬具の技術にかけては世界一であったグラナダにも停滞が訪れる。具師やその技術の流出に歯止めはかからず、市場に出る導具や錬具は常に品薄となった。

また、近々隠居を騒がれていた国王も、今だ幼いディラン王子の忘れ形見である孫に王位を継承させることは難色を示し、老体に鞭を打って政務に励んでいる。

そして5年の歳月がたつ。

導具や錬具の精度が日に日に悪くなる中、国王が5年の想いを胸に腰を上げた。

カーマイン砦の奪還。

このために、国の兵士の練度を向上させ、傭兵たちに繋ぎを付けた。ランなどの有望な具師たちとも関係を結び、戦力増強に努めたのである。

開戦から2ヶ月。砦の攻防は膠着を保っていた。

ウォルボラは、そんな背景を説明すると傭兵たち一人一人を見つめる。

「やつてもらふ事は、唯一つ。カーマイン砦を落とすこと、じゃ」
難攻不落の砦を落とす、難易度MAXの仕事が始まった。

進め！ 砦攻略隊！

カーマイン砦は、山脈の頂上付近を削りだして建てられた国境を守るはずだった砦である。

山脈を通る街道を塞ぐように建てられており、グラナダに入国する人々は街道を通るとそのまま砦の大門をくぐる事になる。そこで簡単な入国審査を受けるわけだ。つまりは、普通の城郭都市にある門が規模と頑丈さを大きくしたまま街道にドカンと乗っているようなものである。

もともとラヴスとのいざこざ回避のために、国境間際ではなくグラナダ領土寄りに砦を造ったのが拙かった。侵略され、あれよあれよの間に山脈の大部分はラヴスの領土に持っていかれたわけである。カーマイン砦以东数百メートルが現在ラヴス領だ。

砦の周囲には豊富な湧き水を利用して堀が巡り、そう広くない街道の両側は急な斜面が木々に覆われている。大人数の兵士が隊列を組んでやってきたところで、堀の水を開放して街道を通ってやってくる兵士たちを水で押し流すことも可能であるし、斜面に伏兵を潜ませて横から強襲することも可能なのである。

街道を迂回して鬱蒼と木々が生い茂る山の中を迂回して砦の横に回れば、堀だけを攻略するだけなのだが、山の中は足場が悪いうえに凶悪な魔物が住んでいる。

というわけで、兵士たちは馬鹿正直に街道を進むわけにも行かず、ちまちまと断続的に攻撃を仕掛けるにとどまっている。まあ、相手の精神にはダメージを与えているようだが。

それから、送り込む斥候を魔物に食べられましたじゃ洒落にならないので、斥候は昔砦で兵士をやっていた地理感のある者に任せている。

雇った傭兵たちも暇を持て余して暗殺を計画してみたりしたというが、成功には至らなかった。

はつきり言って、開戦2ヶ月目にして早くも手詰まりだった。

国王ももう少し考えてから開戦を宣言して欲しい。既に砦攻略に駆り出された軍師は3人が胃痛で降板し、現在4人目を数える。

ラヴスもそんな現状に呆れているのか、援軍もたまにしか来ないし砦の兵士たちもやる気があまり見られなかった。

チャンス、といえばチャンスなのである。

「はいっ！ 砦はもうクスさんとバズーさんが急ピッチで一から築き上げるって事にして、上から大規模魔術を連発してブチ壊したほうが早いと思う！」

森の中を進むランは、そう言って片手を挙げた。
後ろからジーンが持った麻袋でどつく。

「それが出来ないから、俺たちに砦の攻略なんていう依頼が届いたんだろうが。あれは取り戻さなきゃいけないもんだ。奪還したら、これからラヴスの侵略の防衛線になるんだからな」

ここはカーマイン山脈の麓。

王都のギルドで依頼内容を聞いた傭兵たちは、すぐさま行動を開始した。

山脈の近くの都市へ瞬移装置スルーシエルを使って移動すると、そこからヴァーに乗り換えて麓の村まで全速力。そこからは徒歩で森の中を進む。依頼を受けてから僅か半日足らずでここまでやって来ていた。

夕暮れまでには野営地へたどり着くはずである。

野営地といっても兵士たちがいるのは麓の村である。これから行くのは傭兵や斥候がひっそりと身を寄せ合う秘密基地のようなところだ。少なくともおいしい食事が出るような場所ではなく、冷たくて硬くて美味しくない固形栄養食をかじりながら砦の動向を探る場所である。

国の兵士たちにはランたちの来ることを知らせていない。

一応総指揮を取る将軍には既に知らせてあるのだが、一般兵に砦攻略のスペシャリストたちが来ていることが知れたら、どこからラヴスへ話が洩れるか分からない。

スペシャリスト、と言うけれど中には攻略するというよりも全壊させる方が得意な具師がいるが。

「魔術でぶっ潰せれば、確かにいいんですけどね。カーマイン砦はその石材にオリハルコンを混ぜた混合石が使われているそうですよ。じゃなければ、僕みたいな爆破狂が呼び出されたりしませんって」

「魔術による爆破は無理って訳ね」

「ねえ！ 今明らかにとんでもない言葉が聞こえたんだけど！ パトリックって何者！？」

柔和な顔のパトリックが、にやりと人の悪い笑みを浮かべる。

シトラスの突っ込みを、ランは華麗にスルー。

「やっぱ堀に重油流して、火責めにするとか。あとは、街道のラヴス側爆破して孤立させて餓死させるって手もあるけど。スマートさに欠けるかなあ？」

「ラン、街道は商人の生命線だからな？」

「期限はないですけど、出来るだけ速くが原則ですからね。向こうの援軍が来るの、5日後でしたっけ？ その前に何とか進展させときたいところです。折角ですから、クスさんとバズーさんに新しい砦をラヴス領内に造っちゃいませんか？ こっちのカーマイン砦を孤立させるってのは、いい手だと思いますし。後でじっくりと攻略できそうですよね」

「砦を造って、麓の村にいる兵士たちを常駐させとけば少なくとも侵攻は防げる、かな？ 挟み撃ちにされる愚は冒したくないから、カーマイン砦から出てきたところを別働隊で一斉に叩いておけば少なくともこっちの軍と向こうの援軍の戦いになるか…」

こっちには反則的な強さの傭兵がいることだし、とチラリとシトラスとジーンを見る。

その後ろから、クスが疲れたような顔で突っ込んだ。

「そもそも、何で俺ら2人が砦を造ることで話が進んでんだよ」と、不意にシトラスが剣を抜いた。

そのまま近くの茂みに斬りつける。銀色の太刀筋が草むらを真っ二つにする。細かい枝や葉っぱまで綺麗に切り裂いた。

がさり、と揺れて岩兎が逃げ出していく。
ロックラビット

その魔物を見つめるシトラスの後ろで、レーベツカは大きく息を吐き出した。額に浮かんだ汗を拭う。

「お、驚かさないでくださいよう」

「うん、あー、ジーン？」

微妙な顔で首を傾げる、シトラス。目線を後ろにいるジーンに向けたが、既にそこにはジーンの姿はなかった。

凶悪な魔物が潜むといわれるカーマイン山脈の森の中で、一度も魔物に襲われなかったのには訳がある。

岩兎のような臆病な魔物が、ジーンの気配に気がつかないわけではない。凶悪といわれる魔物たちですらジーンに近寄れないはずなのに、岩兎があんなに近くにいれるはずはない。

パトリックやレーベツカが、ジーンのいない事で慌てたように周囲を見回す。

「ランさん！ ジーンさんがいませんよう！」

「いいよ、ほつといても」

無感情にそういうランに、レーベツカが非難の声を上げようと口を開いた直後。

「うによあああああっ！」

野太い、変な叫び声が森の奥から響いてきた。

進め！ 岩攻略隊！（後書き）

次回、ランの家の住人、最後の一人が登場予定です。

赤い変人（前書き）

ぼんやりしていたら、一週間があつというまに経ちそうです。
小説書かな。

赤い変人

森の奥から聞こえてきた可笑しな悲鳴にランとシトラスを除いた4人の傭兵たちが顔を見合わせることに暫し、いつの間にか消えていたジーンが『何か』を連れて戻ってきた。

「ちょ、痛い痛い痛いって言うてるでしょ！」

いやんやめてマジ禿げると叫ぶ、ソレ。

身長はジーンよりもさらに高く、2メートルはあるだろうか。

燃えるような赤い髪をポニーテールにし、その先をジーンが容赦の欠片もなく握りしめている。そのうち束で抜けるのではないだろうか。ポニーテールを結わえるのは輝く宝石の装飾と鮮やかな鳥の羽。

服装も、森の中で見るには悪目立ちする真っ赤のロングコート。

黒いハイネックのアンダーと、黒のレザーズボン。何度も言うが森の中だというのに、足元は赤い編み上げのハイヒールである。

アクセサリー類も超豪華で、ネックレスやら指輪やらブレスレットやらじゃらじゃらと取っ付いていた。

と、頭を引っ張られていたその赤い人が、ランに目を留める。

カッと真紅の目を見開いて、

「いやああん！　ランちゃんじゃないのお！　ひっさしぶりね、元気してた？」

野太い声に殴りかかれたように、ランが若干よろめいた。

「んもうっ！　上層部^{うえ}の馬鹿共はランちゃんをいきなり呼び出すんだもん、アタシ超ビックリしちゃったわヨ！　遊撃戦してたんだけど、ちよつと將軍に無理言っ^{こつち}て昨日から斥候^{こつち}に配属かえてもらっちゃったの」

「…その格好でよく斥候なんかさせてもらえたよね」

「あらあらあらー？　さっきまでアタシがランちゃんたちの会話を盗み聞きしてたのも気づかなかったでシヨ？　このアタシにかか

ればその程度の事はお茶の子さいさいなのヨ」

まあさつき唐突にシトラスにばれたし逃げたはずがジーンにとっ捕まったけど、と赤い人は茶目っ気たっぷりにウィンクした。

「あ、あの。ランさん、この人は一体？」

ランと赤い人の2人だけで会話が成立しているその間を見計らったように、ランの後方からパトリックの声がした。ランが振り返れば、いつの間にか傭兵たちは2人を遠巻きにしている。

思わず苦笑する。分からなくもない。

怪しいのは確かだ。

「あ、ごめんなさいね。ランちゃんに会えたから、アタシったら興奮しちゃったわ」

赤い人がパトリックにウィンクする。パトリックが後退さった。

「アタシの名前はローズよ。そおね、『レイニィ・レッド鮮血の雨』っていう通り名の方が聞き覚えがあるかしら？ ランちゃんの知り合いって言うより、一緒に同棲してるの。って言っても、最近はずーっと仕事で出ずっぱり、家に帰れてないのよねえ」

「本名、デイビッド・オールドローズ」

「お黙りシトラス。ケツに木の枝突っ込むわよ」

「うるせえ！ つっつか、そもそも同棲って何だ、同棲って！

俺らも住んでんだから気持ち悪いこと言うな！」

「アンタと同棲してる気はないわよ！ ランちゃんと同棲してるの！」

「だ・か・ら！ 俺らも一緒に住んでんだろーが！」

赤い人ローズとシトラスとの暴言の応酬にランが楽しそうに笑う。だが、ローズの自己紹介を聞いた連中は笑うどころの騒ぎではなかった。

もはや声も出ない。

ようやく、といった風で皆を代表してレーベツカが言葉を搾り出した。

「せ、戦場を瞬く間に血の海に変えたとか言う…。たった一人で

戦局を覆し、敵対した国々を全て滅ぼしてきた赤い悪魔：常に赤を身に纏い、滴るほどに血を浴びるその姿から、こう呼ばれる。『鮮^{レイ}血の雨』と…」

「嘘でしょう…」

レーベッカとパトリックの言葉に、笑い転げていたはずのランが突如沈痛な面持ちで頷いた。

「…ごめんね、こんなオカマで」

驚愕したのはそこではない。

シトラスとローズの耳が穢れそうな暴言合戦は、横合いから伸びてきたジーンの拳によって唐突に終了した。シトラスは頭から地面に激突するが、ローズは演技でもしているかのように科をつくって草むらに転がった。

力量の差、なのであろうか。

「とりあえず、お前は仕事しろ」

ジーンの拳に転がったローズは、残念そうに眉を寄せる。

「はいはい、仕方ないわね。アタシは夜中までカーマイン砦の見張りしてるから、もし様子見に来るなら色々案内するわよ」

服についた葉っぱや泥を軽く払い、ローズはそう一言だけ告げると草むらへ飛び込んだ。

一瞬であのドギツイ赤いコートが森の中に溶け込んでしまう。気配の消し方や忍び方は流石通り名を持つほどの傭兵といえるだろう。

「思わぬところで変なのと出遭ったが、ちゃんと日暮れまでには野営地に到着するな」

「そだね。うーん、せっかくだからローズのお誘いに乗ろっかな？」

歩みを進めると、未だにローズの登場から驚愕したままの傭兵たちがぼんやりとした顔のままついて来る。

めったに会うことなどない大物傭兵の突然の邂逅。それが通り名持ちの大量殺害の戦争屋で、更に変わったオカマだったということも精神的に疲れる原因だったかもしれない。

まあ、歩いてくれるだけ有難い。とジーンは視線を下へ向けた。片足だけランに持たれ、引き摺られる哀れなシトラスの姿が目に入る。このまま目覚めることなく野営地に入ろうものなら、彼の後頭部がぼこぼこになるだろう。というか、このまま永遠に目覚めないかもしれない。

不老不死の桃も食ったし、大丈夫だろ。

のちのちたんこぶと打ち身と擦り傷にのた打ち回るであろうシトラスに、ジーンは適当に冥福を祈っておく事にした。

不便な職場

森の中にぽっかりと開いた小さな空間。

周囲を擬装用の小枝や葉でカモフラージュしたその場所が、斥候たちの野営地である。

「カーマイン砦から徒歩30分、水は1時間歩いて川まで取りに行かないといけない最優物件。わぁ、超べんりー」

ランが不機嫌そうな口調でのたまった。

人避けの導具を素通りして野営地に乗り込めば、そこにいた数人の傭兵や斥候らしい人々に剣を向けられる。一応ここに来るという事は既に通達済みではあるが、入ってきたらまず侵入者と思えというその警戒ぶりは当然のことなのかもしれない。

ここはもう、敵地真っ只中である。

今にも飛び掛ってきそうな彼らの前に、ランの後ろからついて来ていたレーベッカが慌てたようにトランクを漁る。

「あ、あ！ ええっと！ わ、私たちは緊急召集を受けた傭兵で……！ ああつ、け、契約書どこにいつちゃったんでしょう？」

「んの馬鹿眼鏡。そういうものはすぐに取り出せるようにしときなさいよ」

切り刻まれたらあんたのせいだからね、とランがいつの間にか懐から取り出した紫色の玉を手のひらの上で転がしながら言う。

「ちよ、ちよっと待っててくださいよう。……あ、あの！ 責任者の、マリアンジュギルドのライバックさんは、いらっしゃいますか？」

うえええん、契約書お……」

未だに契約書が見つからないレーベッカに、剣を向ける彼らの中から一人、呆れたような顔の男が進み出た。

身長はランより少し大きいぐらい。顔立ちに甘さや幼さのないところから成人しているのだろうが、驚くほど小さい男だった。茶髪であまり特徴のない顔、やや細い目。

「レーベツカ・ミルヴェツテ、か。他にジーン・ロレッツツォにパトリック・ディラン、奥の二人は技師だな？　そこに転がっているのは…シトラス・バートン？　それに、ラン・ホージョー。ふむ、伝令通りだな。皆、剣を下ろして構わない。仲間だ」

男が手を上げて合図すると、周りの彼らが一斉に剣を下ろした。ほっとしたような空気が漂う。

にやりと小さな男は笑みを浮かべ、

「ようこそ、クソ不便な戦場へ」

今にも回れ右して帰りたくなるような歓迎をしてくれた。

「俺はライバツク。諜報を生業にする傭兵だ。つと、ミルヴェツテ？　契約書はまだか？　それから…」

ライバツク、と名乗った男はランを見つめる。その顔は苦笑していた。

「悪いんだが、その手に持つものを仕舞ってはくれないかな？」

「ああ、これ？　大丈夫よ、害はないから。ただ少し、眠くなるだけ」

指摘された紫色の玉を、ランは手のひらの上でころころと転がした。ランの横ではジーンが引き攣った顔で3歩後ろへ下がっている。ランのものさしで『少し眠くなる』がどれぐらいなのか、押して知るべし。

まあ、ジーンの状態を見れば分かるが。

「武器を向けた事に関して謝る気はないが。いつまでも物騒なものを出しておかれると、こちらもそれ相応の対処をしなければならなくなる。野営地だからといって、見ず知らずの人間が共同生活するのだ、規則は必要だろう」

「…マリアンジュギルドの人間は私たちのことを知っているはずだというのに眼鏡に呼ばれるまで後ろで様子見されていた事に対する単なる意趣返しだと思ってももらえれば結構」

「それは手厳しい」

ライバツクは肩を竦める。

2人の間に流れるぴりぴりとした緊張感に、パトリックの喉がごくりと鳴った。

「夢魔の体液と紫水晶を粉にして固めた魔具よ。ま、精々眠って10日」

「…悪いんだが、本当に、今すぐ、仕舞ってくれないか？」

「あ！ ありました、契約書！」

ライバックの溜息交じりの言葉に、明るいレーベッカの言葉が被る。

空気読め！ と、技師たちとパトリックは声にならない叫びを上げた。

このままランとレーベッカのペースに巻き込まれたら、いつかノイローゼになる予感がする。

「私がここの責任者になったのはつい最近でね。この間の誘拐事件のときにギルドマスターの使いで王都へ行ったんだが、居るじゃん良い人材とかなんとか言われてあれよあれよとしてるまに気がついたら戦場へ飛ばされてたんだ」

「相変わらず人使いの荒いジジイね」

テントもないような場所である。

適当な木陰にゴザを敷き、皆で腰を下ろした。もてなしの菓子もなければ、水すら出ない。目の前に広げられているのはカーマイン砦の大まかな概観図だけである。

「攻略方法は未だにこれといった案が出ていないのが現状だ。こちらとしては技師の専門的な話を聞いてから攻略法を考えていくつもりだったからな」

クスが概観図を覗き込んだ。

「この砦は前後の防衛力はそこそこ高い。唯一攻略できそうな場所といえば側面からの砦崩ししかないだろうな。横は魔物の森と崖

に守られているし、造った当時も恐らく魔物の襲撃があっただろうから、時間をかけて造ることも出来なかったに違いない」

「岩崩し、ですか？」

パトリックが首を傾げる。

「お前の好きな爆破だ、ドカンってな。岩の被害を最小限にしながら横に穴を開けて、精鋭兵士や傭兵たちを小分けにして放り込む。あとは散々岩内を引っ掻き回して、頃合を見計らって正面から大群で突撃するってやつよ」

「それは、私たちも考えた。だが……」

ライバックの言葉に、全員の目が彼に集中した。

「岩にはなにか導具が使われているらしくてな、傷がついてもすぐに元に戻ってしまうのだよ」

「ああ、それで私が呼ばれたのね。……はつきり言って、どんな導具が使われています、効果はこれこれこうです、なんてことを期待しても無理だからね。力ある言葉は秘匿されるから、その本人か同じ文字を書く一派でないと分からないわよ？」

驚いたような失望したような、微妙な表情でライバックがランを見る。

「一応、打ち消すと上書きっていう二つの方法があるけど」

ランはそう言って、失望する顔をしたライバックに小さな宝玉を放り投げた。

そこには魔導文字が刻まれていた。文字はおそらく8文字。文字は4文字ずつ2列に並んでいる。4文字は赤いルビーを溶かして流し込んであり、もう4文字には黄水晶を溶かして流し込んであった。「それは本来剣とかに嵌め込む導具なんだけど、攻撃と防御の上昇が付加されてるの。銀板1枚ぐらいの価値はあるよ」

手のひらに乗る小さな玉が、銀板1枚に相当するという事実に思わず取り落ししそうになる。

「打ち消すには相反する言葉で書く。例えば玉に防御上昇と攻撃上昇の魔導文字を刻んだら、どっちかが上書きされて効果がなくな

っちゃうなんて事はないでしょ？ 両方の効果が出るっていうのは、その文字が互いを打ち消す言葉じゃないからなのよ。つまり、打ち消したいならば反対の意味を持つ言葉で書かなくちゃ」

「…では、」

「知らないっていう場合は使えないんだよね、これが。で、あとは上書きっていう方法。これは文字数で優劣があるっていう魔導文字の法則が関係してる。書かれている文字数より多くの文字を刻めれば、魔導文字は上書きされて、効果は後に書かれたものになるの」その言葉に、レーベッカが首をかしげた。

「じゃあ、この、ライバックさんの持っているのは同じ文字数ですけど、片方文字が多い場合で上書きしたくないときとかはどうするんですう？」

「それ？ 上書きするには、その文字の近いところか真上に書けばいいんだけど。近ければ近いほどベスト。で、上書きしたくないときは文字を出来るだけ離して書けばいいの。その玉の場合にはそんな面積ないから、文字と文字の真ん中の部分に特別なインクを流し込んだ溝を作るわけよ。混ざりません、上書きされませんっていうやつ。言っておくけど、そんな技術があるのは私ぐらいだから！」私ってば超天才！ とランが一人悦に入る。

「つまり？ 上書きの場合は、魔導文字の文字数と書かれている場所が分からなければ意味がない、と」

バズーが呟くと、悦に入っていたランは夢から覚めたような顔で瞬きした。こくり、と年相応の可愛らしさで頷く。

どっちにしろ駄目じゃないか、とライバックが小さく呟いた。

その言葉を拾ったジーンが一人で勝手に慌て、ライバックの口を塞ぎにかかる。ランに聞こえればライバックがサンドバックに改名する羽目になるかもしれない。

男二人がじゃれあう姿にランは冷ややかな視線を向けると、おもむろに立ち上がった。

「というわけで、カーマイン砦に行ってくるわ」

ちょっと遊びに行ってきます、とジーンの耳に聞こえた気がした。

不便な職場（後書き）

シトラスの扱いが我ながらヒドイ。

黄昏時の砦

向こうから歩いてくる人の顔が見えなくなる、それを『誰だれそ彼かれ』
という。

薄暗くなった森の中、人の顔の判別が難しくなった黄昏時^{たそがれ}。ラン
はカーマイン砦の両脇の藪の中から砦を伺っていた。

大門の前には煌々と篝火が焚かれ、5人ほどの兵士が見張りにつ
いている。

しばらく前には、ランの見ている前で数人の商人が引き連れたキ
ャラバンが足早に門の中へと入っていく。この山脈で野宿するなど
は本来自殺行為である。慌てて山越えしようとしたのだろうが、こ
の場合はカーマイン砦で通行料に色をつけて頼めば一晩だけならば
納屋ぐらい貸してもらえるだろう。

大門の上部は人が3人ほど並んで歩けるほどの広さがあり、とこ
ろどころ大人の頭ほどの高さまでの塀が取り付けられている。弓矢
を通す狭間らしき隙間も、要所に設置される篝火に照らされていた。
ランのいる場所からは見えないが、カーマイン砦は場所柄他の場
所にある砦よりも小さめに造られており、2つの郭によって構成さ
れる。

一番外側の水を湛えた堀を備える大門と納屋などの食料、兵装を
揃えた2の郭。

そして、この砦の最高責任者であるラヴスのゼノン將軍や兵士た
ちが居を構える本郭。

本来こういった郭は虎口と呼ばれる出入口からしか入れず、そ
の虎口にいたる道も特に厳重に守られるのだが、このカーマイン砦
にはど真ん中を街道が通る特殊な形をしていた。

「ちよつと、レッサーパンダ。横をぶち抜いて砦に侵入するより
も、どうにかして大門ぶち抜いたほうが早くない？」

「そういう考えがあるから、大門の警備は厳重なんだよ。一度敵

が抜けたら最後、って言う場所だからな。それに、大門の扉は厚さ：4、50センチメートルか？ 鋼鉄製、対魔術も完璧っていう代物。それならオリハルコン製でよく分からない導具に守られた壁をぶち抜いたほうが楽なんだっつの」

ランの言葉に返事を返したのは、バズーである。

タレ目で有名レッサーパンダ、と酷評するランにバズーはその意味が分からず首を傾げていた。

この場にいるのはランと、レッサーパンダことバズー、そして案内すると言っていた赤いオカマのローズの3人である。

ランが来たいと言ったので来るのは当然として、バズーは城砦建築技師として一度本物の下見をしたいという理由から同行を願い出した。ランの金魚の糞と言われても平気へっちゃらのジーンではあるが、あまり人数を増やして敵に見つかる事になれば目も当てられない、というライバックの制止により仕方なく野営地に待機である。

ライバックをサンドバックにするのはランではなくてジーンになるかもしれない、と予測できる程の殺気を振りまきながらジーンは地面に白目を剥いて転がるシトラスのたんこぶの治療に専念しているはずである。

そのうち、暇だから来ちゃった、なんて彼氏に甘える彼女みたいな台詞を吐きながらランの前に姿を見せるかもしれない。

「でもお、それこそ厄介よね。正体不明の導具なんて」

ランの後ろからどぎつい赤い悪魔がひょっこりと顔を覗かせる。

「再生能力でも付加してあるのかしらネ？ その強度もいまいち分かんないのも痛いわぁ。一度ぶち抜いてから、その間に土管でも突っ込んでおけば穴塞がらないで通れないかしら？」

「…失敗すれば土管ごと壁の部品になりかねねえな。しかも運悪くすると、通ってる最中にぺしゃんこっっていうホラーが」

うんわぁ、とローズが顔を顰めた。

「人肉の壁…どっかの怪奇小説の悪魔の城みたい」

「大門前の壁には潰されて恐怖に顔を歪めた人間がオブジェとし

て浮き上がってきた：とかな。想像して気持ち悪くなってきた：」

思ったよりもローズとバズーの仲は悪くはないようである。怪奇小説をネタに、ひそやかな声のまま何だか盛り上がっていた。そういう話をするのは構わないのだが、時間と場所と仕事などということを頭に刻み込んでほしいというのがランの本音である。

少なくとも、この薄暗い森の中で目の前の砦を題材にしたホラーを組み立てていくのは勘弁してくれるとありがたい。今から攻略するのはその砦なのである。

ランは、じっと砦の壁を見つめていたが、おもむろに立ち上がった。

「ローズ、砦の壁を調べたいんだけど。触れる場所まで寄れる？」

「…了解よ、ランちゃんの頼みならどんなことでも叶えてあげましょ」

ローズはウィンクすると、ランとバズーの2人を手招きした。

砦の壁の隙間から、水が流れている。

その壁の前で、ランたちからも水が滴り落ちていた。

ランの顔は明らかに不機嫌を表している。ようは、壁に近づくには水を湛えた堀を渡らなければならなかった訳である。

「なによ、ちゃん壁まで見つからずに来れたでしょ？ 普通ならこんなとこまで来れないわよ」

「そーね。まさかここまで水浸しになるとは思ってもなかったけどね」

自作した迷彩柄のつなががびっしりである。が、ローズとバズーは腰までしか濡れていない。

「そりゃランさんがちみっこいからだな」

「子供用も作っておけー！」

「普通はこんな場所に子供が来るわけねーだろーが！」

堀の水の中を、丸太を一本巧妙に隠して通してある。ランたちはその丸太の上を歩いて堀を横断してきたのだが、丸太の通した高さでは大人の腰あたり。ランの身長では頭まで水を被るので、ひとりだけ全身濡れているのだ。

「さて、具師のお嬢さん。ここまで危ない橋を文字通り渡って来たが、何か分かることでもあんのかい？」

からかいまがい言葉に、ランは無言で一枚の葉を翳す。それは水が流れる壁に触れず、水しぶきがかぶる絶妙な位置で止めた。

葉には横に3分の1ほど切れ目が入っている。その葉は壁から飛んできた水に触れると、一瞬で切れた場所がまるで時間が巻き戻されるように修復された。

目を剥くローズとバズー。

「この水は、あの概観図から言っても砦の中も通ってるのよね？」

「あ、ああ」

ランはどこも傷のない一枚の葉っぱを二人の前で振る。

「導具は壁に作用するものじゃない。この砦を巡る水全てに、導具の効力が作用してるよ」

難易度はどこまで上がれば気が済むのだろうか。

スライム（前書き）

小説の存在すら忘れるところでした！
しばらく更新が滞りがちになるかも。

スライム

恐らく、とランは修復された葉を振りながらバズーとローズを見回した。

「水路式魔法陣とでも言ったところかな？　ま、魔法陣っていうか魔導陣か。魔導文字により魔力を何らかの再生力へと変換し、それを水の流れに乗せて砦の隅々にまで行き渡らせる。となると…堀の形とか、砦内の水路もいろいろと調べときたいなあ」
ぶつぶつと、顎に手を当ててランは呟く。

その言葉に、ローズは首を傾げてバズーは胸ポケットの中を漁りだす。

「ランちゃん？　堀の形って、何か関係あるの？」

「んー？　いや、ちょっとね。効率よく魔力を流し込む方法として、螺旋水路っていうか回路？　があるんだけど。宝玉か何かで導具の魔力補充をしてるならお手上げだけど、もし外から何らかの回路を作って魔力を流し込んでいるなら、堰き止めれば魔力の供給が止まるんじゃないかな、って」

「その場合が、堀？」

「普通に考えて外から魔力供給する場合、一番最初に魔力が流れてくるのは堀、でしょ」

ランは一枚の紙切れを懷から取り出した。

油紙に包まれていたそれは、びしょ濡れのランの懷にあったにも関わらず濡れていない。この辺の用意周到さは流石の一言に尽きる。紙は縦10センチメートル、横5センチメートル。真っ白い紙の中央には『^{カラス}烏』の魔導文字が書かれている。

ランは自分の人差し指の先を噛み切った。

「ランちゃん！　何痛いことしてるの！？」　　そういうのは、バズーあたりから搾り取ればいいの！」

「…何故、俺？」

ポケットから薄いピンク色の液体が入った瓶を取り出したバズーは、ローズの言葉にすかさず突っ込んだ。

ローズが腰の剣に手を伸ばしている姿は恐ろしいものがある。

搾り取る、というよりも体中の血が垂れ流しになりそうな勢いだ。「別にバズーでもローズでも良いんだけど。百聞は一見にしかず、だから」

ランは『烏』と書かれた紙の上に、更に魔導文字で『目』と記入。そのまま両手に挟み込み、ふっと息を吹きかけるように魔力を流し込んだ。

両手に包まれた紙が、急に体積を増すように膨れ上がる。

柔らかい黒い羽、顔の中心に大きな琥珀色の目が一つ、ランの両手に収まるほどの小さな鳥。召喚魔術ではなく、魔導文字によって創りだされた魔鳥だった。

バズーがひゅう、と口笛を吹く。

「具師ってのは何でもありませんだな」

「私はね、っていう注釈が付くけど。魔導文字を知らなきゃ、具師なんてただの人よ」

軽い羽ばたきの音を立て、魔鳥が空へ飛び立つ。薄闇の中に溶けるかのように、黒い鳥は砦の上空へと上がっていった。

と、ランの体がぐらりと傾ぐ。

慌ててローズがその体を受け止めた。

「ちょ、ちよっと！ 急にどうしたの！？ 魔力切れ？」

「具師がこんなになつたら偵察の意味がねえな、一度戻るか」

2人の言葉に、ランは手を振って眉を寄せた。

「あー、違う違う。ちよっと平衡感覚が狂っただけだから」

「は？」

ランは空を指差し、

「私の片目、今あの烏と同調してんの。私の血で魔導文字を書いたでしょ、詳しい効果は省くけど、あれで烏の見える風景が私にも見えるようになったの。だからさっき、百聞は一見にしかずって

言ったのよ」

自分の血を媒介にし、ランは鳥の視線と同調していた。片目だけだとはいえ、別の風景がいきなり飛び込んで来ているのだから平衡感覚が狂うのも当然である。

「うえ、酔いそう」

気持ち悪うとランが口元を押さえた。平衡感覚が狂う、というかむしろリバースするかもしれない。

「ま、大丈夫そうだな。それよりも、」

壁際で座り込む3人。バズーは先ほどポケットから取り出した小瓶を振って見せた。

「あら？ その可愛らしい色合いの水は何が入ってるの？ …媚薬？ いやあん、バズーちゃんのエッチイ！」

「んな訳あるか！ この面子で誰に使うんだよ！ これはスライム！」

ポン、という小気味いい音を立てて瓶の蓋を外すと、中からピンクの液体が溢れるように洩れ出る。

瓶から液体全てが出ると、バズーの手のひらの上で弾力あるボール状へと変化した。目もなければ口もない、ただのピンクの塊である。

「スライムっても魔物の方じゃない。城砦建築のときに、近くの水脈にこいつを流して水の流れるルートや湧き出す場所なんかを測るときに使うんだ。城砦建築に水はなくてはならないし、水脈の真上に建てて地盤沈下で壊れましたなんていうことにならないためにも、このスライムは必要なんだ」

「つまり、水流を登る性質を持つ水精思念体」
ウォータービーブル

青白い顔でランがそう言うと、バズーは少し驚いたような顔をした。

「へえ、知ってんのか？」

言った途端、ランから石が飛ぶ。

理不尽な攻撃に、バズーは声もなく転がった。

「っ！！ おまつ！」

「ど・う・し・てっ！ それがあることを黙ってたの！ それがあれば、この仕事解決できるって分かってる！？」

「はぁ？ どーいうこと！？」

バズーの顔に、マジ分かりませんと書いてある。

「この砦に使われている導具は、水の流れに魔力を流すことで砦全体を補完してるの。つまり！ 水の流れの一番最初、始点に導具がある！ しかも、水精思念体は水を登れるし、小さな穴も通れる！」

ランは鳥でその更に上流の水の流れ込む場所を特定し、魔力を絶つことで砦の再生力を何とかしようとしていた。

「ん、でも。このスライムはその場所しか特定できねえぞ？ 導具破壊とかまず無理だし、これにその打ち消すんだか上書きするんだか言う導具を持たせることも無理な」

てろんてろん、とバズーがスライムの端を掴んで振るとスライムは面白いぐらいに伸びた。

思念体だからといって、スライムに手も足もない。しかも、水に入れるとまるで溶けたかのようになって上流を目指す。物を持たせることも無理なのだ。

だが。

ランは青白い顔のまま、唇を歪めて笑う。

「要は、水精思念体にくつつくようなものならば運べるのよね」
笑顔というにはいささか引っかかる顔で笑う具師に、ローズとバズーは顔を見合わせた。

スライム（後書き）

薄闇の空を何かが飛んでいる、蝙蝠だろうか。何処からか子供の声
がする。：戦争中であるから、疲れているのかもしれない。『カ
ーマイン砦業務日誌』より抜粋。

腹が減っては何も出来ぬ（前書き）

お久しぶりです。

しばらく更新のペースが落ちます。

腹が減っては何も出来ぬ

若干複雑そうな顔をするランではあるが、バズーと共に意気揚々と野営地へ帰還すると既に夕食の準備に取り掛かるジーンがいた。

ローズは夜中まで見張りである。

ナイフと平らな板を使って料理中のジーンは、帰ってきたランに向かって手招きしている。それを見たバズーは、ぐっと伸びをしたまま目だけをランに向けた。

「さて、腹も減ったし：具師？ 報告は飯を食ってから、つてこ
とでいいか？」

「全身濡れたまま報告しろ、なんて急かされなくてよかったわ。
じゃあ、また後で。ご飯の間に攻略の方法、詰めとくから」

「：もうなんだ、俺の出番ってねえな」

頭をかき混ぜながらばやいたバズーは、同じ城砦技師のもとへと向かう。ランも手招きし続けるジーンのところへ飛び跳ねるように近づいた。

ジーンの懷を覗き込む。

細長い筒状の入れ物に、干し飯と乾燥野菜とベーコンを細かく刻んだものを放り込み、水を少量投入。蓋の側面に書かれた魔導文字を『炊』に合わせると、ジーンの隣で剣の手入れをするシトラスに放る。

シトラスは顔を上げずに片手でそれを受け取ると、そのまま懷へと抱き込んだ。

卵を抱く親鳥か。

筒は合計3つ。ランとジーン、シトラスの3人分だけである。

基本的にここにいる傭兵たちは金で雇われた者たちである。一応ギルドの面子があるとはいえ、金が絡めば敵方にコロリと寝返る可能性もあるのだ。

お互いに信用はしていても、信頼はしてない。

食事は自分で、が鉄則である。皆で同じ釜の飯を食ったら睡眠薬が混入されていて、気がついたら頭と胴が離れていましたでは目も当てられない。

「バズーの機嫌がよさそうだが？」

「まあ、砦攻略が何とかかなりそうな雰囲気になってきたからねー。サンドバックにも報告しとかないと、色々煩いだろうから」

「ライバック、な」

ジーンは苦笑して、ランの頬に触れる。

ポツリと何かを呟く。魔術の気配が発動し、湿って冷たくなったランのつなぎが見事に乾いた。ランの体の表面や服に付着した水分だけを蒸発させた、一見地味だが恐ろしく制御の難しい魔術である。下手をすればランの体内の水分まで蒸発させ、干物が一体できあがる。

「ん、ありがと。一応私も魔術制御に関しては天才の域だと思ってるけど、さすがに自分の干物が出来るのか実験する気はなかったわ」

「お前がまずバズーで試すとか言わなくてよかったよ」

まあ、それも考えたんだけど。と呟くランの言葉はあえて聞こえない振りをするジーン。

「っていうか、お嬢？ 俺の存在が見えているようで見えていないようだけど、俺に対して何か言うことってないの？」

「ん？」

いつの間にか剣の手入れを終えたシトラスが、ジト目でランを見つめていた。

「あー、ああ。森の中引き摺って連れてきたせいで頭がボコボコになったこと？ それはそもそもシトラスが勝手に気絶しちゃったからでしょーが。気絶させたのはジーンだし。ついでにそもそももう一度使うと、シトラスがローズと思わず赤面したくなるような18歳未満禁止的な罵り合いを始めたからだと思うの」

すらすらと言葉を紡ぐラン。

ちなみに、シトラスはローズと罵り合いをしたが、18禁な会話をした覚えはない。

「更にそもそも使うと、シトラスとローズが2年前のあの嵐の日に出会っちゃったことが原因だったのね。更に更に、結局のところシトラスがこの世に生まれてこなければローズに出会う事はなかっただろうから、そこが大元の原因だと思うわ」

「：原因のすぐ替えとかならともかく、いきなり俺の人生を全否定されると凹むんだけど」

疲れたように溜息を吐き出すシトラスに、ランはゴメンゴメンと笑いながら抱きついた。この程度のスキンシップでシトラスの機嫌が直るのだからチョロイものである。

「シトラス、幼女趣味を疑われたくなければ今すぐランを離れたほうが身の為だと思うぞ」

ジーンの言葉にランとシトラスと一緒に顔を上げれば、ジーンの後方で驚愕の表情を浮かべて仰け反るレーベッカとパトリックの姿があった。

シトラスの名誉のため、とんでもない誤解をしてくれたレーベッカとパトリックにはランがガツンと言い聞かせておいた。

体に。

額をでこピンされたレーベッカと内臓を殴打されてしばらくのた打ち回ったパトリックと共に、ランたちは円陣を組むように適当な地面に腰を下ろした。

「眼鏡とパトリックが一緒にいるの、多いね」

「え！ ああ、パトリックさんが薬学の事について質問してくるから答えてるだけですよお」

その科白に、パトリックががくりと項垂れた。どうやらパトリックの方はレーベッカに熱を上げているようである。

質問攻撃が効果のあるものでないのは、レーベッカの態度を見れば明らかであるが。

ランは心内でパトリックの不毛なアプローチに同情しつつ、シトラスから放り投げられた美味しい匂いを放つ筒を受け取った。レーベッカを見上げる。

「眼鏡、ご飯は食べたの？」

「あ、はい。いただきました。乾パンでしたけど、ドライフルーツ入りでおいしいんですよ。ギルドの前の通りにあるお店で売ってるんですけど、クッキーとかすごい人気なんです」

美味しかった、と言いつつレーベッカの目はランの手の中でホカホカと湯気を立てる筒を凝視していたが。

「私たちはこれからなんだ。無作法で悪いけど、勝手に食べるよ」
「構いませんよお、ランさんが戻ってくるまで待てずに食べちゃった私ですから。で、それは何の料理です？ お粥？」

期待に満ちた目に、ランはふふんと胸を反らせる。

「私の発明品にかければ、味気ない野営中も美味しい食事が取れるんだから！ ちなみにこれは、野菜粥。野菜の旨味とベーコンの塩味が程よくマッチした一品なのだ！」

「口を挟む様で悪いんだが、作ったのは俺だからな」
隣で突っ込むジーンを無視し、ランは筒の蓋を開ける。

思わず涎が口に溢れそうになるほどの美味しそうな匂いが辺りに充満し、レーベッカとパトリックの喉が鳴る。パトリックの食事も味気ないものだったらしい。

「じゃ、遠慮なくいただきますーす」

美味しそうに野菜粥を頬張る3人に、レーベッカとパトリックは二人揃って頭を下げた。

「「その導具、発注します！」」

「まいどありー」

実演販売の成果である。

腹が減っては何も出来ぬ（後書き）

携帯料理機『ひとりのできるもん』。炊く煮る焼く保温だけでなく、冷凍保冷も出来る優れもの。銀板4枚の良心価格で販売中。

豚もおだてれば喋る（前書き）

ぼつぼつペースです、すいません。
あ、見捨てないでくださいね。

豚もおだてれば喋る

ゴロゴロと空が鳴る。

遠くの暗闇が、僅かに稲光によって照らされるのを男は明るい室内から見つめていた。

年の頃は35歳程だろうか。

縦にも横にも大きな体は筋骨隆々として今にも服がはちきれんばかりであるし、よく日に焼けた体のいたるところに刀傷と思われる古傷が白く浮かび上がっている。

顔は精悍な顔つきであるが、無精ひげが伸びているせいでそのへんのただのおっさんのようである。だが、その顔の右眉から右目を掠めるように斜めに大きな刀傷が走っているのが、ただのおっさんとは異なるところだろう。

男の名はエラン・グローリー。ラヴス王国第三師団で連隊長を務める男である。

このカーマイン砦に詰める兵士たちの直轄の連隊長であり、彼らに最も戦術的な命令を下せる男でもある。

「何か気に病むことでも？」

と、グローリーの後ろから声がかかった。

振り向けば、赤と金で装飾された室内が嫌でも目に入る。砦の中でも最も警備が厳重である本郭の最上部、作戦司令室である。…というか、であった。

「あと5日もすれば援軍も来る。特に気にすることもあるまい」
趣味の悪い椅子に嵌め込まれた豚が喋る。

もとい、金をふんだんに使った豪華な椅子にたぷんたぷんの贅肉のいっぱい詰まったお腹を揺らすゼノン将軍であった。

手には赤色に揺れるワイン。

將軍の足元には婀娜っぽい豊満な体をした女性が3人、かろうじて大事な部分だけを隠したようなきわどい格好で凭れ掛かっている。

グローリーはここを作戰司令室だと知ってるか！ と叫び出したいのを辛うじて飲み込んだ。

貴族出身のゼノン将軍がこのカーマイン砦の最高司令官として着任したとき、彼が真っ先にした事は兵士たちに叱咤激励を飛ばすことでもこの辺の地理を調べることでも砦の設備を視察することでもなかった。

作戰司令室の改築である。

簡素で質素、盗聴などの対策もばっちりだった部屋を、あろう事か窓を取り付けて風通しを良くさせたのだ。しかも床には赤い絨毯を敷くわ金やら宝石やらで装飾させた家財道具を置くわ、やりたい放題。

挙句、作戰司令室の床に水を流し込んだり宝石が嵌め込まれたり、砦内部の部屋にも水を流し込んだ。そのせいでグローリーの寢室だった部屋はきのこが繁殖する有様である。

これに関してはまあ、仕方ない措置だったとは言えるが……。だからといって、その装置の配管にも金やらなにやらで細工するのはどうかと思う。

一応これでも最高司令官であり、グローリーの正式な上官になった人間である。

何とか剣を抜くのは思いとどまったが、上官でなければ真っ先に自分が切り殺していた。

「そうは言われますが、ゼノン将軍。本日のグラナダの侵攻に^{レイニィ・レツド}あ
の鮮血の雨がなかった事が気に掛かりませんか？ 今まで全ての侵攻に先陣を切ってきた男です、それが今回出てこないのがおかしい」

「単に、休暇だったんでしょ」

お前と一緒にするな！ と口に出そうとするのを、理性と意志でもって押しとどめた。

この豚将軍、砦の仕事は全て秘書とグローリーに押し付けて、自分は連れてきた美女たちと日がな一日酒池肉林に耽っている。

「傭兵に休暇など、ありませんよ」

それだけを唸るように言うと、ゼノンはグローリーを小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「ほお、流石は元傭兵。よく知ってますな」

「……ええ、知っています。よく、ね。だからこそ、戦場にいる時の彼らはすべからく仕事中なんすよ。休暇などありえません」

嫌味を振り払って答えれば、ゼノンは僅かに眉を寄せた。反論されるのがお気に召さなかったらしい。

「鮮血の雨を戦場から外してまで、何らかの作戦が進行しているのだとすれば……」

「馬鹿馬鹿しい！ だからといって、この砦の導具があればどんな攻撃も届かないことぐらい、グローリー君も知っているでしょう」壁際の床を水が流れている。その水の中には魔導文字を書き込んだ宝玉が10ばかり沈んでいた。

ゼノン将軍が自国から持ち込んだ導具らしい。

堀へ入れるための水を螺旋状に外からぐると郭内へ取り込むことで、カーマイン山脈にもともと存在する霊的な力を取り込む。それを魔力に変換させて導具を発動させ続けている、という話であるが具師でもなんでもない自分にはよく分からなかった。

グローリーは導具を指差したままふんぞり返る将軍を冷めた目で見つめた。

「確かにこの導具はすばらしいものです。ですが、何事にも完全なことなどありません。この導具にしても同じことでしょう。もしかししたら、グラナダのギルドから具師が派遣されてくるかもしれません」

「ふん。グラナダ程度の技術国の具師など、恐るるに足らんでしよう！ 魔導文字を打ち消すにしろ、上書きするにしろ、10以上の文字数など書けるはずがないのですからな！」

——この一言。グラナダの具師ラン・ホージョーに聞かれたならば確実に彼女を敵に回しただろう。

そんな事は露知らず、高笑いし続ける豚。

足元の美女たちが盲目的な感じでゼノン將軍を褒め称えている。彼女たちの目を曇らせているのは愛でもなんでもなく、権力とお金だろうが。

その導具の性能が凄いのは分かっているが、自分の技量でもなんでもない他人作のわけも分からないものをよくもそこまで信じられるものだ、とグローリーは呆れたように息を吐いた。それは自分の腕に命を預けてきた元傭兵としての意見だった。

「：そうですか、分かりました」

グローリーは堅苦しい形の敬礼をする。

作戦司令室を自室に変えてしまうほどの非常識さを持っているこの豚將軍は、こういう格式ばったことが大好きである。自分に面会するための作法や、挨拶の仕方、果てはこの部屋の退室の仕方にとるまでありとあらゆる作法を下級兵士にまで頭に叩き込ませた。

ようは、自分がいかに偉いかを皆に見せつけたいのだろう。

退室の作法にのっとってグローリーが若干ぎこちない動きをすれば、將軍の足元の女性たちから堪えきれない嘲笑が洩れる。

「相変わらず、作法が下手だな。まあいい、下がってよいぞ」

まるで猫か何かを追いかうように、ゼノン將軍はしゅしゅと手を払った。

一礼して扉を閉める。閉めた直後、グローリーは扉に向かって首を掻き斬る動作をした。

呪いの言葉も一緒に呟くと、扉の横で不眠番の兵士2人がおかしように笑っている。

「猫を被るのも大変ですね、グローリー殿」

「おお…、今のは内緒にしろよ」

懷から飴玉を取り出して、兵士たちに放る。

と、横合いから細い腕が飛び出してきて放ったはずの飴玉を奪い取られた。

銀縁の眼鏡をかけたインテリそうな金髪碧眼の青年が憮然とした

顔で飴玉を睨みつけている。グローリーではない、飴玉を、である。

「：仕事中、仕事中、仕事中」

「念仏みたいで悪いがな、ソーラノ。飴玉をその兵士たちにやっつけてくれ、お前にもあるから」

ソーラノと呼ばれた青年は渋々ではあるが、飴玉を苦笑する兵士たちに壊れ物を渡すようにそっと手渡した。

頭を下げる兵士たちに見送られ、グローリーは作戦司令室を後にする。斜め後ろをソーラノが追従する。

「それで、將軍はなんと？」

「気にするな、導具があればどうとでもなる。そんなとこだ」
思わず、と言った風にソーラノが溜息をついた。

「そんな短慮でこの戦争が乗り切れるとも思えません。王は一体何を考えてあの豚を：失礼、あの豚將軍を派遣してくれたんでしょね」

「大方、貴族院のほうが手柄と利権のためだけのために王に申告したんだろ。っと、ソーラノ」

グローリーが鋭い目を青年に向ける。ソーラノはその視線から目を外すことなく見返した。

「援軍到着は？」

「5日後：夜が明ければ、4日後です」

「急がせろ」

「はっ」

ゴロゴロと、稲妻が鳴る。

明け方には雨になるだろうか。

船頭一人でも船山に上る

夜の森に明かりが灯る。

僅か10メートル先まで見えるかどうかと言う程度の光源であるが、その明かりの元には何人もの傭兵たちが顔を付き合わせていた。

「うんわぁ、何このむさっ苦しい構図」

ゴロゴロピツシャーンと空の上のほうで稲光が輝き、雷の音が鳴り響く。

が、ランのぶしつけとも言えるこの発言。ジーンには、傭兵たちの心にぐっさりと言葉が突き刺さる効果音に聞こえた。

そもそもこの野営地にいる女性はランとレーベツカだけであるから仕方がないといえれば仕方ない。その中にローズはあえて入れるつもりもない。あれを女性、と称するのはジーンじゃなくとも耐えがたい苦痛を伴うだろう。

緊張感を伴う作戦会議。

その中にあってもランはまったく変わらない。

ゴロゴロと唸りを上げる空を一瞥し、

「あっちゃー、この分だと夜中には降り出しそうね。この間のサーカスの時といい、今といい：誰よ、雨男は」

「雨女じゃねーの？」

思いつきりシトラスを殴りつけている。

「この事はあとできつちりと検証しましょ。とりあえずっと」

頬を押さえて転がるシトラスを脇に放置し、ランは周囲を見回した。この場の責任者はライバックのはずだが、どういうわけかランが仕切っている。

攻略の作戦を思いついたのがランなので、誰も文句をつける者はいないだろうが。

集まったのは砦攻略にと召集されたメンバー7人のほかに、ライバックを入れた戦争のために集められた傭兵が3人。ライバックは

ここの責任者であり、他の2人は斥候らしい。砦攻略に対して地理的な問題で聞きたいことがあるならば、とライバックが連れてきた。ランが頷く。

「ローズはいないけど、一応主要メンバーは皆揃ってるかな？」

それじゃ、作戦を説明するね」

指をぴつと立て、超簡単に一言。

「砦の魔導文字を上書きして、砦の外壁に大穴を開けようと思いまーす」

「…」

「…」

「えっ！？ 何その無反応！」

「はあ？ それだけ！？」

パトリックが突っ込んだ。

主要な部分はしっかり話してくれたのは確かだが、自分たちが聞きたいのはそのために何をしたらいいのかという部分である。

何だか色々通訳紛いのことをしなければいけないのではないだろうか？

頭痛がしてきた。ジーンは溜息を吐きながらこめかみを揉んだ。

「ラン、やる事は分かった。兎に角俺たちが何をしなければいけないのかを聞きたいんだがな」

「あーそっか。そうか、分かんないか」

ランはそう言いながら、何故かバドーの上着を勝手に漁る。

バズーは上着を着たまま、である。身内の欲目なんかでなく可愛らしい少女に迫られてまんざらでもない、などというちょっと人格疑うような事はなく、彼は悲鳴を上げて仰け反った。

「ちょ、具師さん？ …俺のストライクゾーンは50歳から70歳までだから！」

「タレ目の趣向なんて聞いてないわよ！ つつーか、アンタ老け専なの！？ ああもう、いいから水精思念体^{ウォータービープル}を出しなさい！」

馬乗りになるラン。バズーは慌ててズボンのポケットからピンク

色の小さな小瓶を取り出した。

「老け専って言うな！ 熟女趣味って言って！」

「熟女通り越しとるわ！」

「じゃあせめておばあちゃんっ子って」

「うがあああ！ 体内の水分抜いて、アンタも枯れさせたらーか！」

暴れだしそうなランを、レーベツカが縋りつくようにして止めていた。

ジーンは今度は目頭を押さえた。もうホント、泣いてもいいだろうか。ラン、レーベツカ、そしてバズーとどうしてこう性格に何らかの欠陥を抱えるような人間がここに揃っているのだろうか。

荒い息を吐きながら、ランは皆に見えるようにバズーから借りた小瓶を翳してみせた。

「これ、水精思念体って言ってね、水の流れを登る性質があるの。元々は城砦建築なんかで水源の確保や調査に使うものなんだけど。今回はこれを使って導具を破壊するつもり」

と、ランが何かに気づいたように手を打った。

「あ、そういえば…あの砦の再生能力について色々分かったこともあるから、それから話さなきゃ駄目か」

「壁に何らかの再生能力があるのかも、という話でしたよね？」

レーベツカが問う。

「壁には何の問題もなかったわ。精々オリハルコン製ってことぐらいかな。で、再生能力が付与されてたのは外壁、砦内部と満遍なく巡る『水』だった」

まりよくをとおさない

「なるほどな。オリハルコン製の壁に導具をつけたとして、どうやって魔力を流しているのか疑問だったが…それなら納得いく。壁に水を流せば再生するという事だな」

絶えず水が流れているとなると、壁に穴を開けたところで瞬く間に修復されるだろう。

「ジーンの言う通り。導具の効力が水からもたらされるものなら

ば、導具も水の中でしょーね。そこで使えるのが水精思念体なのよ」
きゅぽん、とランが瓶の蓋を開けると、中からピンク色の不定形物質がデロリと出てきた。

若干気持ち悪い。

「で、俺が砦のところで言ったと思うんだけどな。その何かを持つことも引っ掛けることも出来ない、ただ水を遡るだけのスライムにどうやって上書き用の導具を持たせるんだっての」

「確かに。言っておくが、うちのスライムに魔物と同じように明確な意志があると思うなよ？ 水を登るだけの人工生命ホームクルスだからな」
バズーとクスが続けざまに言うのと、ランは自分の懐から手のひらに乗るほどの小さな布の袋を取り出した。

中に何か入っているようで僅かに膨らんでいる。

「あのさ、寄生植物って、知ってる？」

「寄生植物。他の生物から栄養を取る植物で、自分でエネルギーを作らない独立生活を営まない植物と自らもエネルギーを作る半寄生タイプの植物があります。前者はナンバンギゼルやハマウツボ、後者はヤドリギなどでしょうか」

「はい、よくできました」

レーベツカの辞書を丸読みたような説明に、ランはやる気の無い拍手を送った。

「実は、スライム系に寄生する植物があるんだよね」

袋の口を開け、ランは手のひらに中身を空けた。

全面に棘のついた、米粒ほどの小さな種子が転がっている。種子の色は黒や灰色、赤や橙と様々だった。スライムに寄生するという性質の同じ系統の、違う種類の種子なのかもしれない。

で、ランはこれを使うと言う訳だが。

ジーンは胡乱気な顔をランに向けた。

「ラン…。上書きって、言ったな？」

「そーだねー」

「書くのか？ これに？」

「そーなんだよねー」

ランの顔が引き攣っているのは見間違いではないはずだ。

「この植物の名前は、ソラムス。スライムっていうか、粘性とか弾力性のあるものになら何でも寄生しちゃう結構お馬鹿な植物だよ。基本的には植物の樹液にくっついてるか、魔物のスライムにとっついてるかしてるかな。全く栄養のないゴムとか蠅取りリボンとかにもくっつく事もあるから、見慣れてるかもしれない。多分、芽が出ればあーそういうええ見たことあるなーって言うかもね」

全員に種子が回される。

米粒大の、周りにびっしりと棘の生えた種子。

「もう一回聞くぞ？ 書くのか？ これに？」

「そーなんだよねー」

前にも何か同じような言葉を繰り返した気がしなくもない。

「一度寄生したら、ソラムスは決して離れないって言われているほどその寄生力は半端じゃないの。砦を巡る水的水流なんかじゃ剥がれたりしないはず」

「だが、そもそも文字を書いたものを放流するとして。文面というか導具として機能するのか？」

ライバックが不思議そうに首を傾げる。その問いに、ランは一本の竹筒をライバックに放り投げる。夕方ランはライバックに銀板1枚の価値のある導具を放り投げただけに、ライバックは今度はしっかりと両手で竹筒をキャッチする。

「それ、銀板4枚」

「！！」

「その竹筒の魔導文字、横に文字が切れるようになってるの、分かる？」

ランが放り投げたのは、携帯料理機である。

筒の上部をぐると囲むように『温』『焼』『蒸』『冷』『凍』の5文字が刻まれているのだが、文字の上と下で半分に切れるようになってる。更に文字が上下で一つずつズレて書かれているため、

『温』の文字が上下重なっているときに他の文字はずれており、2つの文字が同時に機能する事はない。

「文字に魔力を通すと、どんなに文字が一つずつ離れていてもその効果が消える事はないし、上書きや打消しをしない限り効果は続くのよ。それを解除する場合は文字そのものを意味が通じないように一部切り取るとか分割するとかしない限りね」

それを作っているときに気づいたんだけど、とランは前置きした。「効果が続くって言うのはその竹筒で失敗した経験があるからなんだけど。それ、携帯料理機ってね。炊く煮る蒸すとか結構色々使える導具なんだよ。水を沸騰させといて、沸いたから保温させとこうと思ったのよ。で、『焼』から『温』にしたはずが：気づいたら水がゼーんぶ蒸発してた。大変だったわ、空焚き状態で放置しといたらちゃったからいきなり竹筒が燃え出してさ」

だからこそ、その竹筒の文字は上下で半分に分けられている訳だ。空焚きした竹筒が燃えた件は、消火活動に参加した守護者の^{ガーディアン}テデイバアが一部燃えただけで収まった。

「今回も魔力を通してながらスライムと一緒に流すから、大丈夫。そもそも水に魔力が充満してるから、魔力切れとかそういうことを心配する必要が無いからラッキーだわ」

ライバックはじっと携帯料理機を眺めている。後ろに控える斥候の2人も同様。

そもそも今の説明をするのに携帯料理機を取り出す必要が無い。要はアレである。時は金なり、いつでも商売。

「ま、心配する事は一つでも少ないほうがいいものね」

色々あるから、と呟くランとジーンは一瞬目が合った。

別に望まれているわけではないとは思いますが、目が合ったのでとりあえずジーンは一言。

「ラン、もう一回聞か？」

「ジーンは黙ってて。既にバズーが砦の水の流れを調べるためのスライムを砦に放流してきたから、一番最短距離で最上部へ行く道

筋を調べる。その調べた道筋に、ソラムスをくつつけたスライムを流して導具を上書きして破壊する。その後、壁を崩して突入する。これが、今考え付く上での最上の作戦だけど、どうかな？」

確かにこれ以上の作戦が出ると思えない。

全員、顔を見合わせながら頷いた。

「よし、全員頷いたところで今度は俺が聞いてやろーか。嬢ちゃん、これに書くの？」

「ええいシトラス、みなまで言わなくていい！」

ランの怪力で殴られて悶絶していたシトラスも、途中から作戦会議には参加している。

シトラスが小さな粒を指先で摘みながらそう聞けば、ランの顔が歪んだ。

「ええっと、スライムに記憶させた道順を図面に書き写すのは……専門知識のあるバズーとクスさん、それから眼鏡、アンタも出来るよね？」

「た、多分。おばあちゃんの知識を閲覧すれば、何とか……」

自信無げに頷くレーベツカに、ランは2本の指を立ててピースサインを作ってみせる。

「2日で仕上げて。援軍が来るのはあと……4日ぐらい？ 援軍が到着するまでに砦を落としたいでしょ、ライバックさん？」

ライバックが頷く。そのまま後ろに控えていた男に何か耳打ちした。恐らくこれから本軍のほうへ侵攻の相談をしにいくのだろうし、ラヴスの援軍の様子も見に行くのだろう。

「で？ ランはそれに魔導文字を刻むわけだが？」

「向こうの文字数が分からない以上、20文字程度じゃちよっと心もとないわ。3日で30文字はやるわよ、こんちくしょう」

小さな米粒大の大きさに、棘を幾つか取り除いてから文字を刻む。具師の誇りにかけて、なんとしてもやり遂げるつもりだろう。

「あ、一応何か不具合があったとき用に予備も作っとかなきゃいけないから、結局60文字は超えるかなー」

今回の貧乏くじは、どうもランが引き当てたようである。

船頭一人でも船山に上る（後書き）

後日、ライバックから依頼書が届きました。

『携帯料理機×3個』

はい。まいどあり！。

悪魔たちの囁き（前書き）

更新遅くなります、とか言っておいて何ヶ月経ってんだろう。
うう、筆が進まない…。

悪魔たちの囁き

ランが目を覚ましたのは、日が随分と高い位置に來た時刻であった。

木々の間に張られたハンモックに揺られながら空を見上げれば、厚手の布が目に入る。ボツボツと音が鳴っているところからして雨が降っているのだろう、とぼんやりと考えた。

雨を凌ぐためにハンモックを覆う布は、水中を泳ぐ毛の長いイタチに似た動物の毛を織り込んだ布に『防水』の刺繍をした導具である。普通の冒険者もこの厚手の布を常備しているが、長時間雨などの水に晒されると当然濡れる、所詮耐水。その点、ラン特製の導具は水を完全に弾く。屋根代わりとしてはもってこいなのである。

目をこすり、ついでに欠伸までしてからハンモックから転がり落ちる。ただし、着地は完璧に決めた。そもそもハンモックから綺麗に降りる方法が分からない。

ばしやり、と足元で水が跳ねた。

「ラン、起きたか？」

「はよー」

「ああ、おはよう」

ランの起床に気が付いたジーンが言葉と同時にポンチョが投げ渡す。防水の布と同じ素材で作られたポンチョは、防水・保温用の合羽代わりである。

「随分よく寝てたな。朝飯はシトラスが腹に抱えてるはずだ、今ライバックに呼ばれてるから先に顔を洗って来い」

ジーンその言葉に、ランはもう一度大欠伸をして頷いた。

上からタオルが降ってくる。

「いつも思っただけどさ、ジーンアイテムストックの物質保存アイテムストックってホント便利よね。まるでネトゲのアイテムウィンドウみたい」

「…？ アイテム…ウィ…？ 何だって？」

首を傾げるジーンに、ランは何でもないと言った。

「便利は便利だけどナマモノは入らないし、容量は筆筒の引き出し2個分ぐらいしか入らないって言うのはネックよね。そもそも私はそこからタオルを取り出されるところしか見たことないんだけどね」

「タオルとランの着替えと刀ぐらいしか入っていないがな。あとは、昔ランが抱いて寝ていた兎のぬいぐるみとか……」

ジーンの言葉に、ランは顔を赤くして叫ぶ。

「捨てろ！ そんなもの！」

物質保存の空間へは不可侵だと分かっているとはいえ、ランはジーンに掴みかかる。

と、

「随分と遅いお目覚めだな」

ぎゃいぎゃいとジーンに朝からじゃれついていたランは、後ろから掛けられた声に振り返った。

「ああ、サンドバックさんか。おっはようございまーす」

「……ライバック、だ」

額に青筋を浮かべたライバックに、ランは特に気にすることもなく何か御用かと首を傾げた。勿論、名前を間違えたのはほんの悪戯心である。

ライバックの後ろでは腹に食事入りの竹筒を抱えたシトラスが苦笑していた。

「既に技師の二人は砦へスライムの回収に向かった。で、お前は何をしているんだ。時間がないというに……」

「昨日の夜のうちにソラムスの棘は抜けるところ全部抜いたっての。ついでに水に溶けない、なおかつ植物にも文字が書けるインクを調査して。彫刻刀も研いどいたし、書く文字も概ね決定済み。それから突入時に使う戦闘用魔具なんかも爆発系を幾つかストックを確認してある。はっきり言って、私が失敗するとは思ってないから、次に重要なのは砦の内部に入ったときにどうするかだもの。兵舎と

武器庫、その他主要部分を大々的に爆破するのは定石だと思うし。そのへんは私だけじゃなくてパトリックとも協議して爆発物の種類とか考えとかないと薬品の相互作用とか化学反応とか面倒くさいことになるものね」

つらつらと言葉を連ねるラン。ついでにポケットから紫色をした一週間は爆睡できる魔具を手のひらで転がした。

ライバックが冷や汗を掻きながら片手を上げる。

「分かった、すまない。だからその手のひらで遊んでいるものを早々に仕舞え」

どうせならば頭を下げるとか、土下座とかさせたいランではあったが、流石にこの野営地の責任者にそんな真似をさせると色々と周りが煩いだろうと言うことで自重する。

一応これでも自重するという選択肢を取れる頭ぐらいある。誰彼構わず気に入らないからと言う理由で叩きのめすほど子供ではない。ないっつら、ない。

「それよりも、時間がないって言わなかった？」

顔を洗う水を空気中から魔術で生成する。どうせ雨降りだから、水には事欠かない。

ランが洗顔し終えてタオルから顔を上げると、眉間に皺を寄せたライバックが溜息をついた。

「お前は目端が利くな。レーベツカとはえらい違いだ」

「あの眼鏡の情報収集は基本的に目からだから、音による情報っていうのは逃しやすいでしょ。それになにより、眼鏡は対人スキルが少なすぎ。ギルドの依頼カウンターじゃなくって、苦情係でもやらせとけばそれなりに会話術とか身に付くんじゃない？」

「ギルドマスターにでも進言しておこう。…と、簡潔に時間がないという理由を述べようか」

ライバックがランの目をまっすぐに見つめた。

「ラヴスの援軍が、速度を上げた。到着は明後日…2日後だ」

ランはライバックを見つめ返すと、ふっと溜息をついた。

砦攻略の作戦は2日後。

時間的には援軍が到着するか、ランたちの砦攻略が成功するか、どちらも僅差であろう。むしろ、ランたちの作戦のほうが様々な下準備が必要な分、時間に多少の遅れが生じることもありえる。そうなれば人数的に劣るランたちのほうが分が悪い。

援軍が到着するまでに砦を制圧していればまだ勝機はあるかもしれないが、攻略前もしくはその最中に援軍の到着となった場合、数で潰されるのは目に見えていた。

「ライバックさん」

ランの決意の籠った声に、ライバックは頷いた。

「あまり気は進まんのだがな」

「それは仕方がないでしょう。こっちも命と生活とプライドがかかってる訳だもの」

ライバックの後ろでいい匂いを発しだした竹筒を振るシトラスが首を傾げる。

「何の話？」

「シトラスには：護衛として付いて行ってもらおう？ ジーンでも構わないんだけど」

「だから、嬢ちゃん何のはな：」

「斥候を2人付ける。だが、魔物が出る場合を考慮して、シトラスに同行してもらうつもりだ。あの小僧もプロの薬師だ、雨が降ったとて使い物にならないと言うこともないだろうな」

話に自分の名前が出ているにもかかわらず、ランとライバックの会話にシトラスはさっぱり入っていけない。声をかけても途中でさえぎられる始末だ。

だが、シトラスも黙っていない。

「嬢ちゃん！ だから、何だったの！？」

大声を張り上げると、今度はちゃんとランと目が合った。にやり。と悪魔の笑みを浮かべるラン。

「…ええと？ その凶悪な顔、何？」

「別に、シトラスに何かしてもらうとかじゃないから。ただちよつと、パトリックが街道の爆破するのに付き合っただけで、って話」

「ほー、街道の爆破ねー…って、え？」

ラヴスとグラナダを繋ぎ、様々な物資供給の要ともいえる街道をラヴスの援軍を足止めするためだけに塞ぐ。と言っているのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5054s/>

ぐしっ！

2011年10月10日14時14分発行